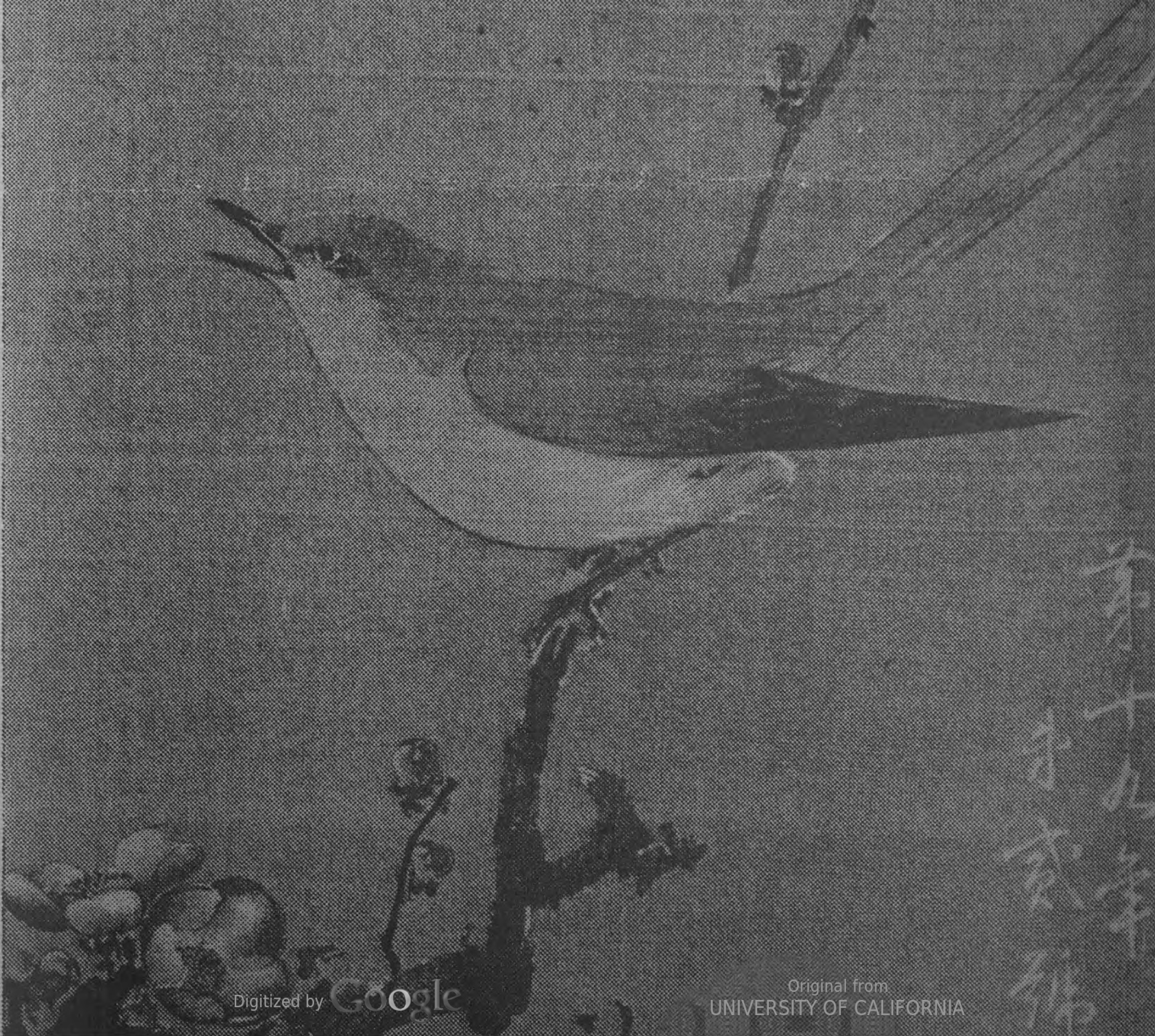
女鑑



第十九年第貳號

第弐號の目次


PEARL 毛髪料 CREAM
パール
毛髪の保護発育に注意せらるゝ諸君に告ぐ煉香油パールの有する特効は
黒色の美を全たからしめ特に頭髪の悪臭を去り衛生上唯一の必要品と認めらる
Pearl
スミレ香水本鋪 東京浜町一 平尾穴店




羽おりひも
當家発明の
製造には熟練多年の經験あり
製品の如何は實地に就て見られよ
東京よし町
電話浪花一五六番

雪中松



男爵 徳川厚君撮影

渡邊博士の家庭



前列（椅子によれる）右より
長女邦江君　忻三君　嚴君　令夫人美子君　次女久江君

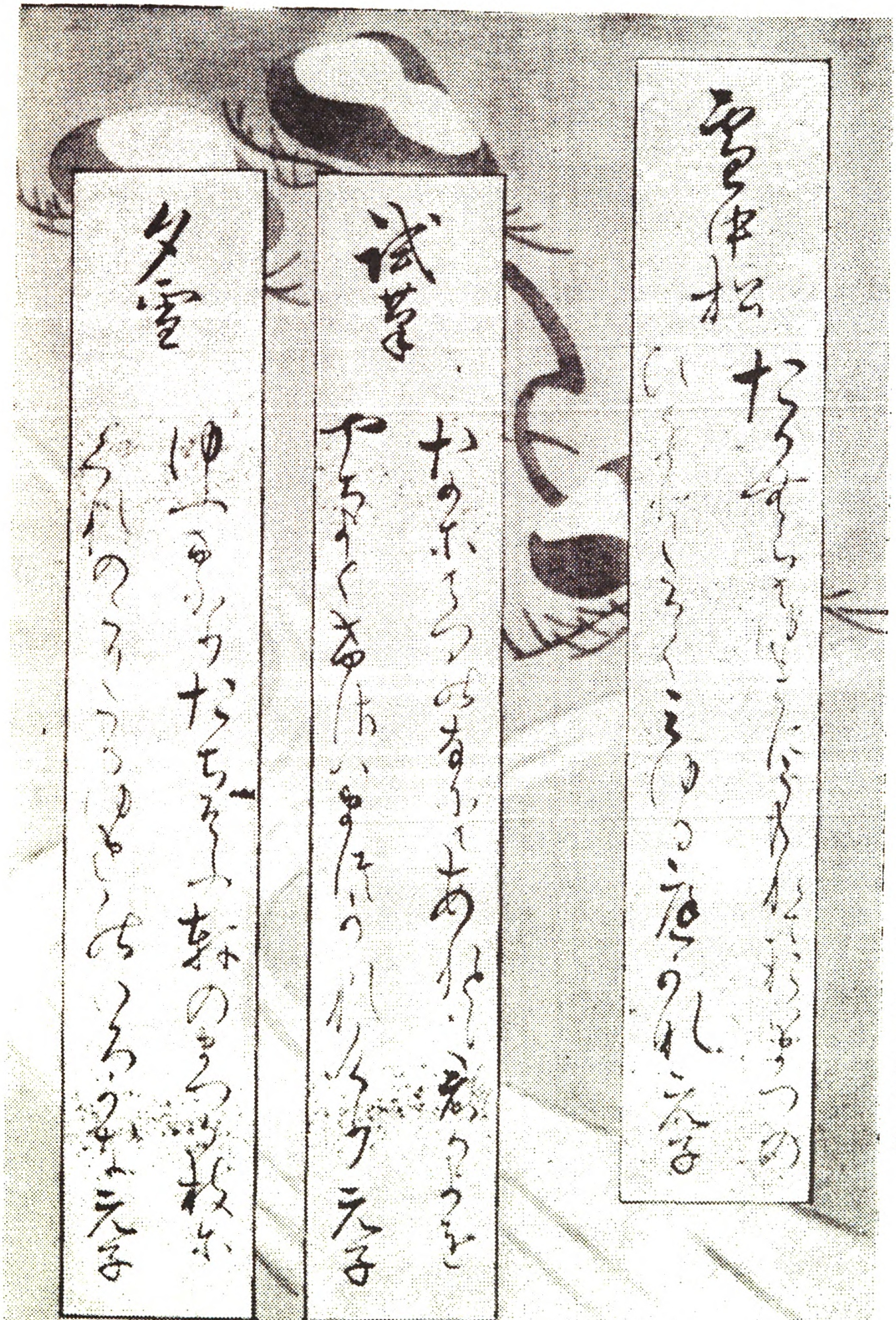
後列右より
長男哲一君　二男茂三君　三女晴江君　三男慶三君
四女幸江君　工學博士渡邊嘉一君

江木博士の家庭



法學博士 江木衷君 令夫人 榮子君

筆のあや



右は本年御歌會初の預選歌

柴田博士令孃　元子君作并筆

獨逸國ロールメヂシンス會社製品

皮膚特効美白新劑
（一名にきび知らず）

濃厚なる化粧液 ◎チ◎プ◎リ

○本品は濃厚なる原液なれば三倍程の水を加へ常に御用ひあれば自然白色艶麗の美顔たらしむる事を保證す

○本品は最る「ニキビ」「ハタル一日ニヤケ」其他「顔のアー」に奇効あれば朝夕洗面後手の掌に四五滴たらして塗布せば重きも十日輕きは五日位にて効あり

本品の縮圖



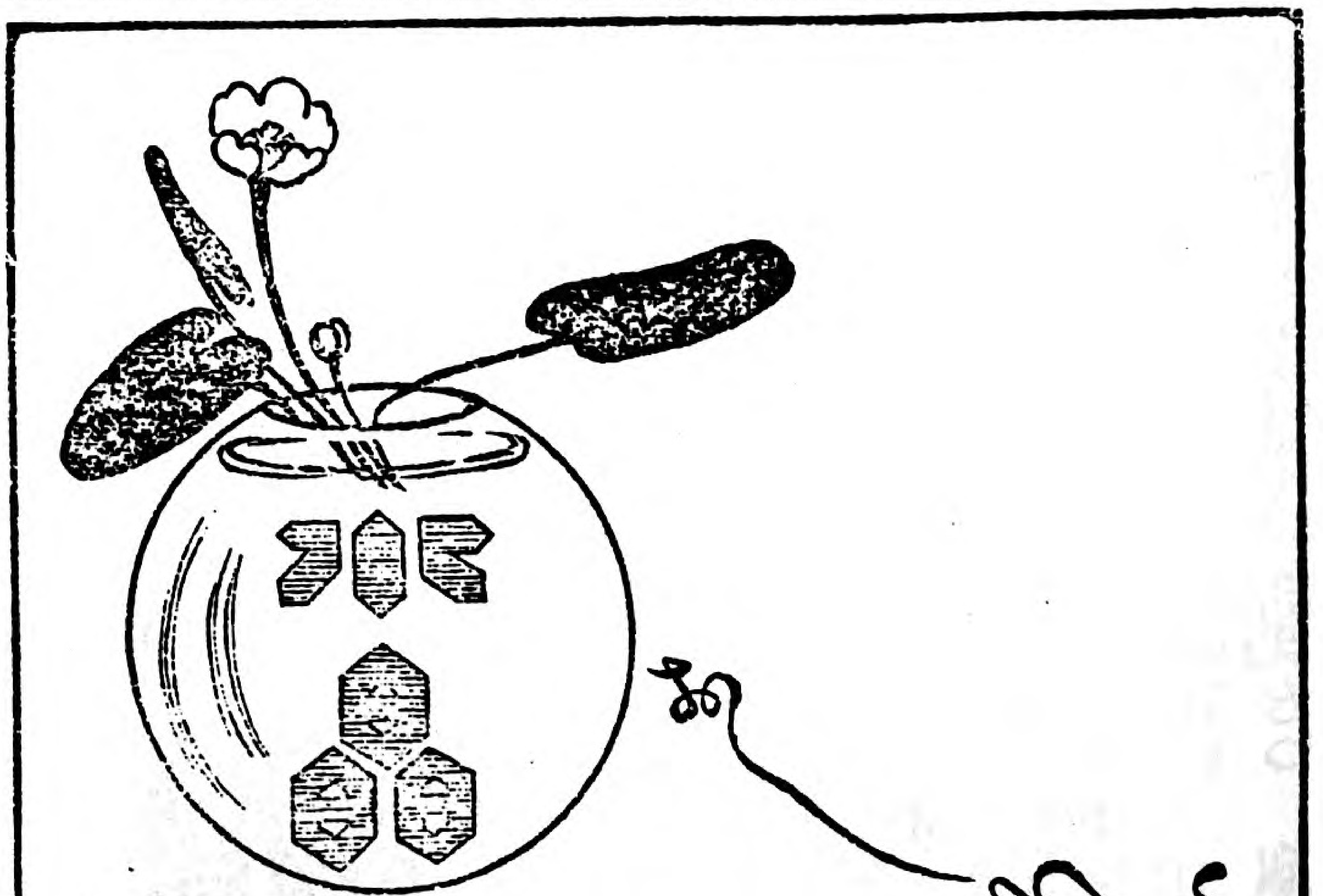
小瓶 二十五錢

○本品の効能顯著なる爲め遂に政府印紙を貼用するに至れり本邦に於て化粧水に印紙を貼用せるは本品を以て嚆矢とす

○市内は勿論到る處の賣藥小間物化粧品店にあり品切れの節は送料八錢（四瓶迄）相添へ代理店御へ注文あれば直送す

日本一手販賣 東京日本橋區本石町四 松澤常吉

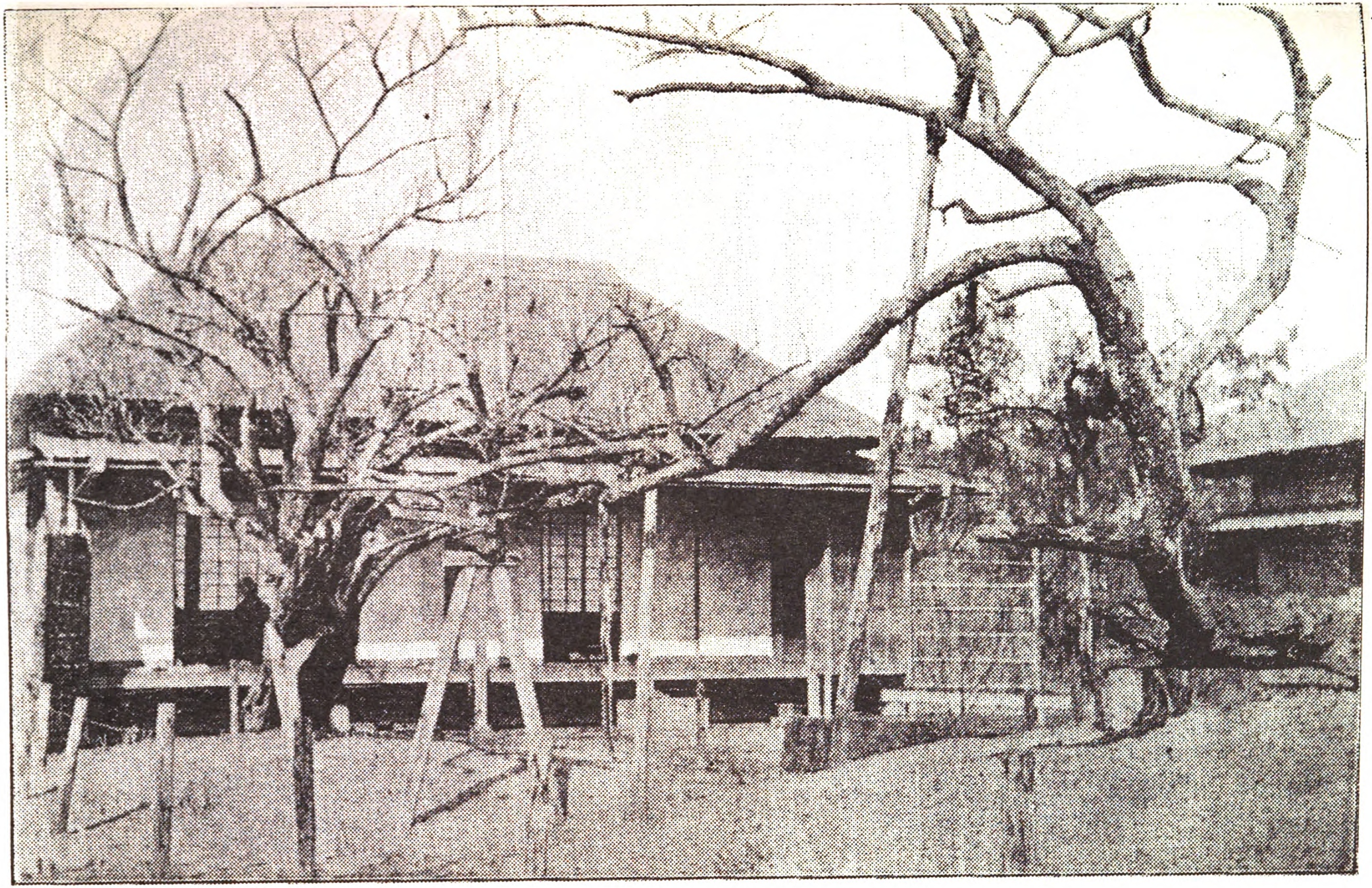
賣捌は全國至る處にあり



定價 小瓶十五錢 中瓶廿五錢 大瓶五十錢


さくら油
東京日本橋區よし町
特油化粧品
小間物商
よしや

江東梅園



伯爵 松平弄月君撮影

花かゞみ

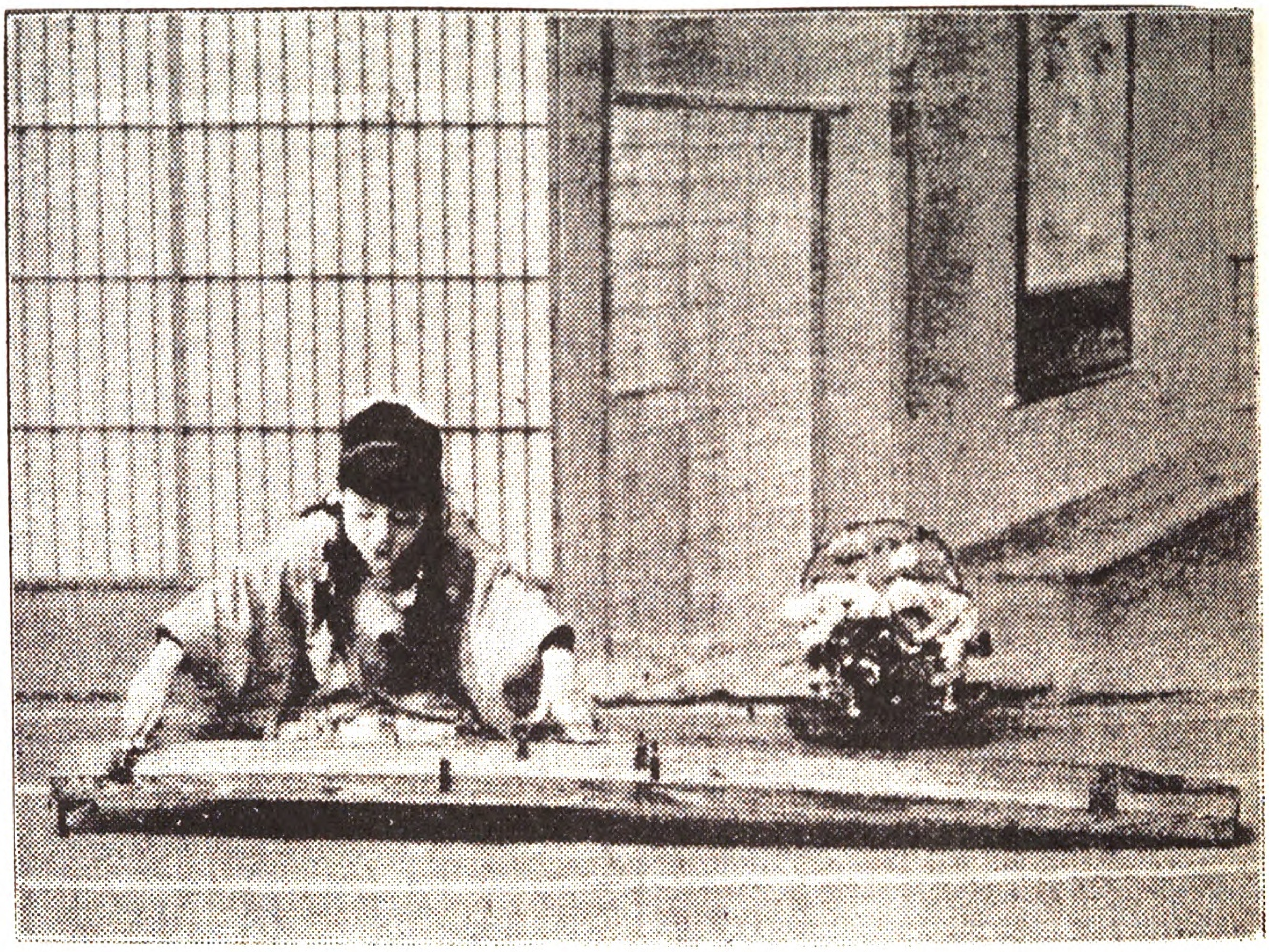


秋間錦秋女塾長



古市工學博士夫人

彈箏と割烹家



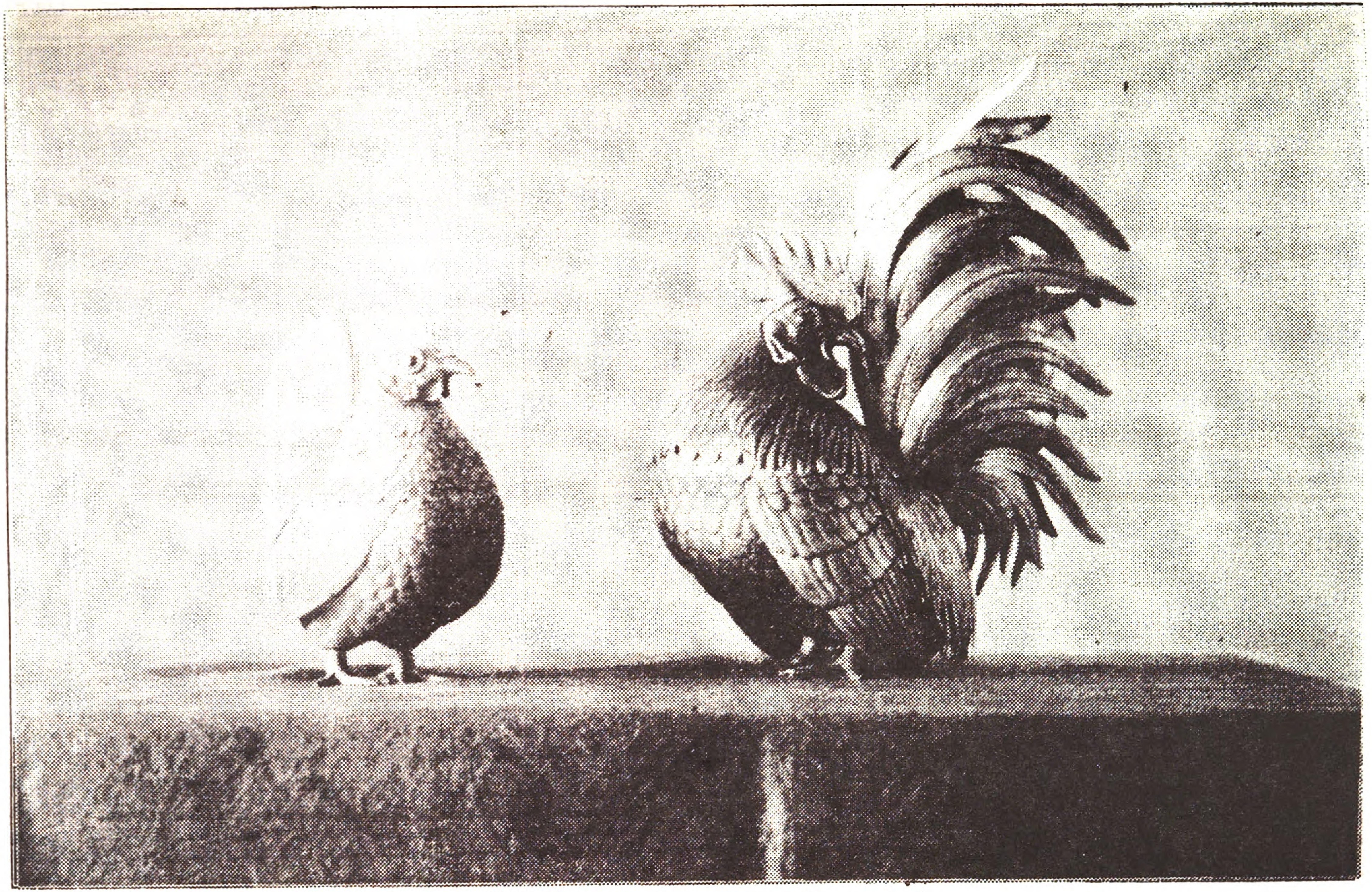
名は花子孃とのみ

誌友　中村千代君寄贈

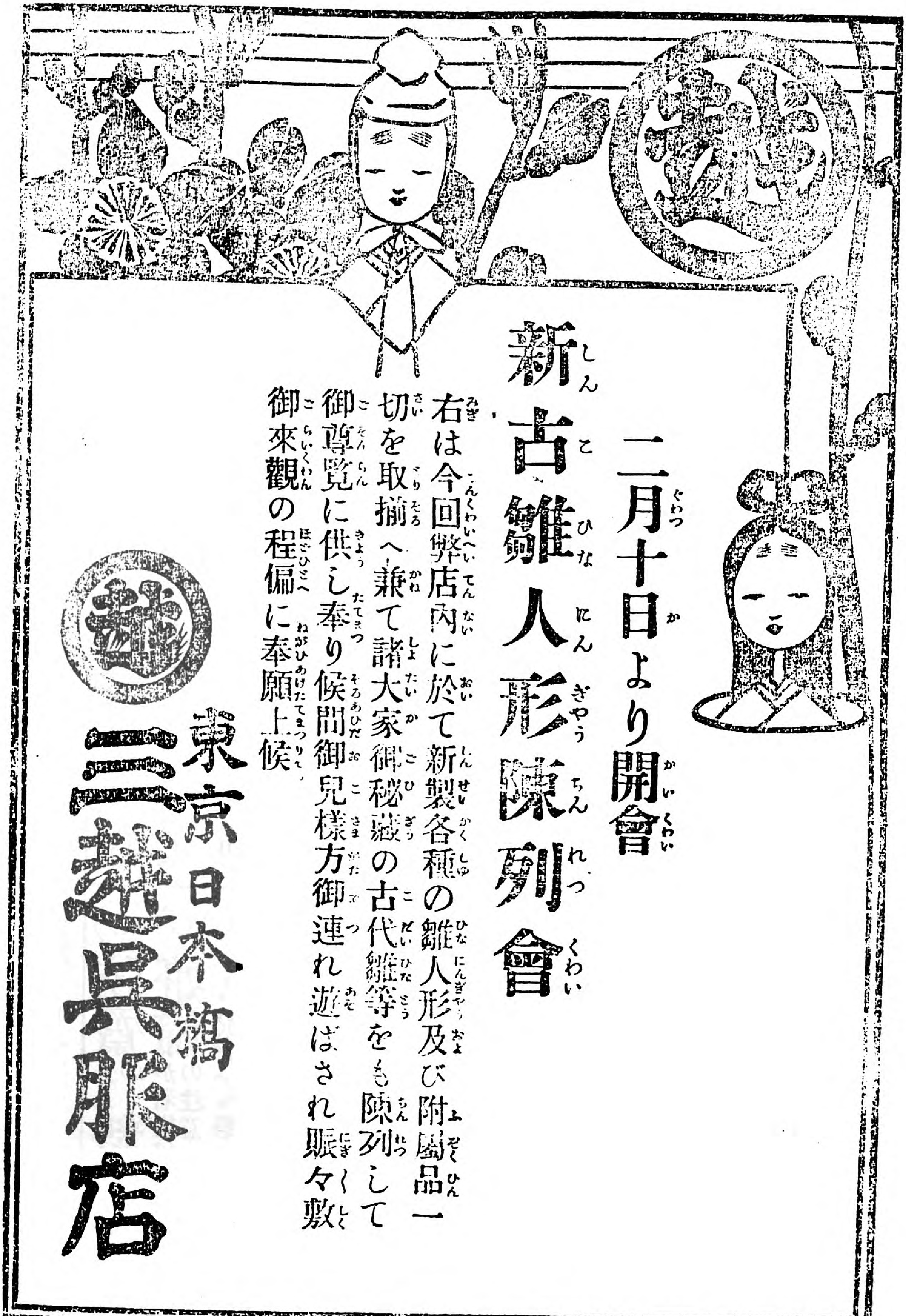


龜井割烹教場

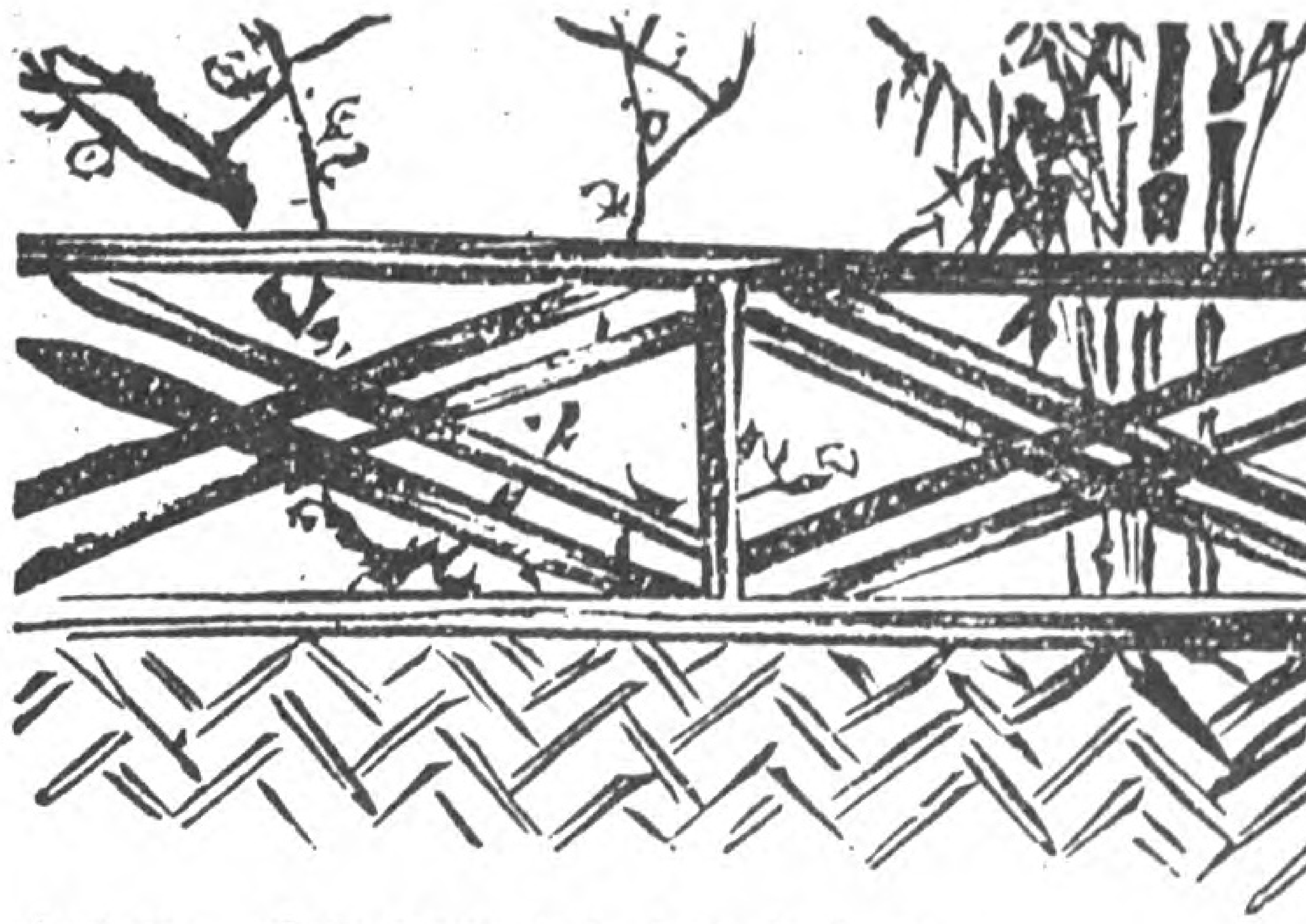
銀の鷄



井伊直方君撮影



二月十日より開會
新古雛人形陳列會
右は今回弊店内に於て新製各種の雛人形及び附屬品一切を取揃へ兼て諸大家御秘藏の古代雛等をも陳列して御尊覧に供し奉り候間御兒様方御連れ遊ばされ賑々敷御來観の程偏に奉願上候
東京日本橋
三越呉服店




釣合はぬ縁

女としてよき夫を持當てしほど幸福なることはあるまじ、去ながらよき夫をといふにもいろ〳〵の注文あり、さて門閥、地位、財産人格、才能、容貌の六拍子揃はせることはむづかし、されば綾錦を木綿襷に掛替えても容貌の美に走るものあり、容貌は二の次なるも才能を多とするものあり、才能はなくとも財産をと望むものあり、財産はなくとも地位高きをと願ふものあり、地位は低くとも門閥の高きを求むるものあり、さて人格に嫁せんなど〻心掛くるは、百中の一二ありや否や、されどその間にはほゞ釣合といふものあり、釣合はぬ縁の末遂ぐるものなきにあらねど、その多くは不緣に近くて

終るなり、氏なくしてたま〳〵玉の輿に乘當つるものあれど、その玉の輿思ひの外氣樂ならず、たゞ夫をして野に置くべき蓮華草なりしをと歎せしむるが關の山なり、然も禍はかゝる中より起り、殷鑑遠からず、數へ切れぬお家騷動の種は多くはそれなり、然もかくてこそ浮む瀬もあれど、永劫浮む瀬のなき所に身を沈むるものあるに至つては、沙汰の限りならずや。

近ごろ釣合はぬ緣の一實例あり、古稀に近き某顯官、婚を妙齡の美人に結ばんとす、將校婦人會の會合には、この緣を福引中に入れ、猫と犬の玩具を景品に出して、ニヤワンと云ふ、それは一場の笑草に終れどこれは笑うて過ぐすべきにあらぬ道德上の問題なり、或は云ふ世には幾多遊蕩の犧牲となりて、一生を日陰に終る婦人少からず、これは苟くも正式の結婚なり、それとこれとはもとより比較にならずと、さる說も立てられぬにはあらざるべし、去ながら遊蕩の犧牲たるを甘んずる婦人は論外也、これに對して正式の結婚と云ふ、その正式といふは法律上の手續にて、道德上の正式なるものにあらず、如何となれば、古稀に近しといへば曾孫のありてもよき年なり、妙齡の婦人はまづ孫と見て差支なし、孫とも見るべきものを妻とする身は、光源氏式果報なるべし、祖父とも見るべき人の妻となる身はいかに、また人生の一慘事ならずや。

一話あり、今はむかし一柳小松侯某少女を垣間見て思ひを寄す、少女はその藩内北條の農家の子なり、里人はその果報を羨む、されど少女はそのすべてに於て不釣合なるを非として、これを拒絕す、侯大に怒りて少女を裸體として函に入れ、蛇を放ちて殺さしむ、されど少女は命に代へても節操を全うするを得たり、後同地に俚謠一を加ふ、「伊豫の北條によい娘を產むな、蛇責かや恐ろしや」實にかゝるあはれをとゞめし藩侯の無法なる、吾人は少女の之に應ずると否とを別問題として、權威をかゝる際にまで振舞ふ心事を憎まざるを得ず、幸にしてかゝる悲慘事なくして、某顯官の婚事は通過す、否寧ろ進んで之に應じたりと聞くに至つ

ては、めでたしとも云はれざるにあらず、併しながらかゝる消息をめでたしと云ふ、めでたからぬと云ふは如何なるものにや。

女として最も嬉しきものは、一生を托すべき夫と婚盃を取交はす時なるべし、云ひ知られぬ希望をもちて始めて人として、女として生れたる甲斐ある思ひのするなるべし、この心やがて世なれぬ身を以て、家庭てふ重荷を、苦なくして擔ぎ得らるゝなり、されどそれは少くも人に嫁したる話なり、古稀としいへば、文字の如く通常人の齢を通過ぎたるなり、妙齢の婦人の夫たるには、算盤の桁あまりに外れ過ぎたり、家庭の人として、夫婦として、人らしき樂みの如何あるべき、まばゆき銀燭の下に、百歳を契るべき夫の頭に、雪のつもれるを見る、風流も度を過ぎて、その心情を疑はざるを得ず、齢こそ傾きたれ、その人には爵あり、位あり、財産あり、それに嫁したりと云へば、それは爵に嫁したるなり、位に嫁したるなり、財産に嫁したるなり、人に嫁したるにあらず、少くも人間放れのしたる結婚にて、社會の秩序を保つ上にも、あまり芳しき話にあらず。

左團扇に家産を扇ぎ出さん策として、子を育つる親は知らず、燒野の雉を始めとして、人ならずとも子は可愛きものなり、娘をもてばよき夫を持たせたし、話題に上れる婦人の親としても、また當人としても、かゝれとは神ならぬ身の思ひ儲けざりしなるべし、思はぬ緣の降つて湧いて、一度は驚きもし、笑ひもし、また泣きもしたるなるべし、到底人としては嫁すべからざるも、せめては爵位財産に嫁せしめんとしたるなるべし、結局當人も進んで嫁せんとしたるなるべし、金の世の中なり、虛榮の世の中なり、金の爲に、虛榮の爲に、無殘にも散る花となるは、其點に於て世間並なり、爵位財産を以て此恐ろしき罪をつくる、其心情甚だ憎むべく、また淺ましき事どもならずや。

道德上の因果

文學博士　井上哲次郎

自然界に因果法の行はれて居ることは誰しも知り切つた話であるが、道德上にも亦この法が行はれて居るのであるけれども、これを言ふものは極めて稀であるから、殊更に今この題を撰んだ次第である。

固より自然と道德とは差異があるのみならず、自然界には別段善とか惡とかいふものは無い、たゞ自然は川が流れるとか、又は山が聳ゆるとかいふ事のみで、その流れるとか或は聳ゆるとかいふ事には、毫も善とか惡とか名くべきものは無い、單に水は低きに從つて流れ、山は突乾として聳えて居るのが自然の因果法で、何も其間には流れて遣らうか遣るまいか、聳えてやらうか遣るまい抔といふ考は毫釐も無いのであるが、之に反して、道德すなはち人間の側になると意志といふものがある、この意志といふものがあるから、假令何事をするに就けても、一定の目的を立てゝ行つて來る、如何なる些細なこと、例へば、手を擧げ足を運ぶにも、必ず頭を抑へるとか、何處其處へ行かうとか、一定の目的を以て動いて來る、けれども

元來自然なるものには意志が無いのであつて、偶然では無いが、言はゞ偶然のやうに水は低きに流れ、山は高く聳えて居るのである。

斯く我々人類には意志なるものがあつて、そして一定の目的を立てゝ運作行動するから、道德の起るといふは事實であるが、ネーチユアー即ち自然には起らない、反言すれば、

人類の間には善と惡との二つがある爲に道德といふものが起つて來る、然るに茲に自然と道德との間には動物なるものがある、けれども夫等の間には道德を認めない、從つて責任といふものも亦認めない、即ち高等動物と云はるゝ犬とか猫とか、牛とか馬とかいふやうな高等動物が其である、何故なれば、他動物には人間のやうに發達した

る意志を持つて居らぬ、例へば、犬や猫が彼の魚を食べたいと思つても、我々人間が其を戸棚か押入でも藏つてしまへば、いくら食べやうとしても食べる事は出來ない、然るに我々人類となると、自然の勢力以上に爲し遂げる所の意志を持つて居る、彼等は其を持たないから、從つて出來ない、人間が一度之は斯うしやうといふ意志を起して其目的に向つて進むときは必ず其を成し遂る、例へば、時としては自然を凌駕し、若くは制御してまでも遣る、即ち水力や電力を應用するが如きは手近な一例である。

斯く人間は己が意志といふもので何事をも行つて除ける、それに就ては別に何等の法則といふものは無いかといふに、自然界に自然法のある如く、是亦一定の法則があるのであるが、併し自然法の全部を移して之を道徳界に應用することは出來ないけれども其自然法中の因果法だけは出來るのである。



道徳界にも自然法と同じく因果の理法があるといふ此の考は、昔から無いかといふに左様でない、少しは在つたので、儒教などには、善なるものには福し、惡なるものには禍いする、また積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃ありとか、又は天網恢々疎にして漏さずなど、説いてある、こ

れ即ち言換へれば因果の理法である、然るに實際社會を觀ると、大惡人即ち桀紂の如き暴戾を敢て爲るものが富み且つ榮え、顏回のやうな淸貧に安んじて居る大善人が終生貧困に暮すといふ事は如何いふ譯であらうか、之は甚だ不審しき次第であると、孔子なども言つてあるが、成程これは御尤な說で、斯ういふ事は今も尙ほ實際社會に於て多く見聞する事である、佛敎では夫等を解するに因果應報と說く、即ち六道輪廻說といふものがある、六道とは地獄道、餓鬼道畜生道、修羅道、人間道、天上道の六つで、實はこの輪廻說といふのは佛敎以前より印度に在つた婆羅門宗の說であるが、それを佛敎が踏襲したのであつて、これを今日より考へて見れば、全体に於ては然まで惡くはないが、併し克く〳〵詮議をすると、

　自然と道德とを混雜して居るので餘り面白く無い、例へば、世の中の仕合せな人や、又は不幸な人を見て解釋が就かない事が出來てくる、而も佛敎では、天災、地變、惡疫、火災、洪水などに善人が逢ふとすれば、佛敎では直ちに其は前世の宿緣である、成程あの人は現在見る所では、之と云つて惡い事を働かないのみならず、社會公共の爲にも盡し、また能く慈善等の事にも熱心であるが、然るに彼のやうな災難に遇ふといふものは、何か前世にそれだけの惡い事をして置いたに相違ない、それがたゞ我々の眼に見えない迄で、現世に其が報つて來たのであるといふ風に說くのであつて、この六道輪廻說も當時幾分の利益があつたのであるが、前世の宿緣說も共に學術上から見ては價値が無いのである、况んや自然界の事を混じて來て、海嘯も震災も火災も凡て前世の宿緣である抔と說くに至つては誣妄もまた甚だしいと云はねばならぬのである。

　元來天然自然の法則といふものは、佛陀も神も之を變更し易置することの出來るもので無いと同時にその中に發る自然のフイジカル即ち現象といふもの

は免がるゝ事の出來るものでは無くして、如何なる善人でも天災地殃には罹るもので、それには男女老幼貴賤貧富の分ちは無いのであるが、且らく之を人事界に限つて見ると、自然界と同じく吾道德界にも亦ほゞ同一なる因果法が行はれて居る、たゞ彼は自然法に由つて顯はれ、此は意志に由りて顯はるゝの別があるので、その理法はチョット我々の眼に見えぬが、それは複雜の爲である。

道德界には自然界から侵入して來る、例へば、風が吹けば寒い、けれども其を人間は、イヤさう寒がつてはならぬといふやうに意志で抑へる、その如く他人が己を罵つても、彼奴憎いと思ひながらも、チット堪へて顏色にも出さず又怒つた振も見せないといふ風であるから、なか／＼容易には解らない、又他人に恩惠を施したからとて、直ちに其效力の顯はるるもので無いのみならず、時としては能く世間で云ふ、恩を仇で返さるゝ塲合もある、又反對に無禮を加へても怒らぬ人もある、恰も水の低きに就て流るゝが如く、他人が己の前を遮れば、之に逆はずして他の道を求めて脫がるゝ人もある、況して人間の中には德の非常に高い人がある、それは古への聖賢の言行を撿べて見ると、敵さへも愛せよとまで唱へられて居る、これはチョット凡人には出來ない事であるが、前述の如く、兎角道德界の因果法は自然界のやうでないから解らぬとは云ふものゝ、よく／＼之を研究すれば、必ず其間には立派に此法が備はつて居て、それが近くか又は遠くか現はれて來る、例へば、綿を衝けば引込む、これ即ち柔よく剛を制するの理を示すものではあるまいか、されど一度引込んだからとて、何時までも其儘のものでは無い、必ず再び膨脹るの期がある如く、この因果の理法の無いと云ふ事はない、人を憎めば、人また己を憎むといふ事は因果の理法で、謂ゆる爾に出るものは爾に返るの理法である、去れば何事もすべて左樣往きさうなものであるにも關はらず、玆に一つの疑の發るのは、幸福なる生活を爲して居るものが果して善人ならず、

貧窶に暮して居るものが必ずしも惡人ならずといふ一事であるが、何分それは斯の活世界の事といふものは、謂ゆる盤根錯節といふよりは尙ほ複雜なるものであるから、容易に吾人が知ることを得ないまでで、道德界に於て斯の理法が貫いて居ることは疑ふべからざる事實で、早晩反射して來る、即ち仁愛なるものは仁愛、不善なるものは不善と現はれて來る。

凡そ天地間で自然界の事を取つて除ければ、他に因果法の現はるゝは道德であるが、何に致せ道德界の事は精神に屬すると同時に複雜であるから、急に知る事は出來ない、けれども斯の法則が無いとは斷言が出來ない、假令ば玆に一人の人があつて、何か德義に缺けたる行爲をなし、この事は誰にも知らせまい、又誰にも知れまいと思ひながらも、その結果は如何であらう、ハテナ誰かに知れはすまいか、どうか知れなければ宜いが、といふやうに心配が起つて來る、それが起ると同時に、人知れず吾ながら安き思は無い、

この心配苦悶懊惱が即ち報復で、この報復は避けやうとしても生涯避けられないのである、之に比ぶれば、海嘯が浮雲と想つたら山の上に住ゐ、雷が危險であつたら避雷針を建てれば少しも嶮呑な事は無い、如何に毎年印度で猛獸や毒蛇の害が怖ろしいからとて、是等は法を以てすれば如何にも避けられるが、意識の中に起る報復のみは之を避けることは出來ない、これ即ち不德なる行爲の結果と云はねばならぬ、之に反して、善なる行爲は如何であるかと云へば、それは云ふまでも無く、自分で滿足を得らるゝ、この滿足が即ち善なる行爲の結果として顯はるゝのである、此く善なる行爲と惡なる行爲とは其結果を異にするのである。

彼は剛情であるとか、又は輕薄であるとか云つても、それは固より人間といふ者が感情的のもので免るゝことは出來ないのであるが、たとへ剛情であらうが或は輕薄と云はれやうが、その行爲が不德に涉らない限りは、自己に取つて何の苦痛も感じない、

けれども富巨萬を積まうとも、その富そのものが不義にして得たものであつたならば、毫も其心に安堵を得ると云ふ事は出來ない、之に反して、貧乏人即ち赤貧洗ふが如しといふやうな境遇にあつても、自ら内に省みて疚しき所の無い限りは、如何に清貧であらうとも、その精神に於ては滿足を感じて居る、この精神上の滿足といふ事が、やがて道徳上に於ける幸福なる結果と見ることを得るのである。

近頃世上に喧傳せらるゝ自然主義とか、又は本能主義とか云ふものに對して、予は斯ういふ考が起る、即ち自然主義又は本能主義などゝいふ事は、是等を學理上に於ける一種の學說として許さねばならぬもので、頭から是等を惡樣に罵るべき筈のものでは無い、固より學說といふものは一種二種に限られたるもので無いと同時に、智識の進步發達と共に種々なる新らしき學說も出て來るもので、夫等が出て來ると同時に新舊の學說を比較討究するといふ事は、乃ち文明に資する所以であるから、決して新說だからとて頭粉しに言ふべきものでは無いが、その新說を發表するに就ては、その主義の人類に影響する、殊に實際の生活に及すところの影響を省みて貰はねばならぬのである、と云ふものは、その新なる主義を唱ふる人には自信もあり確信もある事は勿論であるが、その聲を聞くと同時に、隱然社會に其影響を持つて來るもので、既に之を實行した人もある程で、夫等の人々に取りては、自分の平素の習慣或は嗜好に適して居るので、至極自分を庇護ふには都合が好いであらう、それよりも尙ほ手近な例が、年々幾らとなく東京へ勉學の爲に出て來る田舍の學生に向つて、既に都の生活に慣れたる學生が、君等のやうな田舍臭い學生風や田舍氣質は、最早十八世紀の舊時代に屬するもので、今やこの輦轂の下に於ける趨勢は自然主義で持切つて居る、本能主義で無ければ人が相手にしない、と云ふ風に說き立てると、

無垢な正直な田舍出の學生等は、殆んど煙に捲かれて仕舞つて、遂には墮落せずして止まぬと云ふやうになり、延て生涯を誤まるといふやうな事に立至らしむるのであるが、畢竟それは精神が衰弱するからで、その精神の衰弱が乃て身體をして虛弱に陥らしむるからである、固より主義といふものは自ら誤るものではない、けれども之を享る靑年はかぶれて自己が慘酷なる報復を受けるのである。

現在の結果に由りて過去の原因を知らうと思ふなれば、今一々之を言顯はす事は不可能であるが、喩へば、春の中に善く耘り耕した田畑は、必ず秋の稔りの豐饒なので解かると同じく、之に反したものは收獲は必ず惡い、而して世の諺にもある如く、决して瓜の蔓に茄子や西瓜の生るものでは無い、それ故に耶蘇は、善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ばずと說かれてある、これ明らかに道德上の因果法を示されたものと云つて差支ない。

一体道德に對して世間に誤解があるやうであるが

先づ其事の如何はお預りとして置いて、言ふまでも無く、道德は自己自身にあるのであるから、必ず爾に出るものは爾に反つて來る、それ故に吾人が常に之を行ふと同時に或目的に向つて進んで行かねばならぬのである、即ち其目的とは至善である、サテ斯の目的に向つて進んで行く形式は種々あらうけれど物の中道を執つて行くと云ふ事が肝腎である、されば孔子も中庸を說かれてある、この中道の善いといふ事は、單に道德のみでは無い、地球上の氣候でも温帶が一番良いのでも分る、シンガポール邊は熱いから着物も要らない、また食物も天產物が十分に有るので働く事は要らない、その換り人間が懶惰に流れて仕舞ふ、之に反して寒國の人は善く稼ぐ、否、稼がなければならぬ、また社會の階級にしても、中等の階級が善い、餘り富が高いと何うも懶け勝となる、學校で善く出來る者を檢べて見ると大抵は素寒貧生で、之は自活の途を得る爲に熱誠に勉强するからである、而かも中等

の階級に屬する家の子女は、概して爾う出來不出來の懸隔が上流と下流と程甚しくない。斯ういふ事例は擧げ來れば數限りも無いのであるが、先づ此の位として置いて、凡て何事も過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しであるから、何處までも中道を主として實行せられたい。

今日の道徳上には快樂主義と克己主義との二つあるが、實踐上から云へば寧ろ克己主義の方を少しく勝たしめた方が善い、餘り快樂主義に傾くと其結果は苦痛となる、即ち粗食して居ればこそ遇々の美食を非常に快樂に感ずるのであるが、滋養物だからと云つて無暗に牛肉や鷄卵などを澤山に詰込むと、後で苦しいのでも知れる、また學校へ毎日通つて居て、一週に一日の日曜日の休暇が樂しく覺えるのであるが、之に反して、毎日何の用事も無く只浮羅々々として居ては薩張樂しくないと一つである、所で、この中道の道徳を實行せられた例は彼の孔子の生涯を見ても知らるゝ、併し之を實行すれば永久的の快樂と光明とを得る事が出來るのであるが、之に反すれば、早晩しか爾に出づるものは爾



に反るで、必ず、それだけの報復があるから、何うか撓みなく實踐せらるゝ事を望むと同時に、之を實行するに方りて心得べき事がある、即ち孔子が身を殺して仁を成すと云はれたやうな精神上の快樂および克已と。また義を見て爲ざるは勇なきなりと云はれた程のモーラルカレッヂを有たねばならぬ事とである。（文責在記者）

妻に對する僕の希望

法學士　片山袋川

相互の意志を疏通せよ

家庭を組織すると云ふことは決して容易でない、平板なる學校生活に馴れた男女が、直ちに競爭場裡に突入して『世渡り』の辛酸に接する、則ち新紀元を畫するのだから相互の困難は口には云へぬ、そこで一家の主婦は稼人に慊らなく覺え、稼人は主婦に注文を多く出す、果は互ひの理想に反してゐるを悟つて日々不愉快な生活を持續するのは能く見る例だ、この間を至極圓滿にやるのは、豫め相互に意志を疏通して置かねばならぬ、僕の妻に對しての希望は恁うである。

夫の趣味に同化せよ

人は各自其容貌が異る如く趣味性は一致し惡い、併し夫婦間に於ては、第一この趣味が合つてゐない程圓滿を缺くものはあるまい、假令ば三度の食物の上に、衣類調度の色彩模樣、其他娛樂の末に至る迄何れか一方が讓つて行かねばならぬ、既に家庭を組織したとして、其妻ともある可き者が、娘時代の得手勝手を並べて折角夫の計畫を破壞して行くやうでは駄目だ、何でも彼でも夫の意に隨へとは云はぬが、夫の趣味性に同化することは慥に妻の義務であらうと思ふ、是取も直さず內助である、夫の職業、夫の嗜好に對しては相當の同情を拂ひ得ぬ妻には到底一家の圓滿は期せられぬ、とは云へ、夫が賭博をするから自分も共にやらねば濟まぬと云ことでは困る。

自分の欲しいものは後に廻せ

女子の虚榮心は其性ではあるが、何事も華美に流れず、質素にやつて、妻としては自分を薄うすることである、ツマリ自分に指輪が欲しいと思つたら、主人の帶の汚れ目を見るやうにすればよい、何も構はぬと云つて、少しも化粧せず、髮は蓬のやうに亂れ、着物は垢附いて見苦しいなどは甚だ夫にしても不愉快である、身分相應小奇麗にやらねばいけぬ、女子が白粉臙脂を使用するを以て、罪惡の樣に云ふのは間違ひで、身嗜みと云ふ事は少くとも女德の一ツ、夫を慰安する道である、去とて是も程度問題で無闇とおシヤレして家風に反いては行けぬ。

夫の慰安に努めよ

交際場裡に立つ婦人外交官の妻でなくとも、常に快濶で居ねばならぬ、夫が一日の働きから疲れて、いざ家庭に慰安の道を求めやうとするのに、妻は物さへ碌々云はず、苦蟲潰したやうな顏でゐられては甚だ面白くない、だからツイ主人は不愉快から家を外勝にする、外にはお世辭のよい此道に堪能な誘惑の手があるので、藝妓に馴れたり、圍ひ者を拵へるやうになる、勿論罪は主人にあるが、一面に於て此際妻にも責任がないとは云へない、則ち主婦としては夫を喜ばせる道を考へ、如何にも家庭は樂天境であると思はせる位の手腕が必要である、此處に於てか始めて家庭の趣味が湧くのだ。

氣轉を利すことが大事

主人が生活上の苦みに逐はれて一日眞黑になつて稼ぐ、それに妻は家にあつてノラクラ猫を抱いて日南ぼつこをやつてゐるやうではいけぬ、主婦には主婦の切盛がある、この切盛を立派に仕上げながら、冬なら夫の歸宅する時刻を計つて、暖食をとらせ、その日の出來事を面白く快濶に報告して、夫を慰め、亦は文官の夫なら小說の綴までも讀んでやるとかするのも一策である、殊に氣轉を利かすと云ふことは重大な條件で、故紅葉山人の令夫人などは、主人が小說に筆を染めてゐる時はなるべく、感興を削がぬ

やうに努め、呼吸さへ憚かつたさうだ、そして山人が『ア、』と云つて其疲勞を訴へた時、すぐ用意の濃茶一服を差出し、何か慰安の言葉を出すのを例としてゐたとか、妻としては如斯細心な注意が肝腎である。

雇人を酷遇するな

井戸側會議に一家の秘密を漏らすのは下級社會の狀態であるが、雇人を酷遇することも妻としては尙更愼まねばならぬ、思遣りのない主婦は夫の德を破壞する、他人を憐れむと云ふことは、實に女子の美しい點で、一家圓滿の上にドレ程の效果を齎らすか、殆んど無盡藏であらうと思ふ、雇人とは云へ一ツ鍋のものを喰べる家族である上は情を懸けるのは當然である、唯矢鱈に主人顏をして叱り通すやうなことではいけぬ、どうも苦勞の足らぬ今の學生には得て這麽ことがあるものだ。

お金を使はぬ料理法

次は料理の心得である、何もお金の出た材料を使つて旨い物を拵らへるのは誰にでも出來る、お金を使はず、旨く喰べさせるのが家庭料理の秘訣である、主人の自家料理に飽きて割烹店に親しくさせるやうでは、妻の腕前は零である、豆腐を烹るにさへ巧拙がある　料理法は六ヶ敷ものには違いないが、豫しめ學校で習つた心得に一歩も踏み出せない樣では頗る困る、こんなことが動機となつて、姑なぞと衝突し、遂に破鏡の嘆を見ることは世間往々あることだ、一家の主婦としては此處にも考へがあつて欲しいものである、其他に希望もあるが、何れ機會を見てお話することにせう。(文責記者)

獨逸の婦人

醫學博士　土田卯三郎

我國は日淸日露の二役を經てから、謂ゆる最早東洋の一孤島たる日本では無くして、即ち世界に於ける日本として迎へられ、將世界の一等國の班に列し

て各强國と肩を並べるやうに爲つたと云ふ事に付ては吾人共に慶ぶべき事であるが、サテ振返つて我國の富の程度を見たならば如何であらう、果して彼の英、米、佛、獨といふやうな世界の列强國と肩を比べて遜色が無いであらうか、予は素より該專門を異にして居るから詳細の事は知らないが、極々大摑みに見たところで、迚もそれらの列强國と肩を並べるは愚か、歐洲中の貧乏國と云はるゝ、殊に這回は亦復悲慘なる震災を蒙りし彼の以太利國にも及ばないのである。

而も退いて我國に於ける男女の服裝を見ると、その華美の點といひ、又奢侈の程といひ、實に驚くの外は無い、尤も職業にも由るが、概して男子は社會の表に立つて働く者であるから、彼の最下層の勞働者を除くの外は、一般に多少服裝を飾らねばならぬ必要があるのであるが、それでも彼地の男子は我國の男子のやうに常にお蠶ぐるみに爲つて居るやうなものは無い、殊に女子に在りては、我國の婦人のやうに不斷着にまで絹や絹糸の交つたものを着けるといふやうな事は無い、常には如何なる上流の婦人でも木綿物を用ゐて居る、といふ風で實に質素であつて、餘程上流の婦人でも絹物を着けると云ふ事は一年の中に僅か三回乃至五回位に過ぎ無いのである。

全體衛生の上から云へば絹物よりは木綿物の方が身體の爲にも善いのであるが、それにも拘はらず我國の婦人達は、前にも云つたやうな、その名目ばかりは世界の一等國だ杯と大したものであつても、その實に立入つて富の程度と來たら誠にお耻かしい貧乏國でありながら、その服裝ばかりは他の世界の一等國をも凌いで居るとは、一面から見たならば富有を衒ふの手段となるかも知らないが、他の半面から見たならば實に氣耻かしい次第ではあるまいか、今や我國では上中下の三層を通じて、長幼を問はず女子といふ女子にして、絹物または絹交りの物を着けて居らぬものは一人も無いと云ふ風で、殊には未だ自分で自分の身を始末する事が出來ずして他の家

に雇はれつゝある下女や子守の端に至るまで、縦ひ常には之を着けない迄も、チョット餘所へ行くとなると、必ず絹物か絹交りの物を着けなければ女の一分が立たないやうに心得てか、それらを着けて出る。斯様に我國には奢侈の風が上下を通じて彌蔓して居る、而して外國から多額の借金をして貧乏泣をして居るのであるから、昨年大詔の下つたのも其の筈であると恐縮し奉るのである。

殊に我國で怪訝に堪へないのは、下婢や子守のやうな奉公する身分の者に對して衣物の地質を強る主家がある、是は甚だ謂れの無い事と考へる。

一體我國の婦人方は、行つて見た人は別として、その他の者は總て獨逸といふ國は、世界流行の中心とも云はるゝ佛蘭西の隣國であるから、左様云つても婦女子は着飾つて居るのであつて、予が言ふことは何か爲にする所があつて斯う云ふのであらう杯と臆測せらるゝ方が無いでもあるまいが、予は決して虚僞を語るものでは無い、尤も予は是と云つて別段

服装に就て趣味も何も有つて居るのでは無いが、ホンの素人眼で見た所から判斷を下して見れば、彼地の婦人は凡て着物の地質や色合の見立等が上手なやうに思はれる、左れば彼方の婦人が着けて居る衣服を一瞥すると全で絹物のやうに思はれる、けれども能く〱手に取つて檢べて見ると、前述の如く實際木綿物である、是を以て見るときは、彼方の婦人が斯う云ふ事に對する智識が如何に發達して居るかと云ふ事を推知すると同時に、如何に服装に關する趣味を解する事の深いかと云ふ事をも測得られる。

チョット斷つて置くが、予は婦女子に對して服装を飾るなと云ふのでは無い、何所までも女子は人類社會の花であるから飾らねばならぬが、その飾るにしても自ら富の程度に正比例して行かねばならぬ、然るに現今に於ける狀態は如何と云ふに、全く富の程度と反比例して益々奢侈の風が高まるやうであるが、是では國家の前途も思はれるのである、否、各自の家事經濟が思はれると、云ふは何故かと云ふに、

各自の家庭に於ける窮乏は即てこれ國家の窮乏と云ふ事に歸着するからである。

言ふを待つまでも無く、女子とても素より社會國家の一員であつて見れば、自分の一身さへ着飾る事さへ出來れば國家は貧乏しても關はないと云ふ道理はあるまい、それに無暗に絹物などを着るから、雨天の時は汚れるから勿論として、晴天の時でも裾の切れるのを氣遣ふ所から、乘らなくともよい人力車や馬車に乘りたくなる、お手輕の所でも電車の御厄介になる、と云ふ始末に立至るので、ます〳〵給らない上にも足らなく爲つて、謂ゆる貧乏の上塗をしなくてはならない、そして達者な足を遣はないから身體も懦弱になる、斯んな損な事は無いではないか、それと云ふも畢竟は我國の婦女子が、服裝の地質や配色等に關する智識や趣味の度が淺い所から、たゞ競うて絹物にのみ趨つて、その極家庭より延いて國家までを貧乏に陷るのではあるまいか、若し左樣と知つたならば大に恐れ愼まねばならぬ事であると云ふ位は、本誌の讀者たる賢明なる諸姉の旣に業に御承知の事であらう。（文責在記者）



嫉妬は女子の爲に執らず

法學士 布川 蕪

嫉妬と云ふものは意味の廣いもので色々の場合に使用される、併し玆に云はんとする所は婦人の嫉妬に就てのことである、婦人就中妻に對する嫉妬に關し少しく予の感じたことをお話する。

羨む事の強度

云ふ迄もなく嫉妬は婦人の特性である、概して云へば、虛榮心の副産物で、他人のものを羨やむと云ふ事が、強度に達して嫉妬の炎を燃やすのである、だから寧ろ此場合羨やむと云ふ境を超さずに內ですませば甚だ結構であるに違ひないが爾うは行かぬ、昔からお家騷動なるものゝ多くは女子の嫉妬が禍をなしてゐる、則ち或物を無上に羨んだ結果、我を忘れて嫉む、嘲る、罵ると云ふ順序で行く、このあひだも或學校の生徒が某新聞社の美人競に際し、第一等に當撰したので、同校の生徒達は擧げて其生徒を困らしめたと云ふ事があつた。

美德の嫉妬とは何ぞ

通常婦人の嫉妬の多くのものは、大抵外部の美に歸することが多いやうだ、則ち「誰さんは美貌だ」とか、「誰さんは美服する」とかゞ中心となつて盛んに全人間に傳へられて害毒を流す、嫉妬がかゝる場合にのみ行はるゝのは甚だ遺憾だが、此方面を「誰さんは學問が出來る」と云ふに歸し、我劣らじ負じと勉強することゝしたら、嫉妬は美德たるに相違ないと思ふ、一般さうでなくて、たゞ他人の美を妬むの極、德を傷けて再び起つ能はざるやうにせしむることの多いため、此等の點よりして嫉妬は必ず婦人の愼むべきものとしてあるのである。

嫉妬の豫期に反する結果

さて妻の嫉妬について云へば、成程嫉妬は良人の不行跡を匡正するの材料になるかも知れないが、一歩を誤れば却つて、夫れが良人の不行跡を助長する譯ともなるのである、妻が良人に對して謹愼を缺き

嫉妬がましき擧動を敢てすれば、良人は男の意地ツ張から、ツイ自暴自棄を出してかゝる例は世間往々ある、こんな場合に逢着して、俄かに妻は不行跡を匡正せんとした豫期に反した結果を見て驚くのだ、古來人君に直諫を用ゐて成功した例は甚だ少いであると同じ理屈で、この時は却つて苦諫に出た方が利目があるやうに私は考へる、妻たるものが我を忘れて柳眉を逆立て、あらゆる皮肉惡口を弄してかゝると、遂に亂暴な良人は勘忍袋の緒を切らして鐵拳主義の無法に出るのである、最も心得可き事であらう。

「小春」は嫉妬を愼む

夫れから彼離婚離緣の統計表を調べて見ると、その原因の十中八九は皆妻の嫉妬のそれであるらしい日々新聞紙の三面記事はよくこの間の消息を明らかにしてゐはしまいが、私は義太夫の「紙治」の中に小春が「嬰兒の守でもするわいな」の一句を聽いて、よく浮き川竹の流れの身で、自巳の生れ兒でもないものゝ守をしやうとまで、嫉妬を愼んだのに感心した一人である、凡ての婦人はかの小春に習つたら益し得る處が少なくないと思ふ。

寧ろ苦諫せよ

茲に苦諫の良人を動かすことの偉大である所以を述べたが、其苦諫にもいろ／＼あるが、女子に涙のあるは烏賊に墨のあるが如く、自巳を守る武器とまで或人の云つたことがあるが、まさか爾うでもなからうけれど、女子が泣く涙で男子の鐵腸爲に碎けんとした例はある、泣いて諫めてかゝれば、如何に不行跡な良人と雖、必ず惡酒の醉が醒たやうに翻然として我に歸るに違ない、眞ともに向て良人に喰てかゝるのは危險千萬な話で、良人をして遂に自暴自棄に終らしむる結果となることを忘れてはならぬ。

諸人種の子供遊び

理學博士　坪井正五郎

遊戲は快樂を得んが爲に爲す所の働きで、快樂を

得やうといふ念の有る者ならば、人類でなくとも、隨分遊び事を致します、猫や犬や猿の好く遊び戯れるといふ事は人の平生見て居る所でござりますが、熊とか虎とかいふ恐ろし氣な獸類も遊びますし、河馬などゝいふ陰氣らしい不精らしい物でさへも戯れます、下等動物では何以上のものが遊びといふ事をするか、未だ明らかでござりませんが、其途の學者の調に隨へば、若い蟻は正しく遊戯れるさうである。

遊びといふ事は既に人類以下の動物にもあるのでござりますから、彼等よりは一層快樂を得やうといふ念の强かるべき人類の間には、開明の度如何に關せず、種々の遊びがありさうな事でござります。

遊びは快樂の一種には違ひ無い

併し快樂は必ずしも自ら働き手に成らずとも得られる、美しい物を見るのも美しい聲を聞くのも、面白い話を聞くのも、或望みを抱いて居て、之を遂げるのも、等しく快樂である、即ち快樂には自ら働き手となつて得るものと、自ら働き手とならずして得

るものと二つの別があると申して宜いのでございませう、男女、長幼、又は開明の度と、甲乙二種の快樂と如何なる關係を有して居るか、考ふべき事柄でござりますが、今は斯かる點に意を留むる事を止めて、甲種の快樂即ち遊び丈に就て申しませうが、是に又身体の運動を専らにするものと、精神の働きを専らにするものとの別がござります、活潑な性を具へて居る子供の快樂とする所は主として甲種の第一の方に傾いて居ります。

まづ第一臺灣の番人に付て記します、此事實は總て伊能嘉矩氏の報道に由るのでござります。

ボク社以北の一帶たる北方の生番に於ては、左の如き事が行はれるさうでござります。

此地にはサイホイと云つて人の頭位の大さの芋があるのでござりますが、子供等は之を人の頭に擬して、携へ廻り、呼び叫んで、他所から人の頭を切り採つて來たやうな風を致し、廣場に集會して、彼の芋を竹竿に貫き、地に立てゝ儀式を行ふ眞似をする

是は父兄其他年長の男子が人頭を切り採て來る所、所謂首狩の歸途を見て面白い事を感じ、子供心に勇しい男子の行爲を眞似るのでござります、此社會に取つては斯る遊びは又一種の敎育にもなるのでござります、思ふに他日實際の首狩りといふ事が止んでも、遊びとしては彼樣な事か永く遺て居るかも知れません、斯く考へて見れば、此一事からして如何に大人の行爲が子供に眞似られるか、如何に子供遊が敎育の補けとなるか、如何に子供遊が社會の歴史を探るに役に立つかといふ事を思ひ遣ることが出來ませう。

又大勢の子供が二部に別れ、各隊を組んで竹竿や木の枝を手にし、互に戰鬪の狀をして山谷の間を駈け廻ることがある、云ふ迄もなく是は大人の部落對部落の戰鬪を眞似るのであつて、開明國に於てのいくさごッこは單に子供遊に過ぎないのでござりますが、此所にては全く大人を見習つて致すので、申さば戰の稽古を兼て居るのでござります。

又二人立つて向合ひ、手と手を押し合ひ、或は互に組合ひ、相手を倒したのを勝として遊ぶ事もある、是は角力に似た事でござります。

幼少の者は扁圓形の木の實に、竹を貫き心棒として獨樂を作つて玩びます。

濁水溪岸方面の蕃人間に斯う云ふ事が行はれる。即ち竹で鐵砲形の物を作り、筒の内に長さ五六寸の竹棒を入れて、遠距離の所から芭蕉の莖を射、又は小石を入れて壁面の繩を打つ、又竹か葭で矢を作り、末端に圓い木片を付け、走つて居る雞に當て、又は壁面の繩を打つ。

新高山を中心とする蕃人間の子供遊びは次の通り、即ち二人組合ひ突合ひ相撲を取るやうな風にして倒し合ふ、三遍勝負ではありますが、最後に勝ちさへすれば、假令前の二回には負ても之を勝ちとするのでござります、三度の取組で二度負けながら勝になるとは理窟に合はぬやうに見えますが、三度の取組で勝負を決する定まりと思へば何の不條理な事も

ござりません、初めの二度は只度數を重ねる丈の事で、勝負の勘定には入れないのでござります、角力に似て居る爲此勝負の決し方は變則のやうに思はれるのでござりますが、三遍廻りの競走などでは、初めの二遍に重きを置かず、最後の一遍で勝負を決する事、我々の常に行つて居る所でございます、彼れ此れ同例と見れば宜いのでござりませう。

又弓と矢と放れないやうに造り付けにして置て、矢の末端に針を付け、之に小さな圓い果實を刺し、弓絃を張つて手を放せば、矢は弓に支へられて遠くには飛ばず、果實計りが的に中るやうに出來て居る玩具がある、是と同樣の物は東京でも金時豆を飛ばす爲に竹で作つて、以前から豆賣りが持つて歩いて居ります。

又大勢の子供が竹の矢を弓に番へて、急な崖の上に立つて居り、一人が文丹を崖下に轉がし落すのを目掛けて矢を射、能く文丹に中てた者を優者とする遊びもある。

鳳山方面の山中の番人に在つては、子供遊びとして、小さな弓矢で樹上の文丹を射落す事が行はれる、又鳥を射る事もあるのでござります。

恆春地方の生番の子供は、面白い事をして遊びます、これは打熊といふので、先づ一人が地に蹲つて熊の眞似をすると、多勢の子供が其周圍に立ち、聲を揚げながら熊を推し倒さうとするのでござります、さうすると熊は手足で四つ這ひになつて、後足で周圍の者を蹴るやうにする、斯く互に隙を伺ふて爭ふ中、誰か熊に蹴られると、其蹴られた者が代つて熊となるのでござります。

又殺豹といふ遊びも行はれる、先づ地を畫して二陣を作り、各の陣に數人づゝ隊を分つて居り、一陣は進攻、一陣は防守の位置に立ち、進攻の隊の中から一人進み出で防守の陣に近くと、防守隊は之を捕へやうとする、進攻者は右の手を揮つて近寄る者を斬る眞似をして、此所彼所に馳驅競奔する、進攻者が若し一人でも斬つた形になれば、進攻隊の勝とし

て進攻者は本陣に引上げる、若し又進攻者が捕虜となれば防守隊の勝で、次には其隊が進攻隊となる。

それから卑南地方の蕃人の子供は、竹を割つて長さ二三尺の長片とし、一端を尖らして、大木の高き部分に向つて拋ち、尖端の最も高く樹皮に刺して、脱け落ちないのを好いとして互に其技を爭ひます、臺灣蕃人の遊びでは先づ此位で、此外諸國のものを述べると餘り長くなりますから、一先づ此邊で筆を止めて置く事といたします。

妊娠に關する迷信

齋藤繁樹

如何に世が文明に進んでも、何彼につけて迷信といふ事を打破るのは困難で、寧ろ一方には更に新らしき迷信を生ずるの傾があるやうに想はれる、それに迷信だからと云つても、大して人生に害の無い限りは、何も額に筋を張つて斥けるにも及ばない、のみならず却つて其を慫慂するが爲に利益を得る事が無いとも限らない、併し素より迷信といふのであるから、二十世紀の新空氣を吸つた諸孃の中には左樣云ふ事に足を踏入れて居らるゝ方は萬々ある氣遣は無い、けれども隨分昔は色々の迷信が行はれたもので、中には腹を抱えるやうな事や、又は馬鹿らしい樣な事も澤山ある、その中で婦人に緣の近い出產の事に關する迷信の二つ三つをお咄して見やう。

第一　安產と禁厭

世にはお產の至つて輕い方と、之に反して非常に重い方とがある、で輕い方から見れば左まで出產といふ事を氣にも留めないのであるが、サテ重い方の御仁から云へば實に生死に繫る一大事と云はねばならぬ程なのであるから、從つて安產がしたい、それには如何したものか、何か善い方法は無いものかと云ふ風に心を惱ます所から、彼の此のと迷信が傳へらるゝやうに爲つたに相違ない、即ち平家物語に、高貴の人々の產滯るときは、安產を願ふため甑を家屋

より轉ばし落すといふ事が出て居る、徒然草には之を敷演して、のちの物即ち胞衣の滯るとき、甑を家根より落し、男なれば南の方へ、女なれば北の方へ轉ばすと註解せられてある、貞丈雜記には、古へは産の時米を撒くことあり、これ安産の法なりとある、それより最も牽強附會と思はるゝは、或古書に、伊勢といふ字を紙に書き、水にて呑めば産安し、これ伊勢といふ字を分解すれば、人、尹、生、丸、力なればなりとある、善くもこじつけたものではないか、又産婦の右の足の小指の先に、麥粒ほどの灸を三つすゑれば安産なり、また熊の手にて産婦の腹腰を撫でるもよしとあるが、これでお産が輕く出來れば斯んな造作もないことは無い、けれども其所が迷信の迷信たる所以といふよりは、謂ゆる鰯の頭も信心からとでも云ふものであらう。

第二　胎兒の男女を知る法

今に專門家が頭を惱して研究に研究を重ねてさへも分らぬと云ふにも拘はらず、我國では隨分古くから

左樣いふ傳說があるので、乃ち神代の頃に、天照大神と皇弟須佐之男命とこれを謀り玉ひ、大神は男と云ひ、皇弟は女と云ひ、而して後に生れ玉ひし御子が男子でおはせし所から、大神には吾勝つといふ思召で、その御子に正哉勝天忍穗耳命といふ御名を御命になつたと云ふ事が古事記に出て居るが、これは頗る考へものである、一体斯ういふ事は初め支那から傳はつて來たものと思はる、何故といふに、擁書漫筆に、魏書を引用してあるのでも思ひ當る、即ち左りはらみは男、右はらみは女と知るべし、この事支那にもあれば、多分同國より來りしものならむとあるので知らるゝ、尚ほこれは今でもチヨイ／＼見聞する事だが、夫婦の年を合せて其を三つに割り、それが割りきれないときは男子であるが、若しも割り切れゝば女の子である、萬一産月が年を越したならば、尚ほ一つを其數の中に加へ入れて、而して三つに割るので、此事は十に八九は違ひないと或書に見えて居るけれども、予はそれと反對に、この事十

に八九は外れありと云ひたいのである。

第三　宮参りと犬張子

この宮参りの日限に就ては、多少我國の中でも差異があるのであるが、まづ東京邊では男の子は三十二日目、女の子なれば生れて三十三日目に行ふの習慣となつて居る、そして其時に犬張子を吊下げて行く事となつて居るが、これは婦人養草の中に、犬張子は犬の形したる筥なり、産屋に用うる器なり、産衣をまづ此筥に着せ初て其のち子に着する筥の内へは守札または産屋にて用ゐる白粉畳紙、または眉掃きなどを入れるなり、こは大和奈良の法華寺といふ尼寺より天下へ出すものなりと記してある尤もその効用に就いては、禁中に獅子狛犬を飾らるゝは威儀のためのみにあらず、もと邪を避ける義を取り、兼ては几帳御簾などの鎮めにもなされたるものなり、犬張子もこれらの事によりたるものなりと世話盡しといふ書中に見えて居る、尚は同書に、赤子の寢ておびゆるを犬の子と唱へて禁厭のも、赤兒の額に犬の字を書くのも、其に邪を避ける法なりとある、然るに現今ではホンの宮参りの飾りに供せし後、子供の翫具となるに過ぎないのであるが、變れば變るものである



第四　神佛と妊娠

古來婦人にして妊娠せぬものを石女と稱へて居るがこの妊娠といふ事は素より造化の妙用に由るので、今日專門大家が人手で出來るやうな事を云はるゝは

れども、それは唯理屈だけで實際には行はれない、何故なれば、いろは歌留多では無いが、貧乏人の子澤山といふやうに、最早欲しくないと思ふ家には續々出來て、何うか一人だけでも欲しいと焦心つて居る家には一向出來ないのでも解かる、斯う云ふ工合であるから、古來子供の無い家では、どうかして一人だけ授けて貰ひたいと云ふので、神や佛は我々人類以上の靈妙不可思議なる威神力を有つて居らるゝと思惟する所から、何うか一人の子供を授け玉へと神佛に祈誓をかけるが、これは神佛に於ても甚だ迷惑な次第であらうと窃かにお察し申すのである、前にも述べたるが如く、この姙娠ばかりは、マアあの御体格でと羨まるゝ程な奥さんでも、一生一人も赤さんの味を知らずに暮して仕舞はれるかと思ふと、一方にはアノ纎細なお身体でと危ぶまるゝ細君が五人も六人も產み生さるゝといふやうな次第で、どうしても造化の妙巧に待つの外は無いのであるが、今も尙ほ淡島樣とか又は子安の觀音樣とかにせがむ方

が尠なくないやうであるが、それは實際無理は注文と云はねはならぬ。

第五　姙娠と子持石

前項には子が欲しいといふので神佛にせがむ事をお咄したが、此所には其子の種を得るといふ事に就て石に關する傳說を少し物語らう、隨分これには面白い說がある、まづ古い所では日本書紀に、神功皇后が三韓を征伐なさる時に、丁度應神帝を御懷胎あそばされ、殊には臨月なのである所から御出發に際し、皇后則ち石を取り腰に挿み祈つて曰く、事畢るの日この土に產まん、その石今に伊都縣道邊にありと記されてある、然るに傍廂といふ書には、この石二つ萬葉集の傳によると、筑前國怡土郡深江村子負原の海岸なる岡の上に上にあり、一は長さ一尺二寸六分、丸さ一尺八寸六分、重さ十八斤五兩、一は長さ一尺一寸、丸さ一尺八寸、重さ十六斤十兩、共に楕圓狀にして鷄子の如しとあり、そして初め神功皇后が御帶に挾み玉ひし時は、二つながら指頭ばかりの小石

ならんが、今は三尺づゝもある巖となりて苔のむすに至りたるこそ奇しくも妙なりと出て居る、次は肥前風土記に、船帆の郷に景行帝御巡狩の時、御船の沈石四顆その津にあり、このうち一顆の高さは六尺、さしわたしは五尺、他の一顆の高さは四尺、さしわたしは五尺、子なき婦女にの二石を祈れば必ず妊娠を得るとある、また下野國史には、鹽原に子持湯といふがあり、この湯の中に長さ三尺ほどの石あり、その石に婦人の腹を當て身躰を温むれば必ず妊娠すと載てあるが、どういふものか妊娠ど石とは深い馴染のあるものと見えて、この外に子種石だの子持岩だのこいふものがあるばかりで無く、腹帶までを岩田帶とさへいふのである。

春色浮水　中川霞袖

水のおもに浮べる春の色見れば浪の花さへ匂ひぬるかな

水邊春雨

夜もすがらふる春雨にうきしづみながれもあへぬ夢の浮はし

室内の北極探險

大木賢治

一月の上旬には成功社の江見さんのお催しで雪中の富士登山といふ事が行はれたとの事を新聞で承知して、實に勇ましい事である何卒御無事に本懷を遂げらるゝやうにと蔭ながら祈つて居りましたが、どうか豫期した程には御成功で無かつたやうに聞及んで居りますが、何に致せ海拔一萬二千尺餘の上に登るのであるから、それは却々容易の業ではありません、所で私は雪と聞いたばかりで夏でも悚然すると云ふ程の、極の寒さ嫌であるから、昨今の寒威では成るべく用務の外は書齋を出ないと云ふ不精者であるが、併し狹い書齋の裡でも、時としては歐米の漫遊も出來れば、また富士登山も觀梅も、或は遠く日月星辰界を徘徊する事も出來るので、その愉快さ加減は又別趣味である、その中にツイ此頃北極の或一部を探險した所が、謂ゆる氷海中には、富士の雪

どころでは無い、遠き幾千歲の昔から融けた事の無い厚き廣き氷の海を已が住家として、人間が寒いなどとは何を云ふのかといふ鹽梅に活潑々地として刎ね廻つて居る動物を發見した、否、古人が發見して置いたものを更に發見したのである、即ち其動物とは、膃肭獸、海豹、獵虎、海馬等その種々あるけれども、先づ雄大なるものは是等數種であつて、

第一　膃肭獸

はアシカ科に屬する動物で、牡は五六尺位あるが、牝は至つて小さくして其半位にしか過ぎない、成長すれば茶褐色となつて間々深靑色の斑點が判明して來る、毛は一体に短いけれども、鞣して帽子や敷物や、又は衣服の装飾等にも用うるが、肉は鹽漬として置いて食せらるゝのである、

第二　海豹

もまたアシカ科の海獸であつて、大きさは五尺から六尺以上にも達するものがある、毛は灰白色か又は黑色で短いけれども、なか〳〵能く密かに生て居つ

て、美しい黑褐色の豹のやうな斑紋がある、そして能く濕氣を凌ぐから、敷皮や帽子または皮筺等としたり、或は衣服の袖口裏などに用ゐられる、肉は食料に供せられるが、臟腑は精製して羊皮紙の代用とせらるゝけれども却々素人には見分けが附かない

第三　獵虎

は動物學上では嚼獸類即ち肉を食べる海獸の一に數へられてあつて、その格好は海豹に似て居るが、その尾は少し長い方で、毛は赤黑色をして居る、そして其の毛皮は極めて柔軟であるから、之を摩つても順逆が分らない程である、是の故に毛皮を賣買するにも、或は衣服や帽子等の製作の上にも之を三種に區別せられてある、即ち第一は冬期に捕獲するもので、之は夏期に毛が脫けて後更に新毛が生じて、その上十分膏がのつて肥えて居るから、皮商人は最も此の種類を重んずるのである、第二は夏期に捕るものであるが、之は既に毛が脫けて身体も亦瘠たもの、第三は捕獲者が自用に供したる後商人の手に渡

つたものと此の三種である、而して用途は帽子、外套、衣服の縁又は婦人用の煖手套等に供せらるのであるが、若し之を以て一枚の衣服を仕立てる杯と云ふ塲合には莫大の金額に上ることゝなる。

この獸の身長は大約三尺から五尺餘の間で、常に水中で食物を獵るのであるけれども、長く水中に留る事が出來ないで時々水面に浮び出て空氣を吸つたり、或は岩礁等の上に憩ふ事もある。

第四　海馬

は前に掲げた三種に比べると最も雄壯なる海獸であつて、殆んど二丈餘に達する程の肥大なる体軀を有して居つて、その上常に數千の群を成して北氷洋の沿岸に棲息して居る、そして頭には卷いて縮れた長い毛が生て居て却々見物である、上顎には二尺五六寸もある二本の犬齒があるから之は凄い感がする、併し之は能く象牙に代用せらるゝ所の貴重なるもので、我々は今日知らず〳〵之を使つて居るかも分らない、それは左樣として、身体の毛は黄褐色であつて、常に小さな膃肭獸や魚類、その他貝類などを食して居る、米國では此の革で馬具や其の外の器具を作るのであるが、エスキモー人となると殆んど餘す所は無い、乃ち油と肉とは食用に供し、犬齒は漁獵用の鈎や附屬品に造り、骨と革は船を拵へたり其の他の器具を製するの用に供するのである、故に海馬はエスキモー人に取つては、實に缺くべからざる天授の產物と云はねばならぬのである、尙ほ數へ來れば本誌一冊位には書き盡くせ無いのであるが、餘り不斷耳慣れない事などよりは、是まで眼慣れた事で恰度折からの氣候であれば、予が室內に於ける北極の探險談をしたのである。

家庭は面白くせよ

梅が香　　中川折柴

はるかなる夢路の末もにほふなり
　まくらに近き軒のうめが香

醒るさ見し夢はさめても思ひ寝の
　まくらにかよふ軒のうめが香

家庭は面白くせよ

増田鏡子

近頃は大部西洋かぶれが多くなつて、家庭といへば直ぐに英語のホームといふ事を聯想して、我國には實際のホームは無い、況んやスヰートホームに於てをやである抔と囈語を吐く徒が少なくないが、去れば左樣いふ囈語を吐く者の家庭に就て御手許を拜見すると、あれが謂ゆるスヰートホームといふものであるかと訝からるゝ事が多い、併し御本人は其を確にスヰートホームと心得て居るらしい、否、信じて居る、その信じて居らるゝスヰートホームこそ我等の眼から見ると全で氣儘者の同棲としか想はれない、のみならず爾ういふ人達は眞に日本の家庭といふものゝ意義を解して居らぬらしい。

今更事新らしく云ふまでゝも無いが、東洋と西洋では自ら風俗や習慣を異にして居るので、迚も浪華の葦は伊勢の濱荻といふやうな譯には行かない、或點に至ると月と鼈ほどの差異があるので、どうしても之を一つに見る事は出來ない、尤も同じ人類であるから豈夫獼猴や鴨などが群棲して居るのとは比較は取れないが、各々疆域を畫して邦國を成す以上は、必ずや其間に差別のある事は自然の數といふものである、去れば歐米の家庭の組立てを持つて來て、直ちに之を我國の家庭に移し植えやうとしても、それは乾度何處かに當箝らない所がある、それを無理に當箝めやうとするのは、恰も丸い穴の中へ四角な木を詰めやうとするのも同然で、決して常識ある者の爲る事ではない。

而も世間には、見かけは隨分常識も發達して居るやうな者が、動もすれば前述のやうな了簡違をして居つて、彼等は口を開けば歐米の家庭を賞揚して、親子たる者は別居しなければ不可ぬ、若夫婦は必ず新婚旅行をしなければならぬ、そして若夫婦たる者は老人を扶養するの義務を負ふべき筈のものでは無い、若し子供が出來たならば乳母を傭ふて傅けてさ

へ置けば、母たる者が自ら手を下さなくとも、少しも子に對するの務が缺ける事は無い、公園の散歩も良人とさへ携さへて行けば宜い、食卓に向ふも亦その如くで濟む、若しも親しき友が訪ねて來たならばオルガンやピアノなどを搔鳴らして、面白可笑しく日を送つて行く、之がスヰートホームの眞價であるといふやうに云ひ囃して居る。

左樣いふものは何故に歐米の家庭では親子が同居して居らぬのであるかと云ふ事などは御存じ無いからである、歐米の家庭で親子が別居しなければならぬといふ事の起源は彼の國々に於ける社會の生活狀態が左樣せしめたのである、尙ほ親切に云へは、さう家族の者が一家の内に澤山居ては生活の程度が高いから遣り切れない、そこで老人夫婦は若夫婦に氣の毒、



また若夫婦は多少讓られたる資本を以て社會に出で奮戰苦鬪しなければならぬ、それには何時までか親を便にして居ては不可ぬといふ所から別居したものがそれが、世を經るに從つて一つの習慣となつたのである、それにも拘はらず、まだ口嘴の黃色いうちに歐米へ行つて、少し物の差別の分かる年頃まで居て、僅かに家庭を窺いて來たとて、もと〳〵旅三界の者に何うして彼地の事情が十分に分らう筈がない、而かも歸つて來ると、是までのやうに旅の旅籠や下宿屋、又は學校の寄宿舍或は素人下宿等に居た時のやうに我儘が出來ないで、何角に附けて父兄等に制肘せらるゝ所から、どうも我國の家庭は窮屈で不可ない、不愉快である、改良せねばならぬなどゝ囈語を吐くに至るのであると思へば、實は憫然に堪へな

い次第と云はねばならぬ。

我國の家庭に於けるが如く、彼方では家族が一つ家に居て樂しむといふ事は出來ない、謂ゆる止むを得ざる事情の下に親子が別居するのである、それを善い事に心得て、二千年來馴致し來りたる我國の家庭に於ける家族制度の美風を打壞さうとは、何たる狂氣の沙汰であらう、どうか既に一家の主婦たる者は勿論、近き將來に於て家婦とならるゝ諸孃は、夢にも左樣いふ心得違の無いやうに、今より切に囑み置く、これも聊か婆心の一片である。

大部家庭といふ事で暇取つたが、それと云ふも昨今西洋かぶれを振廻す先生が少なくないので、實は聊か反省を求めたいからで、別に何等の意志もあるのでは無い、そこで此家庭を形造つてからの事だが、往々世間には乾燥無味な家庭をなして、恰かも旅館へでも行つたかのやうな狀況にあるものがある、既に家庭をなしたる以上は、一家擧つて快樂を共にするやうにしなければ不可ない、輙もすれば、主人またはは夫婦のものは間々外へ出て快樂を求て來るが、他の家族等は年が年中家にばかり居て、そして朝から晩まで毎日々々蠟を嚙むやうな生活ばかりして居ては堪つたもので無い、何も家庭を快樂にするといふ事は、ピヤノやヴイオリンや、又は琴や三味線を彈たり、或はダンスまたは歌留多遊をしたからとて、それで必ずしも家庭が快樂にせしむるといふ譯のものでは無い、それらのものは無くとも快樂にせしむる方法は外に幾らもあらうと思ふ、例へば、夕飯を了つてから一室に皆の者が集つて、そして其日に見聞した事共を談し合うとしても快樂は得らるゝのである、尤も左樣いふ時には餘り六ケ敷い學說などに渉る事は避けるやうにしなければならぬ、それに極小さなヤット口を利き出した小兒の話などは、努めて聽いて行るやうにしなければ不可ぬ、斯ういふ工合にすると、何も樂器や道具が無くとも、謂ゆる一家の者が團欒して快樂を得ることが出來るので、それと同時に家庭に不平不滿などの忌むべき聲を洩す

者が無くなる。

すべて快樂は家族共通のもので無ければ宜しく無い、何故といふに、主人は謠が好だからと云つて、暇さへあれば唸つてばかり居たとても、側の者は其に趣味を有たなければサッパリ面白くも可笑も無いまた細君は淨瑠璃が御得意だと云つて、側の者が聞く耳を持たなければ自身も張合が無からうし、側の者は却つて迷惑にこそ思ひ、毫も快樂には感じないそれ故に何でも共通で無ければ不可ぬ云ふのである、之に就て思出した事がある、前年或人が英國へ行かれて、一夕その下宿して居られた隣りの夫婦の者が公園へ散歩に行かれた後で、其家の小兒に向つて、なせあなたは父さんや母さんと一緒に散歩に行かないのですと問ひますと、無邪氣な七つばかりなる兒童はだッて、父さんや母さんは一緒に行つても、二人でばかり咄して歩いて居るんですものと答へたと云ふ事を聞いたが、これは實に能く彼方の家庭の眞相を暴露して居ると共に、一面には、家庭の快樂は共通のもので無ければ不可ないと云ふ事を敎へつゝあるものと思はれる。

幼稚園では何をするか

神田幼稚園主　近藤　茂

父兄達の外知らぬ

「幼稚園では何をしてゐるか」とのお尋ねがよくあります、實際亦幼ない兒童を相手にしてゐますのですから、兒童の家庭にある父兄達の外餘り知つてゐる者も少ない道理です、唯今若手の中流以上の人は一度はきつとこの幼稚園の門を潜つてゐられる、茲二十餘年以來、幼童敎育の發達は著るしいもので、私が去る二十三年五月この神田幼稚園を設立いたしました當時、多田房之輔氏の一ッ橋幼稚園の外神田區内になかつたのです、近來に至つて、柄越、菊池、三崎町、西小川町、篠原、貫誠なぞが出來ましたゆゑ、收容の兒童も夥々しい數であらうと思ひます。

二十恩物の製作

兒童が日々の仕事を申すと、運動、唱歌、手藝なぞでございます、家庭にゐるとお乳を弄つたり、お菓子をせびつてゐます兒も、此園へ來ては實に生れ替つたやうで、何れも樂しく一日を暮しますが、其內手藝が重なる兒童の日課になつてゐて、これに費す時間も比較的永いのでございます、手藝はフルベル氏の貽された二十恩物の製作で、文部省の採用によつて、全國一般に行はれてゐるものです、積木、板並べ、箸環並べ、六ツの毬、三ツ体、貝並べ、紐置き、畫、豆細工、粘土細工、紙剪り、紙挾み、織紙、紙組み、縫取りと云たやうなものでございます

積木其他のいろ〳〵

積木には第一、第二、第三迄あつて、組木八個から十二個に進むのです、此木片を用ゐて滊車、椅子、橋、木箱、机の形を作り、門、家、鐘樓と云ふむづかしいものも組むのです、板並べは同樣三角形、菱形なぞの板を用ゐて蝶、菖蒲の形を作るのです、何

れも幾何學の應用からフルベル氏が考案されたので實によく出來てゐるものです、次は箸にしろ環にしろこれを數個用ゐて、果實、菊花なぞの形を作るツマリ智惠の輪と云ふやうなものゝ更に簡單なのです六ツの毬は兒童の色盲を試む染色鑑別の一方法で、色絲の毬をかけ替へて色彩の名を云はせるのです、三ツの体は天地人に象つたもの、貝並べは細螺を排べて雁、山なぞを擬へ、紐置きは紐を用ゐて畫を顯し、毛筆畫は一筆畫きの簡單なものを敎へます。

豆細工と粘土細工

其他兒童の喜ぶのは豆細工で、大豆の茹でたのを小楊枝に貫いて馬、亞鈴なぞを作らせますが、這麼ものにも天才が現れて實に驚く程上手な兒がゐます亦家庭の方からも着物が汚れると故障が出たり、學校の方でも注意してなるべく避けてゐますが、兎角兒童の好むのが粘土細工で、飾餅にしろ、何の形にしてもこれを手にさせて置けば一日でもやつてゐます、工藝趣味を吹き込むのには此上はない遊戯です

が、今申す通り兒童の着物がたまりませんから是丈は困ります、紙剪りは紙を刻んで物の形を作り、紙疊みは四角な白紙を用ゐて、物形を織るのです、紙組みは細長い紙を用ゐて模樣を組み出し、縫取りは絲で紙に模樣を縫ひつけるのです。

其他恩物以外で、麥藁細工とか色々ございますが要するに大同小異なもので、他日兒童の職業素地を養成するのが主眼となつてゐます、併し人には各々能あり不能あつて、甲は豆細工に優れてゐるが、紙織が出來ぬ、乙は紙織は出來るが積木がむづかしいと云つた樣な得失があつて、夫々の特長を發揮するやうに努めたら將來の發達に資する上に頗る有益であらうと思ひます、何分多くの兒童に對するのですから、勢ひ平等にさせます、

自動する弄具を好む

兒童の弄具はどんなものがよいか、東洋幼稚園の岸部さんも頻りに研究なすつてゐられるやうですが、これは兒童心理學の上から考へねば解釋の出來ないものです、御承知の如く何うも市中で販賣する弄具には、有毒の色彩を塗用したものがあつて、直ちに口へ運ぶ兒童の弄具としては危險此上はありません、最も主務省でも一々試驗されるのは勿論ですが、隨分塗色が害をなしたと云ふことは世間に澤山あります、今は昔と違つて兒童は靜止の狀態にある弄具は追々好まなくなり、自働車とか、電車とか云ふものを好むやうになつて來ました、

幼稚園出身者は如何

貧民の兒童を養成する特殊な二葉幼稚園は當今、四谷鮫ケ橋にありますが、園主は學習院女子部幼稚園主任で米國に一二度遊學された野口ゆか子女史です、貧民兒童養成の困難は常のと違ひ、却々容易ではないやうでございます、追々幼稚園敎育も發達して參りますから、一旦全園に遊んだ子弟が他日如何なる徑路をとるか、通常小學に入つた兒童と徑庭が何程あるか、大いに比較研究も趣味があらうと信じます。（文責在記者）

忘られたる女子の衛生

醫學博士　三宅秀

是まで學校の衛生と云へば、單に校舍や生徒の事にのみ關して云爲せられたのであるが、實は校舍と生徒と教員とは鼎の足のやうに三ツのものが對立して居るので、中に就て女教員の衛生の事に就ては最も多く注意を拂はれなければならぬのであるにも關はらず、餘り是まで多くの注意が拂はれて居らない、尤も之に關しては單り我國のみでは無い、歐米の各國でも此事に關して注意が拂はるゝやうになつたのは最近の事で、今より六七年前、獨逸で萬國學校衛生會議といふものが開かれたのが抑の初めで、次で一昨年八月、その第二回が倫敦に開かれ、そして第三部に教員衛生といふ事項が設けられた位であるから、彼我ともに未だ充分に此事に關する材料も蒐つて居ない、それ故に今詳細なる說明を試むるといふ事は不可能であるが、女教員といふものは如何なる

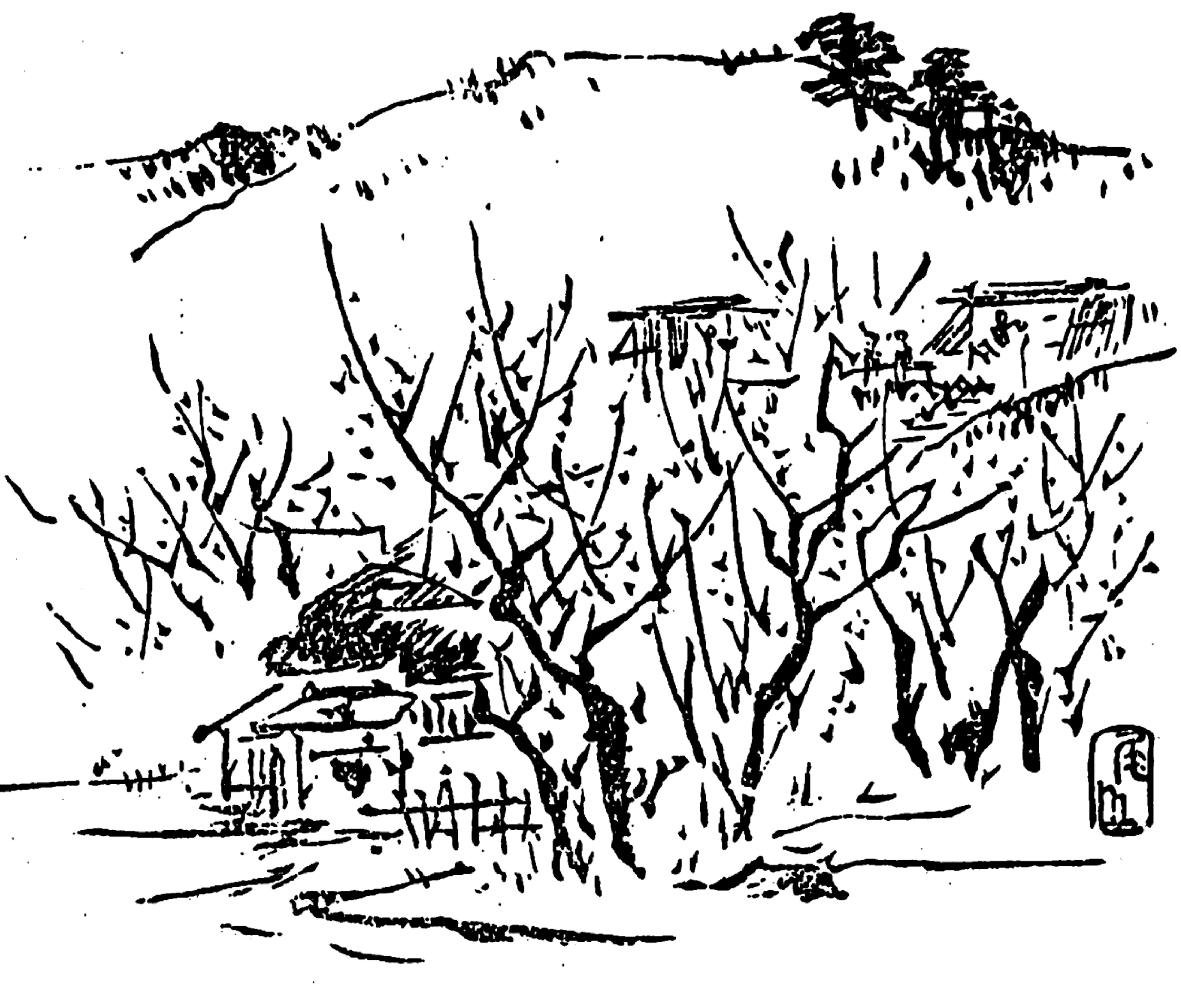
病氣に最も罹り易いかと云ふやうな事や、男子と女子との身体の組織の異同等に就ては、今更業々しく繰返すまでゝもあるまい、是も我國には十分の材料が無いから分らないが、歐洲で男女の教員に就て撿べた所に依ると、教員で肺病に罹るものゝ數は、女子の百人に對して男子は九十八人であると云ふ事だが、これは慥かに女子の身体が男子よりも虛弱であるから、從つて病氣に侵され易いといふ事を證據立て居るのであらうと考へる、それに此の事は生死の統計に就て見ても明了なる事實である、尤も女子には男子と違つて生殖作用即ち姙娠、分娩、その產褥熱などゝ云ふ事の爲に貴重な生命を殞す事もあるが獨身者でも女子は他の病に侵され易いのである。

斯ういふ工合であるから、何うも女教員といふものは老熟の手腕を揮ふに不利なる地位にありはすまいか、开は兎も角として、女教員には如何なる病氣が最も多いかと云ふに、咽喉病が一番に多い、といふものは宗教家の如く常に教壇に立つて講義するか

らであると云ふ事であるが、
それは

音聲の儉約

と云ふ事を知らずして、無暗に高調子に講義するからで、恰かも下手な慣れない辯士が壇上に立つと、無暗に初めから高調子で演説する所より、まだ自分の主張が半ばにも至らない中に、最早喉が渇ついて來るから矢鱈に水を呑んで咽喉を痛めるやうなもので、それと云ふものが畢竟聲の儉約といふ事を知らないのに基くのである、女教員の咽喉病に侵さるゝのは多く此の類であるから、聲の用法の練習といふ事をして、成べく低い調子で徐々に講義を爲る



やうにしなければならぬ、此の事は學級が廣ければ廣い程必要である、併し生徒全体に聞取れないやうな低い調子では不可ない。

それに小學校の建築だが兎角道端に建築されてあるが、さう云ふ場處では何うしても世間の爲に喧躁と騷々しくされるから、どうしても其に打勝たうとする爲に聲を張揚げるので咽を傷める、であるから、倫敦の學校では周圍の敷石を木に取換へたほどである、それから酒は滅多に女子で用うるものは無いが、煙草は喫むものが尠なく無いが、これは何方も愼まなければ

不可ぬ、左樣でないと加答兒を起し易い、そして咽喉加答兒に罹つたならば外から冷水摩擦をするが善い、夫に昨今のやうに寒くとも襟巻は廢すが宜い。

一旦呼吸器の病に侵されたものは、謂ゆる氣管支炎から肺にまで及ぼして來るので實に恐るべきである、爾ういふ人は暖爐に近寄つたり又は塵埃を吸込まぬやうに注意をしないと、進んでは肺結核などに陷つて取返しが附かなくなる、で、若しも暇と金が許すならば其間に於て充分の攝生を行はねばならぬまた社會も教員に對して夫だけの事をして行らねばならぬのである、歐洲各國の成績に依れば、年寄も若い者も共に夫等の病に侵されるのであるが、併し其原因が違うとの事である、我國では若い女教員は如何かと云ふに、餘り勉强心が强い爲に夫等に罹り年寄の教員は勉强不勉强といふよりは、校舍内で惡しき空氣を呼吸し、兼て運動不足の爲に夫等に侵さるゝ傾きがあると云ふので、英國などでは盛んに運動を奬勵すると云ふとの事だが、どうか我國でも左樣したいものである。

次に多いのは神經衰弱である、貧血は子供でも大人でも一樣にあるが、この神經衰弱と云ふ病氣に限つては大人ばかりで子供には皆無である、そこで女教員の之に罹るものは、是までの經驗に依ると大凡教員の職に就てから五ヶ年月位の所が一番多い、一体この神經衰弱といふ病氣は何が原因かと云ふに、概ね心配や苦痛などが重なる原因で、是等の爲に多く神經衰弱か又は之に類似の病に侵さるゝのであるが、さういふ病氣に罹つた時、又は罹らないやうにとて、獨逸では規定がある、例へば二十日學校へ精勤した教員には四十日乃至五十日位の休養の時間を與へる、この休養の時日の多少も學科の高低に由つて自ら差異がある、誰も腦病や精神病者等になりたいと思ふ者は無いが、系統や又は隱れたる遺傳等に因つて發するのは止を得ない、で獨逸などでは退隱料を給するの制がある、云ふまでも無くヒステリーといふ病氣は女子の特有物であるが、是は重に身体

の周圍の狀況や、又は配偶者との關係、或は配偶者を得んが爲等に由つて發るのであるから、之が治療は善く其原因を極めて手を下さなければならぬ。

彼の体操や遊戲を預かる敎員中には、往々一種の心臟病即ち擴張性心臟衰弱などを起すものがある、それに女敎員には近視眼に罹り易い傾がある、それ故に之が養生法としては眼界を廣くする、即ち遠くの方を見るとか又は廣々した所へ行つて四方を見廻すといふ風にするが宜い。

要するに女敎員といふ者が何か一種の病魔に侵されつゝあるにも拘はらず、その病軀を提げて敎場に臨むといふ事は實に危險な話で、病氣に依つては何時その病氣が生徒に傳染しないとも限らない、さうなつては敎員一人の爲に多數の生徒が迷惑を蒙るのであるから、女敎員たるものは自己の衛生に多大の注意を拂ふと同時に、時々健康診斷を受けるが善い否、學校としては單に生徒のみならず、進んで女敎員の健康診斷を時々行はねば不可ぬ。（文責在記者）

實行せる怒るな働け主義

日本女子商業學校學監　嘉悦孝子

主婦としての責任

昨年靜岡縣會に女子商業學校設立の議案が提出されましたが、少し早すぎると云ふので否決された、併し時勢の要求は妙なもので、全地方の實業學校長は今年は是非設立するやうにしたい、女子に對して實業敎育を施すと云ふことは昨今の急務であると話されましたが、有名な市村芳樹さんも、京都の商業實修學校長の井手さんも、此意見を常に懷抱されてゐられるのです、一家の經濟事情と云ふものは決して簡單なものでない、稼人たる男子に萬一の場合があつたときは什うする、と云ふことを心得て置かねばならぬ、幸ひ女子の天性が殊に緻密を主とせる帳簿上の計算に適してゐる處から、昨今の需用は極めて夥たゞしい、この機會を利用せる女子は最も幸福な一人と云つてもよいのでございます。

怒るな働け

私の主義は『おこるな働け』と云ふので、豫て生徒には申し傳へてあるので、此學校の卒業生は何れも私の主義を何處迄も押通す筈になつてゐます、卒業生の中での高等科と申すのは、普通高等女學校卒業の程度の者が入學するので、爾後二年間の修業は決して女子大學に優るとも、劣ることのないことを誓ふのでございます、　卒業生は皆　私の『おこるな働け』主義を守つて、未だに女中は使はず、自身この頃の寒氣にもめげず、水で雜巾掛をしてゐるから、安心してくれなんて手紙がくるのです、この高等科卒業生の成績を申しあげると恁うなんです。

高等科卒業生は如何

第一回卒業(四十年三月)の内で大内いし、佐伯貞子は當校の教員になつてゐますが、横堀いちは自宅が絲屋ですから手傳ひ、吉村とくも自今自宅、椿てるは郵船會社事務員、松浦祢代は共益商店、三宅ふみは商業士に嫁入しました、第二回卒業(四十一

年三月)で見ると、金子あきは當校の教員に採用しましたが、岩永つぐは大坂中山大陽堂事務員、田村フデは自宅(農家)の手傳ひ、山岸ハルは隆文舘事務員、小島常代は東京印刷會社深川分舍事務員、川島ちかは毛絲商の名古屋支店詰、加藤初江は自宅(穀物)の手傳ひ、辻つゐは三松商會事務員、黑田けいは自宅(材木商)の手傳ひ、齋藤シウは(三富商會)の事務員です、其他本科卒業生は何れも實業家の爲に片腕ともなり、働いてゐるのです。

ガラス張の家に住みたい

私の主義は前申した譯ですから、矢張生徒には自分が行つて模範と示さねばならぬ、其故 私は主義の實行者として自らも信じ、一例として自ら毎朝早く床を離れて、すぐ雜巾掛けをするのです、殊に私は元來秘密と云ふことを好まぬ、髷へ髮を結ふ場合でも部屋はガラリと開放して置く、そして一切秘密と云ふことを避けてゐます、全体 私 は自分の一擧一動を最も明かにしたいと云ふ希望がある、差支へ

なくばガラス張のやうな透明な家に住んで見たいと云ふのが理想です、成程働くのは辛いことには違ひないでせうが、私は決してこれを苦みとは思はぬ、働いてゐる間は汗が出る、生徒達は私の雑巾掛け、冷水の中に兩手を浸すのを冷たいでせうと云つてくれますが、私は決して冷たくない。

抱車夫に交つて雪を掻く

その働いて汗の流れる位で、食卓に向つた時の心地よさと云つたら、實にお話以外です、世の中の人は寒いと云つては火鉢に寄附いてゐるので猶更寒い活動と云ふことは非常に愉快なもので、非常に暖いものです、過日雪降の朝のことです、宅の車夫が人夫逹と學校前の雪を掻いてゐるのを見て、私はさぞ辛いだらう、見てゐるのは氣の毒だと思つて、早速用のない生徒を呼んで共に雪を掻きました、世間の人は女だてらに餘りの出過ぎ方と申す方もありませうが、私は決してさうでないと思ふ、苟くも女子がこの活社會に立つて、一家の主婦となつて働く塲合に、そう〳〵人手ばかりを待つてゐられるものですか、夫の片腕ともなり、力ともなつて、共に一家を經營する重任を持つ身です。

嫁入先は豆腐屋でもよい

夫からどうも普通の高等女學校丈を卒業なすつた方は、兎角緣先を文學士とか、何とかに求めるやうですが、私は常に生徒に向つて、天緣があれば、たとへ相手が豆腐屋でもよいではないか、自分に確固たる手腕があれば、いつでも家運の盛大を招くことが出來る、何事も親のなすまゝに任せて置くを得策と申すのです、夫故卒業生は何れも、一廉の實業家の妻となつて大いにやつて見たいなぞ云ふ者がある併し女子の特性の然らしむる處が、兎角安佚を貪りたがるのは弊害であらうと信じます、家政のことはなるべく月々八十圓の入用は五十圓で片附け、下女三人を使用するとせば二人に改め、衣類も古いのを利用してやるやうに、常に細かな心懸けが肝腎かと思ひます。

手工をもつて歐米に捷て

摘細工講師　吉岡房次郎

主婦としての腕前を示せ

女子が技藝を修めるのは何も獨立するが爲の用意計りではない、常に家庭の上で一家の主婦となつてゐれば、家族一切の裁縫は云ふ迄もなく、一寸したものが刺繡を半襟に應用して見たり、造花や摘細工で室内を裝飾して夫の眼を悦ばせたり、小兒服を作つたり、改良服を試みたりして主婦としての腕前を遺憾なく現はすことが出來る、自分に技藝の心得がないばかりに高い價を費すのみならず、近來のやうなすべてに裝飾に心を用ゆる世の中では、第一その道を知らねば交際場裡に立つても、肩身が狹い道理です、そんな事はよいとして、萬一を期す獨立の基礎が立たぬ。

女子は手工に成功す

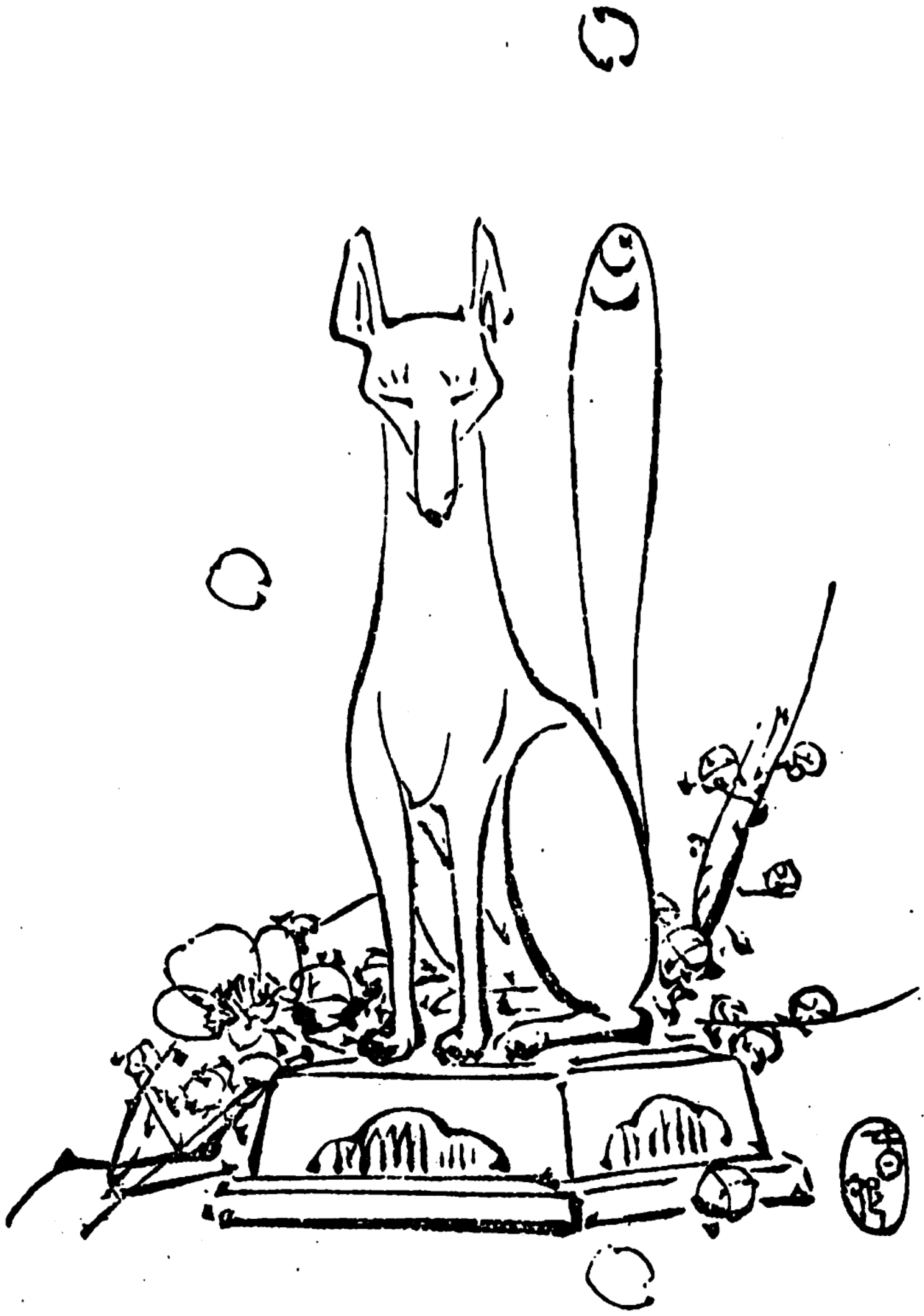
讀者も御承知の如く、歐米各國は科學の進歩が著

るしいために機力が盛んに應用される、我邦のものが手の細かな勞役に服して、極めて働作が時間的であるにも拘らず、外國では造花の材料を作るにさへすべて機力によるのである。斯く機力による製作が敏活であるから、數量に於て優る勘定で、隨つて經濟上の勝利を來すやうに思はれるが、事實爾うばかりも云はれぬ、近來歐米諸國で我邦の摘細工、編物、刺繡の如き手工的製作物を非常に歡迎する傾向あるのを見ると、是等技藝の實修で、女子が先天的の技術的手腕を認められてゐる今日、斯道の前途に貢獻すると云ふことは餘程有望でありはしまいか、歐米人が機工によつて成功せんとする或物に對抗して、我國の手工を以て作品の優劣を世界の市場に爭ふことは、實に此際最も女子の爲に急務として且推薦する所以であります。

造花は未だ外國に及ばず

目今盛んに製作さるゝ造花なぞも、こゝ數年來の發達が極めて激しく殆んど實物に劣らぬ位になつた

併し悲しいかな其材料となるフランテンは到底我邦の製品では未だ完全なものは出來ぬ、第一染色の衰へると云ふ弱身があるのが缺點です曩に時勢に促されて立つた造花會社も遂に沒落の不運に會つたのも全く我邦での造花術が發達したとは云へまだ佛國なぞから輸入する者は澤山ある、多少外國へ輸出はしてゐるが到底今のところ全然輸入品を喰ひ止める譯にはいかない、それに彼國では工場の使用人に機工的の敎育がある、亦分業と云ふことが頗る規律正しく行はれてゐるし、前申した機力に伴ふての熟達で遺憾なく上等品を作り上るからです。



刺繡は油繪の如し

近來淺草邊に造花の花や葉を分業的に製作して、實業學校や、商法人へ賣渡す處が出來て相應にやつてゐるが、ツマリ外國ではこの方法を隈なく取つてゐるのです、刺繡も今では晴着の裾模樣に應用するし、半襟帶、屛風、壁懸なぞ色々の需用があつて外國へも盛んに參るし、工賃も餘程よいのです、刺繡は御存じ

のやうな、濃淡相含むと云つた處も出來て、恰も外國の油繪に對しませうか、すると摘細工なんかは差詰彫塑にも競べませうか、互ひに藝術的の眞價を發揮するのは時節柄快心な事と思ひます。

發達せる新技藝

最後に私の唯今東洋女藝學校で敎へて居ります摘細工のことを少しお話しませう、摘細工は私の兄男成から引續いて研究に研究を加へ、改良に改良を出來るだけ施して、餘り世間へ出しても差支へないやうに仕上げた積りですが、尙研究の餘地が充分ありますので、追々私は斯道の發展を計る考へです、摘細工も今では寫生的に花、鳥何でもござれですが、ずつと古い記錄を調べてゐると、却々由緒の深いもので、早晩に企てられたものでないことが知れるのです。

摘細工の沿革

今を距る百三十年前即ち桃園天皇在世の當時で、京都の公卿に藤原康照と云ふ人がゐた、其頃徒然の餘り押繪なぞを張つてゐる內、不圖着物のやぶれた青、紅の布片や、裏切の利用法を思ひ附いて、布を切り割いて摘み、秋七草の花切を作つたのが源因だそうです、其後藥玉をも作つたが單に殿上の使用に止まつて、一般に摘細工の趣味も分らなかつたのでした、併し明治十年頃には外國へも輸出をしたり、ハンカチの箱の上に模樣を置いたりなぞしてゐたそうです、近年になつて私の兄や其他の人々が苦心をして遂にこれを繪畫に模すやうにして今日の盛事を招いたのでございます、昨年の博覽會には學校から骸骨踊を出品して褒狀をも受けました、當時は綿細工をも交へ、顏とか、頭なぞは餘義なく押繪風にしつらへて大ひに美術的に仕上げたのです、女子の職業としての摘細工も前申した次第ですから有望であることは、今更私の喋々を待たなくともお解りでせうと思ひます。

みよし野の花は霞につゝまれて
おぼろげながら匂ふ月かげ

尾形光琳の質物手形

梶山杳丘

詩歌や文章より下つて俗謠等に至るまで、仔細に研究すれば善く其の時代に於ける人心の傾向を窺ひ知る事が出來ると云ふ咄は嘗て先輩から聞傳へて居るのであるが、これは實際吾を欺かざる説で、我々が間々斷簡斷篇の間へ首を突込んだ時でも知られる乃で之あればこそ我等は既往を知ると同時に現在と比較し、尙ほ進んで將來をも推斷するを得るのであるが、併し其樣な理屈張つた事よりも、今を去る僅か四十年前、即ち明治の初年に於ける俗謠一つでも善く其の當時の人心を窺ふに足るのである、その俗謠とは

　わしも是から敎員やめて
　　新聞社說の勉强する

と云ふのであるが、是は丁度その頃彼の成島柳北翁や福地櫻痴居士等が交る〳〵筆を執られた朝野新聞といふのは、社說は固より其他の部分も多くは漢文で、それに無點と來て居るから、生半可の漢籍を讀んだ者には解らない、讀が下せない、其頃の小學校敎員さんには十中八九、恐らくは九分九厘まで讀めないのである、否、學術の進歩せる明治の今日でも、中學の五年生でも少々眉を蹙める事であらうと思ふ去れば明治の初年に於ける小學校奉職の敎員さんの述懷としては實に善く穿たれたる俗謠と考へる、それと同時に誇張が無い、現今の俗謠などを聞くと何うも抱負や主張を衒いたがる氣味のあるやうに想ふ、其所へ行くと昔の人は正直で、言はゞ飾り氣が尠ない、右の俗謠でも、苟めにも敎員ともあるべき者が、新聞の社說にある漢文がスラ〳〵と讀み下せないとありては、世間に對して甚だ面目次第も無い譯であるから、敎員の位置や俸給も棄てたくは無いけれども、さう〳〵何時までか世を欺くといふ事は良心に愧るといふので、そこで敎師の職を辭して尙ほ一層新聞の社說位は讀めるやうになつて、確かに

人の師表となるに足るべき素養を作らうと云ふ、自ら其の裏面に奮勵心のある所が見えるのであるが、これを現今の夫等に比較して見ると月鼈ほどの差があるのである。

これは昨年の事であつたが、記者は一日三越の三階樓上に光琳式の研究材料が陳列せられたのを見に行つたをりに、不圖予が視線を引いたものがある、それは即ち一箇の硯箱と一箇の水指と、外に一通の小奉書に書かれたるもので、好奇の念に驅られてよく〱視れば左の如き文言が陳ねられて、墨色は蒼然たるものであつた、即ち

質物手形

一光悦鹿の硯箱　壹面
　但内に硯水入有之
一信樂水指　一
　但塗ふた有之
〆貳色

右者金子急に依要用、右の道具質物に入、金子七

兩、利足月壹分にて、來亥の三月切にて借用候處實正明白也、右の日限に元利相調請戻し可申候、若一日にても相延候はゞ、御賣拂成共、其方御所持成共、御心次第に可被成候、尤一言の斷申間敷候、右の道具不淺繁代々所持、其外にて構さゝはり無以、其方にて其内火難盜失不慮の義有之候はゞ、可爲兩損定之、爲後日依て如件

元祿七年
　戌の十月晦日
かり主
　尾形光琳　花押

といふ一札の質入證文であつたが、惜いことには先方の宛名の所は切落してあつたから知ることを得なかつたが、この珍品今は高橋義雄氏の有に皈して居るのである。

サて前顯の文句を通讀するに、如何に其頃の人々が金錢の貸借に就て責任を重んじたかと云ふ事が推測せらるゝでは無いか、然るに當今は如何であるかと云ふに、僅かの品を質入れするにも、又は金錢の

貸借をするにしても、二人も三人も保證人を立てなければ融通が附かない、のみならず期限になつても容易に返濟しない、そこで貸主は止むを得ず法廷を煩すと云ふやうな事に立至る、すると借主の方では、謂ゆる盗人にも三分の理ありといふ譯でもあるまいが、なか／＼擦つた摩だのと云つて、借る時の地藏顏、返す時の閻魔顏でも返せば宜いが、容易に返さうとはしない、僅か百年かそこ／＼で、斯くも人心に激變のあるものかと驚かるゝばかりである。尤も元祿時代と現今では、世渡りの辛い事は迚も比較になつたものでは無いが、一方人智の進歩といふ點から見ると、元祿時代は到底現今の小指の頭にも及ばない、左すれば文明といふものは人智を惡い方面に導くものであるやうに考へらるゝが、決して爾ういふ譯のものでは無い、けれども西諺にもある通り、法律繁ければ犯人も亦從つて多しといふやうに、人智が開けると共に權利だの義務だのと云ふ感念が發達して、斯うすれば斯う、彼すれば彼と云ふやうな奸智に長たる徒が出て來て、そして良民を苦しむる所から、自然側の者も用心深くなつて、縦ひ證文一本でも文句を八釜敷く書かせると云ふやうになつたものであらう、それを想へば、文明といふものは、一方人智を進むる代りに、他の半面では德義の觀念を減殺せしむる者のやうに思はれる、で、よく其間に在りて人心を緩和せしむる者は何人であるかと云へば、社會の花たる女子を措いて他に無いのである、實に女子は社會の緩和劑である、倫理學者が何うの斯うのと云つても、一聲產聲を揚げると同時に、三ツ兒の魂百までもの感念を深く刻み込まれるのは母より外には無い、去れば母たる者は其子ばかりで無く、國家に對して斯くも重大なる責任を有つて居るのであるから、既に母たる者は勿論近き將來に於て母たらんとする諸嬢は、常にこの心懸けを忘れてはならぬ。

糸やなぎ風のまに／＼なびくなり
春のすがたをいろに見せつゝ

吾兒の愛せられざる譯

秋山ための

可愛がられる親こゝろ

廣い世界に何が可愛いと云つて、吾兒程可愛いものはない、親の情は妙なもので、其兒が白痴なら白痴だけに亦可愛ゆさも人一倍なのです、夫れ故世間の人から『眞實によいお兒さんですね』と、小兒の頭でも撫でられたら最後、親の慾目か『いゝえ、いたづら者で困ります』と、口の先では云つてるが、胸の内は全く割つて御覽に入れたい位誇りで、充てゐるのでございます、其に私の兒は何うして世間の人に可愛がられないのでせうか、私は何時も獨り此事を考へては、唯子供の不幸はかりでなく、私一代の不幸のやうに思ひ浮べて、頑是なく眠る小供の顔を見るにつけても、かへつて世間の方が怨めしいやうな氣も致しますので、親は眞實に莫迦な者です。

何故吾兒は憎まれるか

この兒は當年迎へて十一歳になります、父親には昨年死に別れて、兄妹もあつたのですが、矢張夭死をして幸か不幸か此兒ばかりが殘つたのです、元來夫は小煩惱な質で、獨り子だけに一層可愛いがつたのが禍をして、今では世間の人達からなぜか爪彈きをされるのです、夫故私も親として可愛がられぬ譯を段々心懸けて見ますと、是迄何の落度も見えなかつた吾兒にいろ〳〵の疵が出來て、成程と合點致した次第です、全体私は三度のものは別として、小供が學校から歸つてくる、すぐおやつをやることにして居りました、例へばビスケットとか、餡パンとか。

小供にお錢を持たせた罪

其外一切間食は父も八釜敷云つてさせませんでしたが、兎角遊び盛りの小供は空腹を感じると見えて、約束以外に食物をネダルのです、ところが生憎手許に買置がない、私が買つて來て其内の二個、三個をやればよいのでしたが、一度銀貨を持たせて小供に

買ひにやつた、サア是が癖となつて、いつもお錢を呉れと云ふ、父に知れると八釜敷云ひますので、小供は隠れて私に云ふ、私もツイ二度が三度となつて其結果、甚だ面白くないことが出來たのです、いつも私の處へ來る客がお土產と云つて菓子なぞを呉れる、我家なら無論私の手へ一旦受取つて本人に其内を幾分宛分けてやるのですが、ツイ途中とか、遊びに行つた先でお菓子を袋ごと頂戴する、宅へ持つて歸れば私や父が一應預かることにしてありますから、小供の慾で其儘知らぬ顔をしてすまして了ふのです。貰つた事は默つて了ふ食物ならまだよいとして、或家ではお錢を握らせる、小供は是を駄菓子屋へ持つて行けば食物と換へられる位は覺えてゐるので、すぐ食物に代へる、そして平



素兩親の八釜敷云ふ果物とか、三文菓子なぞを買つユ喰べる、そして知らぬ顏でゐるから親はそれとも心附かず、度重なつてビックリするやうな場合が終始あつたのです、この親にだまつてゐると云ふ事が痛く先方の感情を害したと見えて、其後は何もくれなくなつたばかりでなく、小供は憎まれるやうになつた、吾家では隱し喰ひをする、意地が汚なくなつて、お客なぞがあつた時は、私の側に附きまとふて、菓子をネダルのです、それで私が茶を入れに次の間にでも立つと、得たり賢こしと手を伸して、客の前もある事か、二個三個引つかんで逃げ出すのです、恰で泥棒猫のやうなのです、夫れゆゑ來客の時は少しも目を離せませんし、第一お客樣の氣に障りますからね。

内にゐるときと外にゐる時

其癖非常に弱蟲で直ぐ泣きたがる、友達と一所に遊んでゐても少し氣に障ると泣いて威かすのです、それで相手から少し打たれでもすると火の燃いた樣に泣き喚いていゝつけ口をするのです、私はモウ何をされても自分の子が惡いと思つて、すませますが、父はそうでない『擲たれて歸つてくるやうな兒は内へ入れぬ』と云ふものですから、小供は棒ッ切なぞを持つて飛び出す、了ひには怪我でもしたり、させたりするので、友達は遊ばなくなる、相手の親からはいたづら者と憎まれる、口の達者なことは亦驚くほどで、隨分親にも小憎らしい物の云ひやうをするのです、吾兒であればこそ可愛ゆがりもするが、前申した、次第故、世間には一向同情がない、毎日學校へ通つてはゐるが品行が惡く喧嘩ばかりをするとのことです、先生達の受けも無論よくないのですが家へ歸つて父親の前へ坐つた時は何うしても、別人でそれほど世間から憎まれる兒とは思はれませんのです。

小供の敎育は困難

兒供の家庭敎育と云ふものは却々むづかしいものです、兎も角おだてれば附けあがるし、叱り過ぐれ

ばいぢける、陰へ廻つていたづらをするやうになる餘り捨て置くとのらくら者になつて勉強はせず、勉强を進めて外出させねば体育上の不足があると云ふし、私は親として此事を考へ續けてゐるのですが、困つたことには既に何事も晩へ、吾兒は世間の人から可愛いがられない今日となつてゐるので、何だか物足らぬ感があるのでございます。

誤れる女子の獨立觀

穗田憲彌

近來頻りに女子、殊に相當な敎育を受けたる女子の間に獨立といふ事が言囃されるが、今その言ふ所を聞くと、一生何處へも片附かないで、何か一種の職業を求め、而して自分獨りで生涯を送つて行かうと云ふに過ぎないやうに思はれる、成程それも一つの獨立には相違あるまい、けれども予が見る所ではそれは眞誠の獨立生活といふものでは無くして、謂ゆる孤獨生活といふもので、一旦他へ片附いたが、不幸にして良人に先立たれたとか、又は何か萬止むを得ざる事情の爲に、初めから單獨で世を渡らねばならぬといふやうな女子の執るべき生活法で、普通一般の女子が執るべき生活法ではあるまいと考へる、若しも其が眞の女子の獨立生活といふものであるとすれば、その女子は殊更に天與の恩惠を打捨てゝ好んで淋しく斯の世を送る所の偏屈者と云つて差支はあるまい。

何故と云ふに、女子には女子の天惠もあれば、又天分といふものがある、而かも其の天惠を抛ち天分を忘るゝに至つては、正しき意味に於ける女子と云ふことは出來ない、第一女子たる者が他家へ嫁げば獨立といふものが出來ないと考へて居るのが抑の誤りである、この謬見より割出して遂には孤立と獨立とを間違ひるのであるが、古人の謂ゆる最初毫釐の差が千里の隔りとなるので、誠に氣の毒千萬の至りと云はねばならぬ、實際から云へば、女子たる者は

他家へ片附いてこそ初て獨立が出來るので、その以前は父兄等に凭つて居るので、獨立どころでは無い寄生蟲である、假りに何か一箇の職業に依りて自己の口を糊するに餘りありとしても、その父兄たる者は其を以て心を安んずるものでは無い、何うか早く良縁を求めて其子女の身を落付けて遣りたいとは、普通世間に於ける父兄たる者が子女に對する愛情である、否、口に出しつゝあるのを以ても知ることが出來る、然るに少しばかり物の差別でも見えて來ると、何がなしに獨立生活などゝ云ふ事を口走るのであるが、實に如何なる心事か了解に苦しむのである、併しその獨立生活を口走るのも宜いとした所で、左樣云ふ者に限つて、果して善く獨立生活を持續しつゝあるやと云ふに、何うも多くが左樣で無い、上部は成程獨立である獨身であるに相違ないが、左樣云ふ者に對して、或は世間の猜疑から有るかも知らないが、何に致せ兎角の評の起る所を見ると、萬更火の無い處に烟りの起るもので無いと云ふ推測から

一點の疑雲が生じない譯には行かぬ、まづ其は其として措いて、男子も左樣であるが、一体女子と云ふ者は何が爲に斯の世の中に生れ出たものであるかと云ふ事を第一番に考へねばならぬ。

造化が男女を斯の世の中へ生み出すと云ふ事の眞意義は、今こゝに繰返す迄もなく、異性の男女を結合せしめ、而して斯の社會といふものを永久的に持續せしめやうといふ眞意に外ならぬのである、換言すれば、現世を經營せしむると同時に、未來に社會の相續者を留存せしめたいとの深意に外ならぬのである、而かも其天意の存する所を暴殄して、殊更に孤獨生活などを稱ふるとは、不心得も亦甚だしい次第ではあるまいか。

尤も女子は女子、男子は男子と云ふやうに箇々孤立の生活を爲して濟むものであれば率知らず、苟くも左樣で無いとしたならば、生理上は勿論のこと、女子の性能發展および天職より、はた國家の組織上から、決して女子が孤獨生活を唱ふべからざるのみ

では無い、男子もまた單獨生活を口にすべき筈のものでは無い、手近い咄が、世間に往々ある事で、若しも自分の家に相當の相續者の無い時には、どうか先祖の祀を絶ちたく無いといふので、夫婦養子までもして跡目を續がせるでは無いか、して見れば女子が初めより單獨の生活をして生涯を送ると云ふ事の天則に戻るといふ事は、火を睹るよりも燎かなる所以であらう。

前にもチョット云へるが如く、女子たる者は他に片附いてこそ獨立生活といふものが出來るので、何故と云ふに、異性の男女が相結合して一の家庭を成してこそ、初めて男子も女子も各々その天分を盡すの首途に立つ事が出來るといふもの、即ち之が取りも直さず、男子も女子も獨立の域に達したと云ふものではあるまいか、まだ夫までは父兄等に凭りかゝつて居るので獨立とは云はれまい、尤も昔のやうに、女子には三從といふ事があつて、嫁しては良人に從ふのが其一であるといふやうな舊思想に捕へられて一旦他へ片附いた以上は、最早女子たる者は其良人たる者に頭が上らぬものであると考へたならば、成程女子の獨立といふものを蹂躪せられて婦人の一分が立たないやうにも考へられるが、それは決して左樣いふものでは無い、良人たるものだからとて、何も妻女を奴隷視すべきものでは無い、謂ゆる良人は男神、妻女は女神で、この二柱の神が備はりて初めて一家の繁榮も期する事が出來るのである、之に反して、若しも其の一柱の神が缺けたならば、どうして一家の隆運を圖ることが出來やう、それは決して出來る筈のものでは無い。

男女に關はらず凡そ斯の世の中へ生を受け來つた者が、餘程の事情なくして普通一般の者が、各自その天分を盡くす事が出來ないとしたならば、寧ろ初めより生れて來ない方が増なのである、たとひ生れ來つたとしても、それは社會の長物で他の者の迷惑は此の上も無い次第と云はねばならぬ、既に一たび社會に生を享け來つた以上は、出來得る限り天意の

命ずる處に從つて本分を盡さねばならぬ、即ち男子なれば、父となると同時に國家有用の材となる事を皈趣としなければならず、女子なれば、賢妻たると同時に良母たる事を心懸けねばならぬ、これが即ち男女たる者の各自の獨立生活といふもので、この二箇の獨立生活が相頼つて初めて家庭といふものゝ圓滿も保てれば、又平和といふものも期する事が出來るのである、之に加ふるに、延いて國家の隆昌といふものゝ根源も此所に胚胎するのである、それにも拘はらず、僅かばかり青表紙やクロース綴の本を繙くり返した一知半解の生物識の女子が、眞誠の獨立生活と孤獨生活とを履違ひて、而して斯の世を我物顏に暮して行かうとするなどは實に奇怪至極と云はねばならぬ、本誌購讀の諸姉には左樣いふ履違ひをなさるゝ方の無い事は萬々保證するが、廣い世の中には左樣いふ者が無いとも限ら無い、その時には充分この鉞斧で其の迷ひの塊を打破つて、速かに本分に引返されんことを切に希望するのである。

夜泣饂飩屋話

玄々洞人

深夜市内某橋畔に夜泣饂飩屋の物語を聽く、都會の暗黑裏に現れたる秘密は集めてこの數節に潛む、諸嬢一讀の榮を賜へ

自然主義の側杖

何が辛いと云つて私の商買程辛いものは天下にあるまい、殆んど都會八百八街の人々が晝の疲れを白河夜船の頃から掛けて、一杯二錢五厘の饂飩の荷を擔ぎ廻るのです、折節の雨、雪の夜辛いことは一通りでないが、河風寒くちりんの音を立てながら細路次の溝板を踏み外して狗に吠へられ、うつかり荷を下してバタ〳〵火の粉を飛ばすと、大喝一聲査公ドンにお目玉を頂戴することはよくあります、そりやア草木も眠る眞夜中を目當な古風な商買ですから、隨分と氣持のよくない目に逢ふたり、飛んでもない自然主義の側杖を喰ふことも度々あるのです、或夜のことでした場所は赤阪です。

前夜のそれは身投女

兎もすれば雪もよひの空がむづかしいので眞ッ向から投つてくる北風の寒さ、荷を斜に揹いて行くと『あの、うどん屋さんですか』と四五間先から突然女の聲なんです夜は闌けた午前二時、星明りに透かして見れば白きは顔か私はギックリした、この夜更に然も女の一人あるきは仔細なくてはかなはぬ事若しや噂に聞く狐狸の類か、何にしても物騒なことゝ思つてゐると女は近づいた行燈の光にパッと照らす顔を外けて、『アノ笄町へはどちらへ行きますか』ときくのです、何氣なく方角を敎へてやつたが、翌々日の新聞へ、笄町の某井戸へ投身して死んだ女の事が出ていましたので前夜を思つて氣味が惡るかつたです、何でも違約し



た男への面當だつたそうです。

夫婦喧嘩の叫び聲

ある晩でした、半藏門の前から麹町の通を行つて交番の角から番町の方へと志して行くと、阪の途中にあるお邸に近い左側の家の內で男の聲『何故お前はそんな薄情なのか』と切々に云ふ、するとやがて女の啜り泣く聲がしたかと思ふ途端『莫迦ッ』とグヷンと音がした、女は一層激しく啜り泣く、すると引續いて子供が泣く、一家は恰で引くり返るやうな騷ぎでしたが、私が暫く荷を休めた後、チリン〳〵と鈴の音を嚴しくやつたので、女は急に默つて了つた、男も靜かになつた、跡はヒッソリ閑、唯風の音がゴーと地を捲いて立つばかりだつた、こんなことはいつでもあります。

書生の喰逃げと藝者街

よく書生達が三四人やつて來て盛んに喰べる、いざ勘定となると、いつしか一人減り二人減り、終ひには皆逃げて了つて、飛んだ馱目を見ることがありますが、まア仕方がありませんさ、一番よく賣れるのは藝者街ですね、カラコロと裏口をあけて下女が頓馬な聲で呼ぶ、急いで荷を下ろすと風邪聲かなんぞで『あの饂飩を三杯あつくして下さい』と云ふ、つまり正直に申上げると茲等が儲け處なんです、さうかと思ふと、恐ろしいやうな嬉しい目に逢ふのです、いつでしたか覺えませんが、ツイ二タ月前のことです、その晩は小雨がシト〳〵降るし、寒さは寒し、一層商買を廢めにしやうかと思ひながら、出て見たのです、大川端に差かゝると。

不氣味な男に出逢ふ

河面を吹き上げる雨斜吹、身に着けた笠も合羽も心地よくはなかつた、お負けに暗さは暗し、其處此處の物かげな瓦斯燈を目あてに、奴傘に辛くも行燈の灯を防いで、やつてくるとすぐ前の軒先から『オイ』と呼ぶのです、『ハイ』と答へて其方を見ると、男は跣足で尻からげ、何やら片手に風呂敷包みを下げてゐる樣子、てつきり奴だと心得て『うどんです

か」と機先を制すと、男は『うどんもだが、少し頼まれてくれないか。』と云ふのです、『何を』と問ひ返すと『こ……これを預つてくれ、お禮は幾干でも出すが』と云ふ、がさて不氣味なもので、大分重そうな代物、返事にまごついてゐると、男は笑ひ出して『けちな奴だなア、そんな度胸でよく夜の家業が出來たものだ』と云ひ、うどん三杯を注文して喰べ、ポイと壹圓札を投げ出して行つて了ひましたが、變な奴に出逢ふもんです。

技藝教員の拂底せる實例

東洋女藝學校理事　麻生武龜

誤まりし女子教育

近年、女子教育が殷んになつたと云ふことは實に爭はれぬ事實です、殊に從來は女子教育として、は先づ學問に重きを置いてゐた傾向があつた、その結果學生は理論一方にのみ偏つて、兎角生意氣に流れ易く、徒らに虚榮心を助成せさては家庭から小言が出た、殊に嫁入をした者は姑との折合も惡く、實際一家の主婦としては完全なものとは云へなかつた、之は蓋し教育の方法が誤つては居るまいかと云ふので、此頃に到り、俄に家庭に必要な實科を修させるのを急務として來たのです、なぜ技藝が夫れ程尊いかと云ふに。

米國の技藝奬勵

社會の生活狀態が一變して、中流以下では却々男子の收入のみでは家庭の安樂を圖ることが出來ぬそれに多年女子が深閨の人となつて、直接社會に活動を許るされなかつた反動から、進んでこの要求を充そうとした譯なのです、申す迄もありませんが世界各國の實情に照しても、女子に技藝殊に手藝を授けると云ふのが緊要であるのです、彼米國の如きですら、殷んに奬勵してゐるので、我文部省も近頃に到り、餘程手藝教育に力を入れて來たやうでございます、技藝の種類を云ふと、裁縫、刺繍、造花、

摘細工、編物、袋物等で、裁縫の如きは昔から今日迄別に甚だしい變遷もありませんが、刺繡、造花、摘細工などの發達は驚く可きもので、女子の職業としても皆立派なのでございます。

技藝敎員の拂底

かゝる技藝敎育が社會に歡迎され居るにも拘らず未だ公立の技藝專門の學校がない、地方の高等女學校などにも裁縫科は置かれてあるが、其他のものは有る所と無い所があつて區々になつてゐる、一は學校に採用されないのが一因かは知れないが、技藝敎員の拂底せることは實に爭はれぬものと云つてもよい、昨夏私の學校で夏期講習を行なつた時、極めて短期にも拘らず來會した敎員は百五十名の多きに達して、何れも學校から出張した者です。則ち

東京一〇、靜岡五、三重三、茨城三、
栃木六、秋田一、神奈川五、千葉三、
埼玉五、福島五、宮城二、青森二、
北海道五、石川二、福井二、愛媛三、
奈良五、岡山一、山口六、大分三、
福岡一〇、長野四、新潟三、山梨三、
高知四、兵庫三、廣島七、長崎三、
宮崎三、佐賀三、熊本一、
外に淸國人一二、

と云ふ順で日本全國殆んど、參らぬ縣はない位でした且地方の中等敎員は何れも相當の地位あるものばかりでございましたのです。

敎員養成と曖昧學校

前申上げた次第で、一私立學校か一講習にかゝる多人數を集め得ることから考へ見ましても、如何に女子敎育の趨勢が實科に重きを置くやうになつにたかゞ解るのでございます、それと同時に地方の學校が敎育ある技藝職員を要することに腐心しつゝあるは事實でございませう、併し兎角時代の要求に應じて興る學校の中には曖昧なものがあつて、ウッカリ信じてかゝると飛んだ眼を見ることがないとも云へませんので、地方の方々の豫め考へて置かねばなら

ぬことだらうと思ひます。

技藝覺込みの期間

裁縫が果して數年の練修を要するや否かは別問題として、學校ではなるべく修業の期間を長く仕たがるの弊がある、學校側から云ふと、少しでも生徒を餘分に引張り込み、なるべく收入を得やうと努むるのは最もな話ですが、刺繡なぞは三ケ月もやれば一寸したものは刺し得らるゝのです、實際これによつて糊口することも出來るのです、勿論各自の腕次第ですが、勉强の方法さへ旨くつけば夫れ程の困難を經ずして立派に立ち行かれも出來るのでございます何は兎もあれ、技藝教員の養成は時勢の要求に應じた緊急な事と信じます。

昨今の文藝界

文學士　三輪田元道

先頃小松原文相が文士を招待せられたと云ふ事實は最早公なることであるが、輙もすれば世の中には、謂ゆる文藝といふものと教育とが相反するものゝ如く見て居る者が尠く無い、けれども之は間違つた見解と言はねばならぬ、元來教育の眞髓なる內容は文藝に由るのである、例へば、哲學の如きは固より智的に屬するものであるが、若しも其が文學的詩的で無かつたならば到底人を動かす事の出來るものでは無い、彼の名高きショーペンハワーの如き、實は少々片寄つて居て、而して厭世的ではあるけれども、併し吾人が模範とすべき人であると同時に、思想界を動かす所以のものは、その哲學が文學的であり詩的であるからである、古來プラトーの如きは思想界の王と稱へられて居ると、云ふものは其の哲學が乾燥無味であつたならば必ず左樣云はるゝ氣遣ひ

は無い、即ち智的は勿論のこと、その他想像にも感情にも富んで居るから、之を讀む者をして懷かしくも亦床しくも思うて慕はしむるのである。

敎育も亦その通りで、元來敎育といふものは乾燥無味なるもので興味も何もあるものでは無い、それ故に之を形式に依つて輪廓を描いた丈では迚も人物を造ると云ふ事は出來ない、即ち女子敎育であつたならば謂ゆる女らしい性格を保たしむる、換言すれば、女としての價値ある人を造ると云ふ事の出來るものでは無い、尙ほ親切に云へば、人情に富んだ、人間らしく、母らしく、はた妻らしい含蓄を有つて居るものを造らねばならぬ、決して偏狹では不可ない、尙ほ時としては血あり淚あると同時に、物の比較分別等の智識が完全して居らなねばならぬのであるにも拘はらず、世の中の事は多く偏狹に傾き勝であるやうに思はれる。

現今行はれつゝある所の敎育は如何であるかと云ふに、繰返すまでも無く智的に傾いて居る、然して

之と對立する文藝は情的に傾く上に、尙ほ進つた方向に人を引付けやうとして居る、細言すれば、道德と離れて別に文學があるやうに考へて居る、否、確かに左樣道破して居る、凡そ一世を動かす程の文學なれば、必ずその中には確乎たる道德の信念が含まれて、而して人を高尙に引付ける考が現はれて居るもので、例へば、セクスピヤーとかゲーテとか又はダンテとか云ふ人の傑作は、文藝であると同時に敎科書としても此の不都合をも見出さぬのである、此く傑出の文藝になると　道德と智識とが並行して居るが、然も無いものは兩者を遠く隔離して居る、彼のニーチエの如きは精神病者であるのみならす、彼が末路は如何と云ふに狂人となつた、この人は最も極端な本能滿足主義を唱へたのであるが、之は實際思想界の眞の產物といふ事は出來ない、變化である、故に奇なるものと稱する事は得るも模範とはならぬ。

一体極端な自然主義といふものは、取りも直さず一種の動物主義に陥るのであるから、即ち人間の堕落とか獸慾飽滿的とかその他弱點または無教育の狀態等が寫實の材料となつて居る、是の故に夫等の主義を持する作者の手に成れる小說なり脚本なり、俗人は一時之に對して快哉を叫ぶが、併し其が社會に及ぼす影響は實に恐ろしい全体斯う云ふ人々は、文學と教育とは兩立せぬものと疑つて居る、否、口に唱へて居る、これは實に間違つた考と云はねばならぬ、例へば、木枯が吹いて木の葉が地に敷いて居るのは、落るのでは無くツマリ新芽の萠出づる前兆



である、即ち落葉中に既に新綠を萠して居る、一見して落葉は枯死すると考へるのは誤りと云はねばならぬ、實際社會は堕落、不品行等で充たされて居るものと見るのは極端である、その雜然たる社會の裡に一縷の眞理は光りを放ちつゝある、吾人は其の光りを認めて地平線に近きつゝあるのが、之が人間の常道といふものである、道德である、是に由つて觀る時は複雜なる中に人間の道があると云ふものがある、その中から得た信仰が朧げながらも描かれねばならぬ。

　要するに、文學と道德とは共に健全なる發達をなさねばならぬので、聞けば小松原文相は先頃文士および當局の責任ある代表者を招致せられて一夕の歡談を悉くされたが、之は單に一時の

會合では無くして、將來文藝の健全なる發達を期するの基礎となるものである、予は平素から我國に國民文學の發達して居らぬ事を歎息して居る、乃ち今日の文學の多くは西洋文學で無ければ飜譯的のものか、又は我國に於る古代の文學である、言ふ迄も無く今日は今日の物が無くてはならぬのであるにも拘らず、毫も現時の國民文學といふものが發達して居ない、是に依つて這般文相が文士招待會を催されたのは即ち新國民の新思想の芽を萠したものであると思ふから、之を一時の人氣問題としないで、充分思想界の原因問題として將來の發達を望むのである。

次に小松原文相は先頃一の訓令を發せられ、各種の學校に於て講演會又は其の他の場合に於て假裝等をなし、或は脂粉を施して演劇類似の事を演ずる等を注意するやうにとの旨趣であつたが、此の訓令は至極時宜に適した事と信ずる、一体この訓令の出る前に、斯う云ふ事は豫め學校の方で注意すべきが當然であると考へる、若し此の訓令の出づるを待つて初めて教育者が氣附くといふやうであつては實に女子教育者の恥辱と思ふ、否是までに、其處へ氣が附かなかつたと云ふ事も亦恥辱と考へる、それ故に予は此の訓令を歡迎すると同時に之が成効を祈るのである、喩へば、肉体の保全に水分が必要であると等しく、文藝と教育とは單に學生々活の間のみ必要でその他は不必要であると考へるのは間違と云はねばならぬ、何うしても健全なる文藝の發達を期するには、一面に於て健全なる道德の根蒂が涵養せられねばならぬのである。（文責在記者）

時々刻々に起る損な事

稻毛盛雄

世の中は妙なもので、見す〳〵損な事と知りつゝも、騎虎の勢止むべからずである抔と空威張痩我慢をして、トゞのつまり止せば善かつたものと臍を噛む頃は最早手後れで、失策を後から見れば、杖を突

いたり轉んだりと云ふ醜悔で、實に何とも形容の仕様が出來ない程可笑な有様であるが、何に致せ其に熱中して居る時は、迚も千鈞の力も之を引返す事の出來るものでは無い、尤も之は格別の場合であるが、その代り覺醒の時代も早いのである、けれども之に反して尋常一様の事になると、われ人ともに知らず知らずして過す所から損のやうにゝ感じないのであるが、少しく細心なる注意を拂うものであつたならば直ちに氣附く事と思ふ。

わが國に於ては男女に拘はらず、平生非常なる損失を自ら招いで居るのであるが、或一部の人を除く外は餘り多く氣附かれて居らぬやうに見受ける、殊に此の點に於ては男子よりも女子の方に多いかの如く感ずる、即ち時間と金錢と勞力この三者に於ける不經濟の事で、尤も之には多少我國の習慣も與つて力ある事ではあるが、詮じ來れば之を浪費する方が善くないのではあるまいか、其處へ行くと歐米は萬事が規則誌で、一方から云へば大層窮屈のやうな感じがするものゝ、君子と倶に居るは芝蘭の室に在るが如く、久うして其の芳を知らずと古人が言はれた通り、慣れて了へば何の感じもするものでは無い、却つて事の進行上便利にこそ思へ、少しも窮屈の不便のといふやうな念は起らないけれども、初めて左様いふ中へ入ると、是まで自惰落にして身には窮屈の上にも窮屈にも感じ不便の上にも不便の念が絶えないであらう、併し少しく常識ある者なれば、他の言を竢つ迄も無く直ちに之が得失を辨別し、而して其の得なる點に就く事は無論である。

乃で如何に我國では如上の三者に就て、知りつゝ不經濟を來しつゝあるかと云ふ事は、歐米の例を擧げ來つたならば、自ら我國に於ける夫等の不經濟の點が反映して來るであらうと思ふから、以下少しく夫等の事を述べて參考に供しやう。

日本でも三度の食事、即ち朝晝晩といふやうに極つては居るが、その時刻といふ事になると誠に一定

して居ない、けれども彼方では毎時も一定して居るから、主人であらうが主婦であらうが、その定めの時刻に食卓に就かなければ、殘りの冷たい食物や臺所で食べなければならぬ事となつて居る、而して我國のやうに食事時刻に訪問するといふ事は決して無い、併しながら何か緊急を要する話があつて訪ねて來た者があるとしても、食事の濟むまでは待たして置く、そして悠々食事を了つてから面會する、それでも決して無禮とはしない、また來訪者も左樣は思はない、それ所では無い、若しも食事の時刻前に要談の了らない時は、更に食事後を約して辭し去ると云ふ事になつて居る、それに晝食なり晩餐なり、此方で其に招いだので無い限りは、ホンの出來合ですが抔と云つて店屋物を取寄せる煩雜も無い、第一彼方では食事中に、縱ひ來客の有る無いに關はらず、半途で食卓を離るゝは失禮といふ事になつて居るから、食事中人を待たせても謝罪するには及ばない、のみならず急いで食事をするのは衛生上にも甚だ宜

しく無い、何故なれば、折角温かに調理したものを冷して食べねばならぬ其上に、家族の快樂と平和とを破る事となるから、來訪者の方が却つて無禮に當るのである、それ故に成るべく訪ねて往かない、その代り通常の訪問は午後と定つて居るから然まで不便のあらう筈が無い、で萬々一親密な友人が來たとしても、その時は卓上に有合せの物にパン位を添へるに止つて居るので、我國の樣に不意に臺所を騷がし、延いてノベツ幕無しに下婢に眼を廻はさせると云ふやうな事は無い、之を見ても我國の食事に關する不規律が思遣らるゝではあるまいか。

何故に歐米では斯く食事の時刻まで恪守するかと云ふに、之には二つの理由がある、即ち一は便宜に基いたものであるが、他の一は衛生上から定めたもので、その便宜上といふのは、日本のやうに食事は單に胃の腑を充すだけの目的で無くして、日常快樂の一に數へて居るのであるから、彼方の上流社會になると全で我々が式場か宴席へでも出る時のやうに

毎晩禮服を着用して食卓に就き、そして禮儀正しく且つ愉快に食事をして一日の疲勞を慰むる事になつて居る、彼我ともに下層社會は致し方が無いが、中流以上は必ず食事の時には衣服を着換る事となつて居る、尤も是も中流からであるが、八九歳までの小兒には保姆が附いて居て、そして其の小兒に適した調理を別の食卓で與へるのであるが、それ以上の小供になると、矢張父母と同じ食卓に着いて同じ調理を味はう事が出來るのであるが、併し此所にまた斯う云ふ家庭内の憲法が存して居る、それは父母と共に食卓に着く程の子供が、倘しも父母の命令に背くとか、又は何か食堂の規定に反する事があると、直ちに父母と同席を禁せられる、之が子供に取りては非常に恐るべき刑罰であるから、自然子供も大人しく食事をするのみならず、父母と食卓を共にすると云ふ事を無上の光榮として居るのであるが、我國では如何かと云ふに、まだ頑是なき小兒は兎も角として、最早それ以上の子供になると、寧ろ父母と共に食膳を共にするといふよりは、別席で我儘を云ひながら食べる事を好むと云ふ風習が多い、人は仕附とは云ひながら斯くも東西で異なるものであらうか。その異なるのは餘儀ないとしても、子供が父と別室で食べる事を喜ぶと同時に、下婢の給仕では承知せずして母親にせがむ、之が爲に時間を浪費する事などは非常なものではあるまいか。

それから日常の副食物等に附いての事であるが、先づ我國では、明朝の汁の實其の他は今宵の中に大抵調へて置くが、最早明日の晝からの事になると少しも用意が整つて居らない、極早いところで其の日の午前十時頃になつて漸く之が仕入れに掛ると云ふ始末、左も無ければ出入りの八百屋か魚屋が來るまでは放任つて置き、そして食事の時刻間際になつて仕度に掛ると云ふ工合であるが、彼方では決して左樣で無い、必ず前日の中に翌日の三食に要するものは出入りの商人に命じて取寄せて置くか、或は主婦自ら市場へ行つて買ひ求めて置く、であるから急に

不漁だからと云つて魔誤突やうな事は無い、のみならず家に由りては、尤も品にも依るが大抵豫め次の一週間分を整ひて置く、尚ほ大家になると、一年中の献立から取極めて置くと云ふ風であるから、下婢にしても働き易く、且つ混雑を來すと云ふ心配が無い、平生さへも斯うであるから、客でも招がうとする時は、主婦が大抵出掛けて品物を見繕つて來るか又は下婢等に命ずるにしても順序正しく吩咐て遣るから、決して無汰な物まで買入れるといふやうな憂が無い、そして彼方では今日云つて今日客をすると云ふやうな事は無く、大抵は一週間位前から案内をして先方の都合も聞合せてあるから、今度お出になる御客様は大約何人であると云ふまで分つて居る、そこで夫等の事から献立等に至るまで萬事奉公人に打合せがしてあるので、來客當日だからと云つて左程混雜を來すやうな事も無ければ、また御馳走の落があるの不足を生ずるの、或は甲と乙とは口取の品が違つた杯と云ふ失策は少しも無い、で充分に來客

にも満足を與へる事が出來る。

一體我國では下婢を遣うに於て最も無規律のやうに想ふ、成程貴重の給金を拂つて置くのだから、晝夜間斷なく自分の所要に從つて追使つても宜いやうなものではあるが、人權の貴ばるゝ今日の場合、少しは彼等の身にも爲つて遣らねばなるまい、彼方では却々禮義を重んずる所から、仕事着のまゝで下婢を表へ出すといふ事は決して仕ない、斯う云ふ場合には主人か主婦が自ら出掛けると云ふ風で、如何に急用とても、規則外の臨時用の爲に下婢の用を妨げると云ふ事は許さない、同じ下婢を使へばとて、日本では主婦たる者が骨惜みをする爲に使うのであるが、彼方は其と反對で、主婦が手傳をして貰う爲に雇入れるのであるから自ら主旨を異にして居る、で先づ彼方に於ける下婢の業務の一班を云つて見れば日々の食事拵へは勿論であるが、その中でも日曜日の晝食は一番の御馳走としてあつて、その晝食が了れば器物を片附けさへすれば晩方まで何も用事が無

いから、下婢は暇を貰つて外出する、そして晩食は　　となつて居る。



極めて輕便にしてあるので別に面倒は無い、月曜日は前週に汚した手拭や布巾等を朝食後に洗濯する事

序だからチヨット述べて置くが、同じ洗濯法でも日本流と西洋流では大層な相違があるので、之は確

かに西洋洗濯の方が何角に就て善いと考へる、と云ふは何故かと云ふに、日本で勝手などに用うる布巾は、初め二三日位は白くとも、直に眞黒になつて、洗濯しても西洋洗濯の樣な譯に行かぬ、どうも不潔である、然るに西洋洗濯に掛けた物は、假設布巾に穴が明いても、眞白であるから氣持が良い、尤も日本流よりも少し手が要る、乃ち初め温湯に浸し、次で石鹼を塗けて洗濯板の上にて幾回か揉み、そして後熱湯で一度煮沸してから乾かすのであるから、從つて衛生上にも良いのである。

それから火曜日には前の日に洗つたものに火熨斗を掛けて疊みつけ、水曜日には客間と居間、木曜日には寢室などの掃除をなし、金曜日には窓の硝子拭土曜日には食器を磨き、襯衣寢臺、敷布および食卓掛などを取換へると云ふやうに大抵仕事が日割になつて極つて居る、何でも我國のやうに朝起れば炊事を初め、客間から居間および臺所の拭掃除は勿論、踏脱は云ふに及ばず、庭から門前の掃除、それから

種々汚れ物の洗濯といふやうでは、如何に強壮無頼の下婢でも勤め切れるものでは無い。

斯くすれば一人で何も彼も用が足りて重寶なやうであるが、結局は損である、何故なれば、下婢だからとて前述のやうに一日追使はれては却々堪たもので無い、隨分草臥もし又疲れもするから、何うしても翌朝早く眼が覺めなくなる、すると御飯の出來が後れる、主人の出勤が遲刻する、又大勢奉公人でも使ふ家なれば、一分づゝ後れても十人なれば十分、百人なれば一時間餘の損となる、で、夫等を善く繰廻して損の無いやうにして行かうとするには、家族の者が氣を揃へて規則を守るやうにしなければならぬ事は固よりであるが、其大綱を握つて緩めないやうにするのは家婦たる者の責任で、それさへ實行が出來れば其より得る所の利益は莫大のものである事は豫測が出來る、併し其が爲に餘り奉公人などを嚴しく使廻しては却つて損となる、その緩急宜しきを得ると云ふ事は實地に當らねば解る者では無い。

女子の書翰文心得

白雲道人

用ゆ可からざる文體

消息文と云ふものは簡にして明、意味さへ通ずればよいと云ふものゝ、殊に女子としては多少の修飾が必要であらう「一筆啓上火の用心おせん泣かすな馬肥せ」の文意なぞも成程無學な馬子の遣り方としては此上ない出來であるが、これでは今日の交際場裡に持出す譯には行き兼ねる、又女子が謹啓拜啓とか、啓具拜白なぞ云ふ文字を用ゆるのは女らしくない拙劣な仕方である、さればとて、餘り當生流行の言文一致体をとつて、歯の浮くやうな文字を弄するのも當を得たとは云へない、それに無闇と漢學仕込の拮倔聱牙な文語を用ゐて得意になる人があるが、あれも見よくない。

極端でない擬古文を學べ

そんなら女子はどんな文体によつて書翰を認めたらよいかと云ふに擬古文も極端でないのを程度として書いて欲しいと私は思ふ、女子はあくまで優美温雅と云ふことを念頭に置いて、其心懸けから常に筆を起してゐたらよいと考へます、文体は德川近世の名媛逹に頗る範とするのがありますゆゑ、ついて參考とするもよいと思ふ、唯心得て置くことは兎角、世の人は面白く書かう、上手に書かうといたづらに言葉を飾つたり、文章に綾をつけるから、ツマリ眞情が露はれず、意味が朧ろ氣になつて、了うのである。

意味の通ずる女らしい手紙

それでなくとも、文才のある者の筆は如何にも走り過ぎて、何を書いてゐるのやら譯が分らず、讀み終つて更に何の感興もないのがよくあります、如何に文章が上手であつても肝腎の用向が先方へ解らなければ仕方がない、書簡文の書き方は其人の德を落さず、何處迄も女なら女らしく、男なら男らしく、讀んで何となく書いた人が床しく思はるゝのが上乘

である、忘れても不得要領な手紙は書かないやうに心懸けて欲しいのです。

今日の文体までの歴史

元來我邦では漢學が入り込んで來てから、一般に彼國の尺牘を模倣した、其結果、句法とか、書式とか云ふむづかしい規則が出來て、室町時代から追々其弊が甚だしくなつた、殊に德川時代に至つては殆んど男子の書簡文なぞは一種の型が出來て了ひ、今日の所謂拜啓云々の形式的の文字を用ゆることの源を作つたものです併し幸い女子は假名文字を用ゆることを許されてあつたので、幾分男子より窮屈でなかつたらしい、去りながらこれは多く私用にのみ止まつて、公式的に發表する塲合は矢張男子と同樣、一種の型に這入らねばならなかつたのです、爲に達意の文章は頓に見ることが出來なかつたのでした。

書簡文の要義

餘程古くして阿佛尼が『雲井はるかに隔つかたよりとして、紀の内侍に送つた手紙なぞは、實に文情双絶、僅かに學ぶ可きものである、其他近世に到りては維新の功勞者野村望東尼の書簡も學ぶ可き其一であらうと思ふ、初心者のついて學ぶ可きところは文章優美にして情を盡してゐることで、彼の上古の雅言を連ねての獨りよがりや、言文一致体乃至、漢語づくめの女らしくない書方を飽くまで避けるやうに試みて欲しいのです。

婢僕と經濟

在法科　田村生

九尺二間の裏長屋に住むものと二町四面もある邸を構へて居るものとは固より比較にならぬ話で、其樣な事は言ふだけ愚であるが、それ程の懸隔で無く所謂る社會の中堅たる中層の家庭を通覽するに、左まで家族の數や邸宅の廣さに於ても甲乙の無いにも拘はらず、甲の家では婢僕を十人召使つて居るかと思へば、乙の家では僅か三人乃至五人の召使で事を

足して居る、然らば嘸かし甲の家では何から何まで萬事行渡つて居て、不時に三人や五人の來客があつても慌てるやうな事はあるまい、それに引換へ乙の家では如何ばかり混雜を來す事であらうとは、誰しもチヨツト想像する所であるが、我々が今日までの實驗に依ると、事實は頗ぶる反對の現象を示して居るので、眞に不可思議と云はねばならぬ。

今我々が皮想の考から云つて見れば、婢僕の數が甲の家では十人、乙の家では其の半數の五人と假定すれば、手の數に於て既に乙の家は甲の家より十本劣つて居るのであるから、その一本の手が僅か十分間づゝ働くとすれば十本で百分即ち約一時間と四十分だけの仕事が出來るので、それが十人と積れば二十本の手となるのであるから、前の倍數即ち三時と二十分間だけの仕事を進行せしむる事が出來る、この割合で十人の婢僕が氣を揃へて一日に十時間づゝ忠實に働くとすれば、何うしても一方乙の家の婢僕は五人であるから二十時間づゝ働き續けなければ追附かない事となる、一晝夜二十四時間のものを二十時間を働きに費さねばならぬとすれば、殘り僅か四時間だが、それでは幾ら高い給金を頂戴したからとて、婢僕の身躰は金や石で作られたるもので無く、矢張我々と同じく生理作用に依つて組織せられて居るものであれば、自然能力にも限がある、その限りある能力を以て限り無き仕事に應ずると云ふ事は、迚も言ふべくして行ふべからざる事に屬するのである。

それにも拘はらず、甲の家に於ける十人の婢僕が殆んど終日終夜齷齪して居てさへ片附かない程の用事を、乙の家では僅か五人の婢僕で、時間の上に於ても八時間か乃至十時間で事を便ずるのみならず、時としては倘ほ其よりも僅少の時間内に萬事を處理して、而して充分に餘裕があると云ふやうに出來るのであらう、これは如何にも不審に堪へぬ次第ではないか、成程不審に堪へぬと云へば不審に堪へぬやうなもの、よく／＼其の元を詮索すれば何も不思

議な事は無い。

一体わが國に於ける家庭の生活は、富の程度から云ふと歐米よりも低いにも拘はらず、日常が贅澤過ぎると云ふのが抑もの弊で、例へば、僅か一ヶ月の收入が百圓内外なるにも關はらず、家賃は二十五圓婢僕が二人といふやうに外見を飾るから、從つて日々の生活費も其に準じて嵩んで來る、それ故に僅かの臨時費でも要る事があると、月末に至つて帳尻が合はなくなつて來ると云ふ始末に立至るのである、何も一ヶ月僅か百圓内外の收入の家で、婢僕を二人まで雇入れる必要は無い、尤も病氣その他止むを得ざる事情のあるものは別として、まづ普通その位の收入の家では要らぬのである、止む無くんば下婢の一人も雇へば可いのに、その要らざる下男まで雇入れると云ふやうな無汰事をする、世の諺に

人增せば水增す

といふ事がある如く、たとへ一人でも人數が增せば其だけ費用の多く掛るといふ事は、直ぐ胸算用でも

解かるのに、それを知りつゝ人を增すとは如何なる譯であらうか、云ふまでも無く生活の外見を飾るのである。

何も爪で火を燈して金を溜るのみが人生で無いから、多少それ〴〵身分に應じて外見も飾らなければならぬ事は勿論であるが、不時の用意どころか、每月々末の括りさへも出來ないのを承知しながら、また其の上にも生活の外見を飾らんが爲に、要らざる婢僕までを雇入れて置くといふ事は如何にも矛盾した咄と考へる、我々は斯う想ふものゝ、その傭うて置かるゝ本人の身になると、單に生活の外見を飾ると云ふばかりで無く、自分の身に樂が出來ると云ふ猾い考へよりして置くやうに想はれる、この後者の考へは男子よりも寧ろ女子の方に多い、約言すれば要らざる婢僕を傭うて置くといふ事は、女子に特有なる虛榮心と、尙ほ一つは

怠惰心の權化

と云ふも差支ない、尙は言を換へて云へば、一体我

國では婢僕を多く召使ふのを以て誇りとする風習であるが、歐米では左樣でない、何も歐米人は吝で婢僕を澤山に使はないやうに爲るのでは無い、實際大抵な家でも左まで幾人も要せぬので、その譯は歐米の家庭に於ける主婦たる者は、我國に於ける奧さんや御新造さんのやうに、自分は始終長火鉢の傍に坐つて、チヨツト手を伸せば取れる物まで、ワザ〳〵勝手に働いて居る下婢を呼んで命ずると云ふやうな事もしなければ、また八百屋が來たと云つても、魚屋でも同じこと、下婢が何々がございますと云つて來ると、其所で品物附の札を見て、尚ほ此の外何々は無いか、また大きさは何の位などゝ、丸で畫に描いた地震で動かうとはしない、それに比べると歐米の婦人は、自分の責任たる日々の總菜の事などは決して下婢の手などを待つて居ない、主婦自ら市場までも出て行つて買ひ整へるといふ風で、何事も直で少しも品なぞを繕つて居ない。

最も長い間の習慣といふものは急に之を打破しやうとしても出來るものでは無いが、前來述べたやうに、何も生活に餘裕があるやうに要らざる婢僕まで備入れて、而して世間に外見を飾つて苦しい思をする程の事はあるまい、如何に男子が社會に活動して月收の多からん事を期しても、內政を處理する主婦たる者が良人の心を心として經濟の機關を圓滑に運轉すると同時に、厘毫の冗費とても省ぐべきは節約するやうにせねば不可ぬ。

養蠶の話

坂戸紅楓

蠶飼の道知るは女の務也。本誌愛讀の諸孃中にも家庭に居給ひて、蠶飼のわざに從ふ方多きを聞き拙き筆持て、育蠶のことどもを記述することとはなしぬ。

一　富國の基

お蠶飼ふと云へば「蠶飼などは貧しき人のなすこと

よ」と蔑視給ふ孃さまの身に其お嫌ひなるお蠶より作りし、美しきお召着流して、お氣取歩いと可笑し。假令蠶は飼はずとも如何にして養ふものか位のことを知り置くは、我日本に生れし女子の務ぞかし。吾れ過にし年、巡回教師となり北越の地に遊びし時、唯ある代議士の孃さまの『家などでは其麽卑しい仕事なさずとも其日の食には困らじ、』とからかひ給ふに、其心得違なるを説きしことありき。

『我國は神代より、蠶飼のわざありて、畏くも、天照太神を始め奉り雄略帝の皇后など自ら桑植え給ひ蠶飼のわざなし給へるは歴史を繙く人の知る所也。明治に至りても九重の雲深き處にお在し、金枝玉葉の御身を以て御手づから此業を營み給ひ、下國民には『蠶飼の業は我國の富の基である、汝等是れを盛にせよ』と奬勵の御言葉を下し賜ひしは、貴孃の已に知る所ならん、生花もよし、茶の湯もよし、琴曲更によし、されど富國の基の蠶飼を卑み他の遊藝にのみ耽らるゝは、間違ならずやと云ひ參らせば、令

孃は、其美しき頰を薔薇色に染め給ひ「妾惡かつたわと」云ひ給ひぬ。肝付海軍中將が嘗て、

「心細さよ只一筋の糸が日本の命綱」

と云ひ給ひしことありき。是れ我國家の命脉は養蠶業より外にあらずと云ふ意なるぞかし。誠に理ある言の葉にして輸出統計表を開き見ても、其大半は生糸にして、現今尙存する國債の償還も又この養蠶によらざるべからざることを知らるべし。身に飾り給へる婀娜のお召、見給ふごとにゆめ富國の基を忘れ給ふな。

二 愛らしき蠶

地には敷きたり紅錦の繡、天には織れり碧羅の綾と歌はれし百花爛漫の期過ぎて、靑葉若葉の翠色滴らんとする頃、蠶は卵殼の中より出でて人間界に愛を求むるなり。

あの小さき蚰の細かき桑に取り付く天眞爛漫の樣見て孃等は尙蠶は卑しきものなりと云ふか、日毎に大きうなりて末は目も綾なる絹となる蟲と思はゞ桑

食ふ姿も愛らしく頭擡げて食求むるさまも可愛ゆく思ひ給ふならん、思はざるの人は情なき人なり、情ある人にして是れを愛せざる人はよもあるまじ。
花の顔せ月の眉、と歌はるゝ孃さまも、小さき蟲の蠶等も昔は同じ祖先にて一種の單細胞動物なりし。此單細胞動物が進化して一は人類となり、一は蠶となりしものなり、かく云はゞ美しき孃等の祖先も、蠶の祖先も同じものなりしこと分り給ふべし。
さすれば蠶と貴孃等は兄弟の關係を有す。
「まあ嫌だ、妾蟲ぢやあなくつてよ」と驚き給はゞ、ダヴヰン進化論、丘博士の進化論を繙き見られよ。太古の關係は歴然として孃等の前に現出すべし。兄弟の關係、（昔）迄ある蠶ならば倘愛らしきに非ずや。愛せよ、愛せよ、能ふ限り愛せよ。
かくて皇國は富み、諸孃の身は錦襴にて飾らるゝことを得るなり。

三　養蠶學

蠶は皇國の殷富の基なるを知らば、愛すべきの念起るならん、愛すべきの念起らば、飼育なして見ばや、の心も浮ばん。
されば余は是より、飼育法の概畧を説んと思ふなり。
養蠶の學も一々分類すれば、飼育學、蠶種學、蠶體生理學、蠶體解剖學、蠶體病理學など頗る多し。されど、余の諸孃に語らんとするは以上の如く分類して六ケ敷論ずるものにあらず、オホヽ、アハヽ、と笑讀する中に飼育の方法を知得らるゝ樣書んと思ふなり。遠山煙霞を鎖し、津頭の楊柳稍色を催ふせし今日此頃、一讀の勞を賜へよ。（以下次號）

氣むづかしき姑に侍へたる苦心

長岡雪子

當今の嫁は氣樂

家庭の人となつてからの苦勞は先づ姑に侍へることです、何事も姑に侍ふる心持で一家を經營してゐたら決して風波も起らず、何時も春風駘蕩の中

に暮すことが出來ると思ひます、唯今の姑になる方々には何れも近世の敎育を受けたものが多いことゆゑ、隨つて嫁の心持も察し、昔のやうな邪慳なことをすることが少くなりましたが、當節でも嚴格なお邸風の家庭には兎角嫁と姑の折合が附かず、年が年中波瀾を惹起してゐるのがあります。

良人が可愛いか、姑が可愛いか

私の嫁に參つた家は百石餘りの旗本で、其頃駿州に居りましたが、舅の極めて優しいに引違へ、姑の八釜しさと申したら却々今の若い人達には解らないだらうと思ふ位です、主人は何も搆はぬ方でしたが、母の云ふことは鵜の毛程も背きませんでした、そんな家庭でしたから、私は舅や良人をせめての心頼みに幾度か苦しい瀬戸際を越したのです、或時なんか私がツイ姑の外出に氣が附かず、良人の部屋にいたのでしたが、歸宅の後特に私を茶の間へ呼びつけて、「お前に聞くが良人が可愛いか、私が可愛いのか」と這麼皮肉なことを尋ねて、私が「御隱居さんだつて、良人だつて、同じです」とツイ口を辷らしたのを聞き咎めて、夫から凡そ二時間程、嫁の心得を話すのです。

良人に話されぬ悲み

私も今更嫁に參る時の兩親の誡めもあり、舅姑に對する道の一通は聞いて行たのですし、口小言は微塵も申ませず、何事も良人や姑の云ふ通にして氣が附く丈氣を附けてゐましたが、兎角何事にせよ、口八釜しいのは姑の癖で私は今こそ人の母として恁うも申される身分ですが、實際其當時は人知れず泣ました、元來女と云ふものは氣も狹く、なるべく氣に懸ない樣にして居ましても、餘の事に良人には打明られず、不覺に淚を緜して良人から咎められました。

些細な事に姑の小言

一朝忘れて火鉢の灰を鏟はなかつたと云つて火箸で小突廻されたり、大根の繊に刻み方がぞんざいだと云つて庖刀で肩を打たれたり、洗濯に浴衣の洗い方が惡いと云つて自分がやつて見せ、洗濯を姑にさ

せる嫁(よめ)が何處(どこ)の國(くに)にあるかと云(い)はれ、其他(そのた)箸(はし)の上(あ)げ下(お)ろしに一々小言(こごと)が出(で)て、朝(あさ)から寝(ね)る迄(まで)と云(い)ふも



無むつかしき姑に仕へたる者む

少しの暇さへなかつたのです、今の若い奥さん達はヤレ交際だと云つては芝居見物や慈善音樂會に出入して、家事なんぞ捨てゝ置いても構はないなんて、眞實に氣樂な方が多いのです、矢張今の奥さんの方が氣位が高くなつて、姑や舅に對しては良人と一所になつて、邪魔もの扱ひにしたがるのでせう、けしからぬ事です。

舅姑の揃つた家庭の人となれ

今の若い方々は什うも家族殊に舅姑を嫌つてなるべく、夫婦差向ひの家庭へ嫁にやりたい、參りたいと云ふのが多いやうですが、私は一家殘らず揃つた家庭の人とした方が本人の爲ばかりでなく、何かにつけて幸福だらうと思ふのであります、一時はつらいやうですが、そのつらい間に家庭の趣味も出來て、良人に對する心組や、他日自分が母となつての思ひ遣りともなるものです、私は染々と今の若い方々には舅姑の揃つた家庭で、苦勞なさる樣にお勸め申すのです。

美容の根本

中田達也

世の中の事は凡て極端から極端に走つて仕舞つては興も何も無い咄であるのみならず、甚だ殺風景の至りと云はねばならぬ、例へば、アフリカのゴビの大沙漠のやうに、見る限り廣漠として樹木が一本あるでは無く、山といふまでゝ無くとも、多少起伏した丘陵でも有るかと云ふに、これ亦一つの目を遮るものが無いとしたならば、その沒趣味の程は思遣られる事ではあるまいか尚ほ手近な例が、我々が日々通行する市街で、その兩側が一樣に金物屋であるとか、又は小間物屋ばかりであるとしたら如何であらう、我々は實に飽き〳〵して仕舞ふのである、けれども賴ひに兩側の店舗は小間物屋あり、呉服屋あり紙屋あり、時計屋ありと云ふ工合に、一々變つた店舗が立並んで居る、換言すれば、種々異つた店舗が軒を接し、而して市街を裝飾して居るから、我々が

市中を歩いても飽が來ないのである。それ所では無い、近頃は繁華の都會ほど市街に樹木を植えて風致を添へる事に力めつゝある、この風致といふ事は或意味に於て裝飾といふ事と毫も變らない、尤も此の市街に樹木を植えるといふ事は、單に風致を添へるといふ簡單の意味では無く、他の半面に於ては都人士の健康を補ふといふ深い意味も含蓄せられて居るのである。

女子の化粧といふものは、古來女子の身嗜みとまで言はれてあつたもので、これは貴賤に拘はらず夫相當分に應じて女子たる者が日々行はねばならぬ事であるから、今も尚ほ之を嚴守して居らるゝ婦人も尠なくないが、前年ある一部偏見の敎育者間に、女學生には脂粉を施すことを禁じた方が善い抔と云ふ迷論を吐かれてから、何うやら若い女子殊に女學校等へ通學せらるゝ年配の女子には、輙もすれば其御迷論にかぶれて化粧を疎かにする人達も間々あるやうに見受ける、のみならず或種の學校では之を嚴禁せらるゝ上に、簪の類に至るまで制限を設けられ、否、全廢を强いつゝある、成程これも意味の取りやうで、然も無くとも女子といふものは華美を競ひ、虛榮を張りたがる者であるから、豫め夫等を防ぐと同時に質素といふ事の觀念を深く鏤めやうとするに基くのであるとすれば、これ以て甚だ喜ぶべき思召であるが、その反動より起る惡影響に就て考を廻らさ無いといふ譏は免れまいと思ふ、で、既に其の說にかぶれて而して少しひねくれた女子達は、

人は容姿より唯心

といふ古來よりの諺を楯に取つて、何の毎日お化粧をする位の時間があつたならば、その間に勉強した方が益である抔と云つて、頭髮は宛がら鵲の巣のやう、殊に昨今流行の廂髮を無精にして置く者は、恰も田舍の畠中に在る人の住はぬ茅屋宜しくと云ふ風に頭の周圍が散毛だらけと云ふ醜態で、左樣いふ女子に限つて顏面も滅多に剃ると云ふ事は無いから、生際から眉の邊などは全で產毛で埋つて居る、假り

に本人は其で善いとしても、左様いふ風で他人に接すると云ふ事は禮で無い、自ら世の中には男女に關はらず、人に接するには接するの禮といふものがある、若し其の禮を蔑にするとすれば、禽獸と奚ぞ撰ばんやと云ふ事になるのである。

西洋の詩人の誰やらが言つた如く、美婦人は天が此の世に下したる一大美術品であるとさへ讃へられてあるを見れば、女子たる者がお化粧をしないと云ふことは、之を適切に云へば

先天的の約束に背く

こと丶なるのである、今更繰返す迄もなく、第一容貌が端麗であつて、而して整然と装飾つて居る婦人と、之に反してだらしなく取亂して居る婦人とは、我々が之に對する尊敬の程度からして違ふもので、例へば、芝居を一幕觀ても知れる、如何なる故團菊のやうな名優でも、襤褸を纏ふて舞臺に現はれた時は自ら輕侮の念を發し、烏帽子直垂で出て來た時は自ら敬虔の情を以て迎へると同じである、去れば身裝を粗末にする婦人は無精者の證據で、萬事に不忠實であると見做されても致し方があるまい、併し斯く云ふたとて、予は强ち世の女子に華奢を奬むるのでは無い、それと同時に衛生を無視してまでお化粧せよと迫るものでも無い、尤も廣い世の中には、或は境遇や職業上の關係からしてお化粧をして居られないと云ふ例外もあるかしら無いが、それは取除けとして、予は普通一般の女子に對しては何處までも、華奢に流れず淫靡に陷らざる程度に於て、必ず容姿を装飾ると云ふ事を忘れてはならぬと云ふだけは切に勸告して置きたいのである。

そこで斯のお化粧と云つても、當節は在來の日本法ばかりで無く西洋のお化粧法も傳はつて居るのでその孰れが得、孰れが失といふやうな事の詳細は後日に讓るとして、茲には之が大体に就て説明を試みやうと思ふのである。

元より白粉を塗けたり臙脂を注したり、又はクリームを擦り込んだりするのは、一層女子の美を發揮

せんが爲である事は言を挾たないので、謂ゆる錦上に華を敷くと云ふ旨義に基くものであらうが、併し抑も其は末の事で、それよりも尙だ美容といふ事に就ての根本がある事を忘られて居るやうに考へる、如何に似顔人形に巧みなる安本龜八が苦辛して作つた似顔でも本より之に襤褸を被せて置いては不可ないが、よしんば綺羅錦繡を纏はせたとて、その骨組がみすぼらじかつた日には觀物にならぬと一つで、女子とても同じ理合で、縹緻は十人並どころか百人前勝れて居つて、而して時の流行の好みの衣裳をゾロリと着飾つて居ても、何處となく纖弱過ぎて病身らしく、且つ貧相であると云ふやうでは、折角の容姿も裝飾も見榮がしない事になる、それ故に美容の根本と云つたら外でも無い、完全なる體格の發達といふ事を期せねばならぬ、之を爲すには體育が第一で、體育を怠らぬ者は自然と姿勢が整ふて來る、

古來東洋で美人を形容するには沈魚落雁閉月羞花などゝ稱へ、我國では、立てば芍藥坐れば牡丹、歩く姿は百合の花と相場が極つて居たが、餘り首筋ばかり細く長く、その上地藏眉で柳腰と來て居ては、何うも餘り感服しない、否、それでは充分女子の天分を全うする事も出來なければ、また女子の美を發揮する事は出來ない。

當今も尙ほ幾分その跡を留めて居る、それが一面に日本女子の淑德ではあるが、古來の婦人は凡て雨にも日にも當らず、深く帷幃を垂れこめて、少しも運動といふ事に重きを置かなかつた爲に、概して體質が虛弱であるのみならず、筋肉の發達が不十分であるから僅かな事にも堪へ得られぬといふ有樣である且つ其の爲に大低の婦人は脊髓骨が曲つて居るから從つて姿勢が正しく無い、何となく新らしい小田原提燈と云つたやうな姿態が起居ともにあつた、これでは假令顏面はかりは美人でも、全體を捉へ來つて美人と稱する事は出來ない、平たく云へば、美なる

容姿といふことは着物は勿論だが、それよりも先づ

五體の釣合が整つて居る

といふ事が一番大切なのである、去れば美術家などがモデルに欲しがるのは、顔面の美しいといふよりは、寧ろ五體の筋肉が不釣合なく充分に發達した者を採るのである。

西洋では姿勢の正しく良い人をグッド、プレジエンスと稱へて其の人の品性の美を示すものとしてある、この點は街上で歐米の婦人を見ても羨ましい程であるが、併し之に就ては我國に於ける婦人服や履物等に關係する所が深いのであるから、早計に一様に言ふ事は出來ないやうなものゝ、多少は各自の注意に由つて之を矯正する事が出來ぬ譯では無い、それを爲るには古く歐米に行はるゝ

室内の美容術

こそ最も女子に取りて適法であると考へる、而して其の方法も至極簡易で、數も澤山あるのでは無い、先づ第一は壁を背面として立ち、兩の踵と臀部および双肩と、尚ほ後頭部とを壁に密接し、そして兩腕は自然に體の兩側に垂れるのである、第二には徐ろに後方に體を屈曲して、遂には頭が壁に着くまで仰向くのであるが、凡て夫等を行ふ時は、共に深呼吸を十分間に二十回位づゝ繰返すので、まだ此外にも種々あるが、畢竟これは曲線的の運動で、筋肉の働らきを自在にし、且つ容姿をしなやかならしむる一種の體操で、我國の婦人の如き脊髓の曲つたのを正すには此上も無き最良の簡易運動法であるから、讀んだ其の日から實行せらるれば、日ならずして他人の視線を引くやうな美容となられるのである。

寺小屋時代の女學生

武甲流薙刀術師範　小松崎古登子

士氣の頽廢と學生

什うも當今の學校は學問のみを主とし、肝腎の精神教育を度外視するの傾向が見えますが、甚だ慨は

しいことです、由來武士道は我邦の精華であるにも拘らず、士氣の頽廢は實に其極に達してゐる今日に獨り學生丈が惡いとは云ひませんが、師弟の情義は全く忘れられて規律は立たず、短褐蓬頭を以て得意とせし者、髮に脂し袖を長うして男女學生とも、概して華美になつたのは世運の推移とは申しながら、私は常に遺憾に存じて居るのでございます。

師弟の間柄は嚴重

昔と申した處で、維新當時のお話ですが、中村敬宇先生の同仁社があつた頃の學生と云ふものは、實際今の若い人達に見せて上げたい位です、併し今思へば其頃はモウ學生の服裝や言語抔が追々と俗惡に流れる原因を萠してゐました、其以前と云ふものは學生は文武兩道の心得を保つてゐましたから隨つて精神修養に就ての苦心談を銘々持つて居りました、私共の寺小屋へ通ひました當時は、朝の七八時頃から辨當持で午後の二時頃まで『庭訓往來』『消息往來』を手本として習字をやつたり、『女今川』『女大學』を教はつてゐました、亦漢學は四書、五經の素讀をやらされましたが、師弟の間柄の嚴重なことはとても今の人達にはお解りにならないでせうと思ひます。

縮緬ものも勝手に着られぬ

夫れは兎も角、習字は女子の心得の重なる一ツで初心の者は先づ半紙二帖位を一冊としたお双紙に、一枚四字宛位を書き、次第に六字位に進み、一生懸命に習ふのですが、一年に二度おさらひがあつて、その時は手本を見ず文章を腹誦じて書いたものでした、それで髷は島田に結つたり、銀杏返し三ッ輪、鬘下地なぞに結ひ、擧措極めて淑かにやるのを以て女子の本分としてゐたものです、千石取には千石、百石取には百石だけの格式に應じて服裝まで異なつてゐました、お席以上、お目見得以上夫々の別があつて、互ひの禮讓に注意して居りましたから、隨つて師弟の名分は最も明らかでございました、たとへば縮緬ものを用ゆるにしても祿高や家の格式によつて差別をつけた位ですゆゑ、華美に流れるやうなこ

とはありませんでした、今では自儘勝手になりて、甚だ女子の虚榮心は遺憾なく發揮された譯ですから、甚だ殘念に思つてゐます。

着物にならぬものを着物

同じ裁縫を敎へるのでも、初めは雜巾さし、ほごきもの、繼ぎものから次第に覺へさせ、衣類の裁縫は反物を持つて來いなぞと云ふことはない、それゆゑ『着物にならぬものを着物にする』のが裁縫の極意のやうにしてありました、當節ではどこの學校も生徒に新らしい反物を裁たせ縫はせますので、勢ひ洗張りや洗濯ものを押入に突込むやうな結果になるのです、這麼ことは充分何とか改良するやうにしたらよいかもと思ひます。

寄宿舍にゐた學生は駄目

夫から序に申あげたいことは寄宿舍制度の不完全です、今日では東京市内にも種々の女塾が出來、中には家庭塾と稱す家族的のもありますが、概して不規律極まつたもので、監督は固より行屆かず、金錢の多少によつて手加減をする處があるやうに聞きますが、何とか制度を改めたいものです、それにこの寄宿舍にのみ生活つゞけた女子が、一朝家庭を組織するやうになつても、菜さへ碌々拵られず、甚だ困ることがある、これは寄宿舍の下女任せであつて手づから試みないのが原因なのでせう、さりとて銘々が鍋釜に手を下すと云ふのも監督上困難でございませうし、何とか他に良き方法があればと思ひます。

下宿住居は墮落の原因

亦東京生活の事情に明らかでない父兄達が、最愛の子女を獨り東京へ野放しにすると云ふことは危險極まつた話で、嚴重な監督者があるにさへ、得手勝手を出したがるに、唯一人を廣い都へ置くのは親から墮落を强ゆる結果になるのです、野離しになつた女子が、仕方がなく僅かの知己を知るべに身を寄せたり、下宿生活をやるやうになつては自然容易ならぬ活を生む源です、私の知つてゐた人の親族のものだそうですが、この下宿生活から墮落して遂に云ふ

に忍びない不始末を仕出かした實例もございます。

誘惑に捷つ精神敎育

女子の敎育は矢張學問ばかりに重きを置いてはいけません、前申したことも、多くは女子の薄弱な意志を利用されたので、男子の罪に歸するのは當を得ない話です、女子自身の精神さへ確固不拔であればたとへ周圍を男子に取捲かれて、種々の誘惑があつても、斷然刎ねつけて行ける筈ではありませんか、女子は稼人の留守を預る重大な責任を負擔しやうと云ふのですから、餘程の決心がなくては駄目です、寺小屋時代のお話から飛んだことを申上げてすみません。（文責在記者）

千代女と柳の句

玄々洞人

元祿俳人の一人で加賀の千代女の名吟であつたことは實に彼が句集を繙くもの丶驚く處であらう、一夜支考の門人廬元坊の宿を叩き、「時鳥」の詠題を與へられてあかつきに及び、一句を吐いて其門人となつた程の熱心だから、さもあらうとは云ふもの丶、其句數の豐かなことは、仝時代の巾幗俳人中唯一人である、同女が「柳」の句に就て、女性的感興を遺憾なく現はしてゐるものを擧ぐれば。

一かゝへあるも柳はやなぎかな

或人が肥え太つた女を見て、笑へるを取なして詠んだと云ふ句で、成程面白い、柳の樹は必ずひよろ〳〵したものばかりと限つてゐまい、たとへ夫が一抱へもあるのにしても柳の樹は柳である、其或人がこの句に對して顏色を失つたのが思はれて、頗る女子の爲に痛快な句だ、兎角深閨の中に人となつたものは、所謂纎弱で到底骨堅き大丈夫と共に大事を圖るに足らないものである。

やなぎから殘らず動く氷かな

氷の張りつめた池に柳の枝が凍り附いてゐる、試みに其柳の枝を引いて見たら一部の池の氷が動いた

猶引張つてゐると殘らず動き出したと云ふ其因の柳を假に尼將軍平政子などに見立てたらよほど面白いと思ふ、池を鎌倉の世と見て、先づ智者の政子柳の一枝を試みて其凍り附くのを待つてゐた、折こそよしと引張ると頼朝公が動いた、さて其からが仕事で二動き、三動き、遂に天下を動かすと云ふのである。

結ばうと解かうと風の柳かな

女子の教育に譬へて見たら妙だらう、女子の心の定まらない間は實に結ばうと解かうと自由である、隨ふて危險至極である、こんな恐ろしい誘惑の風が吹き廻つてゐる東京の野原へ、殊更何の覺悟もなく枝を垂れてゐる柳ほど一層あぶないものはない筈ではあるまいか。

手折らるゝ花から見てはやなぎかな

如何にも柳櫻をこきませた場所で、いざ何れを手折るかと云へば花の方がよいに違ひあるまい、その點から考へたら柳の方が德なやうに思はれるが、物も考へやう一ッである、お隣りの娘さんのお花さんは美しいと云ふので貰ひ手が出來た、それに自分の家の柳孃は春が來て、、、、みどりの葉を茂らしてゐても何處からも一向嫁に欲しいと云つて來ない、その內にお花さんには櫻ン坊と云ふ可愛ゆい子寶が出來たにも拘らず、自分の枝は徒らに榮へ伸びて、この夏も此まゝかと思へば情ないとしたらどんなものか。

寒中手足の衛生

醫學士　高橋　欽彌

寒中手足の衛生などゝ別に取立てゝ言はずとも、四季ともに之が衛生を怠つてならぬ事は今更予が説明を待つ迄でもあるまいが、何うも兎角我人共に少し暖かい時分は、手足に限らず凡て身體の衛生が粗略に流れ易い傾がある、この油斷からして寒さの時になると一層手足などが荒れたがる。

何ういふものか世の御婦人達は、假りに入浴に行くにしても謂ゆる朴の木炭、垢擦、洗粉、糸瓜と云

つたやうな七ッ道具を持つて行つて磨き立てられるにも拘はらず、輙もすれば手足の掃除がツイ疎かになるのか、又は肌理の粗いとでも云ふのか、顔は何處までも艶々として美くしいにも似ず、手や足の肌合が其に相當しない方を見受ける事が少なくない。

一體男子でも左樣だが、殊に女子たる者は、單に顔面の色合や頭髮の艶が幾ら良く、又五體の釣合が何れ程良く取れて居たにしても、始終人の目に觸れ易き手や足の膚が其に相應して居ないで、妙に硬ばッたり或は鮫肌のやうでは、折角の美人も見劣りがしてだいなしにして了うのである。

俗に云ふ荒性の人は、どんなに秋の末冬の初めからあれしらず又は花いかだ若くはクリームのやうなものを塗けても却々手足を奇麗にして置く事の出來ないものであるが、併しそれとても左樣諦らめたものでは無い、殊に寒い〳〵で不精から來るものも少なくないやうに思はれる、尤も中流以上に於ける大家の奥樣やお姫樣などであれば、今日此頃のやうな寒い時に限らず、年が年中お湯で手洗をお遣ひになる外、絶えて其他には水などに御縁が遠いので、從つて寒暖計が氷點下に降るやうな寒空だとて、未だ曾て手足の荒るなどゝ云ふ事は夢にも御存知が無いのであるが、それ以下の家庭に在りては其樣な上品な事は云つて居らない、炊事は勿論、雑巾がけから洗濯、または菜漬の出入等に至るまで一切を仕なければ爲らないのであるから、迚も堅い物は箸とか筆とか、又は煙管その他樂器ぐらゐより持つ事は無いと云ふお方々とは比べものにはならない。

乃で平生でも皮膚といふものは、皮脂線から絶えず適宜の脂肪が分泌せられて保護せらるべく出來て居るのである、けれども冬期になると寒氣の爲に皮膚が收縮するので十分その脂肪の分泌が出來難い、その少ない所へ持つて行つて水仕事等の爲に表面の脂肪を洗ひ去るので、どうしても皸や胼が生じたがる、とは云ふものゝ是も一つは無精に基づくと云ふ事を拒む事は出來ない、併し誰しも寒い時には思ひ

ながらも凡ての事が懶くなりがちで、チヨツト雑巾がけ一つしても、後で能く奇麗に手を洗つて、そして乾いた手拭ですつかり拭きたる後、遠火で漸次に焙るといふやうにさへすれば、決して皸も胼も切れるものでは無い、然るに大抵のものが、ツイ冷たいと云ふので碌そツぽう拭かないのみならず、それより前に能く皮膚の間に入つて居る不潔物を洗ひ落さないから、何うしても求めて皸や胼を生ずるやうなものである、之を要するに手足の美観を保たうとするには清潔が何よりも大切な衛生である。

　斯く云ふものゝ如何に本人が注意しても、何うしても其を防ぐ事の出來ない塲合がある、即ち俗に云ふ硬い水の爲で、こればかりは如何とも仕難いのでその時は止むを得ないからワゼリンを塗けるが宜い此のワゼリンは啻に手足の荒を防ぐのみならず、皸や胼をも癒すことを得るのである、之が爲に世間には極端の説を吐いて、米を磨ぐにも、初めなまぬるの湯で能く揉み、二度目よりは水中に手を入れず、杓子にて交せ返し、幾度も水を取換れば宜いなどと空想を鹿爪らしく唱て居る者もあるが、斯んな事をしては第一米が早くふやけて了うのみならず、碎て小米となる者が多く、夫に炊てから糠臭くて堪つたもので無い、ツマリ之は無精者の考と云ふ者である、何も左樣まで無精をしなくとも、手の美観を保つ事が出來ないと云ふのでは無いから、一家の衛生上から左樣云ふ懶さは止めて貰はねばならぬ、そして米は何處までも純然たる水で磨いで欲い、この差別は御飯を鼻の先へ持て來れば誰にでも直ぐ分かる、若しも是が良いとすれば、斯ういふ者は香の物まで湯で滌ぐかも知れない、假に其で善いとしても折角の味が變つて仕舞うので食べる氣にはなれない。

　右は少し話が横道へ外れたやうだが、此事は予が前年も亦今年も實際目撃した事で、丁度此頃の寒さに伴れて、廣い世の中には斯ういふ懶惰仲間が無いとも限らないから、聊か手足の衛生をお咄する序でに、斯くは警告して置くのである。

竹柏園歌談

佐々木信綱

和歌について、自分が平素懐いてをる考の大躰をお話致さうと存じます

まづ第一に、歌とはどういふものであるか、と言ふことについて申述べます。歌といふ語の語源については、或はうたふといふ動詞から來たといひ或は訴ふるから來たと言ひます。前説によれば、聲をあげて思を述べるといふことになり、後説によれば、思ひを人の感情に訴へるといふことになります。いづれにしても、うちに思ふところを言にいだして感じさせることを職分としてゐることは、この語源からだけでも明らかであります。が、更に進んで、歌の意義について明瞭に論じたものが、本居宣長の石上私淑言の説であります。宣長は歌とは何ぞやといふことを



鳥松の前圖

柴仁齋筆玉樹川

委しく說いてゐます。その大躰をいへば、歌とは、人が物のあはれを心に感ずる時それに堪へ兼ねておのづから洩らし出づるもので、廣くいへば、三十一言のたぐひをはじめて、俚歌童謠はいふに及ばず平語淨瑠璃にいたるまで、すべて詞の程よく整ひ、綾ありて、歌はるゝもの凡て歌であるとの說であるこは廣義にいふ歌の意義である。次に又、歌といふ語は、特にその狹義の意に於いて、和歌即ち長歌短歌旋頭歌をさしていふことゝなり、更に限られては其うちの三十一言の短歌をさすことになつてゐる。歌といふ語に、かゝる狹義の意味を得てきたのは、けだしいろ〳〵の歌の種類中短歌が有力になつて來たからで、これにはその理由がある。第一は歷史上變遷の結果である。紀記に載せられた歌について見る如く、はるか上世は、歌躰の混沌時代である。一句の字數も、一編の句數も、いろ〳〵であつた。然し其うちにも、五言七言の句、五言七言五句の短歌の躰は、他に比して多かつた。萬葉時代にいたりて

雜躰の歌は其あとをたち、短歌長歌旋頭歌の三躰のみとなつた、この時にも短歌は有力であつた。が、其後にいたり、旋頭歌まづ絕え、長歌既に衰へて短歌のみ優勢になつて來、終に歌としいへば短歌といふにいたつた。この歷史上の事實は、やがて短歌といふ體の、少くとも從來の國詩の形式として最もよきものであつた事を證明してゐるのである。これにはその理由がなくてはならぬ。この理由として吾人が考へたものが二つある。その一つは、國語の性質に原因する。わが國語には、少くとも他國の詩歌に見るほどの韻もなく、平仄もない。かつ國語の性質上、母韻が多い。從つてわが國の歌は、一音每に母韻の響を伴なつてゐる。やはらかい語を、韻とか平仄とかの制約なく音數だけで——しかも五七の句だけを以て——並べたのであるから、長くなるにつれて、その弊散文的となる傾向のあることは自然である。長歌の衰へたのは、一方には手腕のある歌人の出なかつた故であるが、又この國語の性質上、長き

ものは單調に陷る傾があるからである。之に反して、短歌は引きしまつてその弊がない。これ短歌の有力になつた故である。第二は、我國民性に原因してゐる。わが國民性の、器用であつて何事にも小じんまりとまとまつたものを好む傾向、感受性が鋭敏で、即興的機智的の趣味を愛すること、是等は自ら短歌を好みよましめたのである。かゝる理由で、短歌は和歌に於いて有力となり、終に歌といふ語の狹義の意義を占領するに至つたのである。

　これから、一般に歌の理から論じ及んで、詠歌の上に關する注意を述べよう。

歌には二つの要素がある。形式を爲す詞並びに調と内容をなす想、とである。この二つは、相俟つて歌をなしてゐるもので、その關係は相即不離である歌らしい想が、歌らしい詞調子をとつて言ひ表はされたものが、歌なので、しかも分けて考へれば、想と、詞及び調子とにされる。是に於いてか、歌を論ずるについては、この兩面からせねばならぬ。

第一に歌の想について論ずる。想とは、我々が言ひ表はさうとする感じといふことで、構想といひ、趣向といふのと同じである。古來いふ歌題は、即ちこの想の表題で、題を設けて歌をよむのは、題によつて想を暗示せられむとする爲の便宜である。歌は元來感情の聲である。我々の見聞するところ、我々の心に感ずるところ、すべて歌の想となり得るのである。これは理まさに然るべきであつて、歴史上上世の時代にはさうであつた。然るに、中世以後題詠といふことが起つてから、この歌想の自由といふ事が段段制限されて來て一種常套的の歌題といふものがきまり、歌の想が所謂月並的の、型に入つたやうなものなつて來た。その弊、歌想の陳腐となり、歌をよむとなると、一種型に入つたやうな、趣味の天地に入りこんで、眞に感せぬことを繰返すといふやうになつて來た。そこで、歌とは死んだもの、生命の無いもの、造花見た樣のものになつた。感情を自由に發表するといふ歌の元の意味から言つて。か

かる傾向の打破すべきは勿論である。かくの如き破邪の第一聲は、自然にかへりて、自己の眞に感じたことをうたふといふにある。この一言でつきてゐる。歌の本來の性質にかへることである。中世以來の和歌の弊風に飽き〳〵して來た德川時代の歌人の殆ど凡てが、自然に歸れといひ、眞情をもととせよといつたのも、その實行は別として、この故である。古來の歌題を破り、月並趣味を破つて、自然人事に對し自分が眞に感じたことをとつて想とする。これに盡きてゐる。併しこゝに注意すべきは、自然といひ自己の眞情といつて、その弊に拘むべからぬことである。その弊とは、自然といふあまりに、趣向といふことを忘れ、眞情といふあまりに、想像といふことを忘るゝこと、これである。自然と言うたとて歌としては趣向を美しくならしめむとし、面白からしめむとすることの必要なのは、言ふまでもない。眞情と言うたとて必ずしも狹くいふ自己の眞情といふことではない。又實際の感といふことではない。

他人の心事になりかはり、他の境遇を想像して、その心にまことに感ずるところは、これ人の眞情であつて、勿論歌としに詠すべきものである。自然を重んじて技巧を忘れ、眞情を重んじて想像を忘れた弊は、桂園派末流の歌に明らかに現はれてゐる。こゝにもう一つ注意すべきことは、深く考へるといふことに就いてである。古來歌は―或は、見るもの聞くものにつけていひ出せるなりとか、理るものにあらずとか言はれて、即興即詠といふことを重んじ、その爲、深く思ひめぐらすといふやうなことは、輕んぜられた。理はるものにあらずといつて、理屈を排斥したのはもとよりである。歌は決して理ではないさりとて必ずしも理を排斥しない。深い理を含んだ思想を詠んで、人心を深く感ぜしむるものは、大によむべきである。單に理はるものにあらずといつて深い意味のある思想を排斥するやうになつてはよくない。吾人は單に即興即感に滿足せず、深く考へて深く人を感ぜしむるやうの歌をよむべく、想を錬らね

ばならぬ。思をひそめて、深い感じの狀態にいたつて、想を錬つてゐるうちに、しみ〴〵と人を感せしむるやうな深い切な想にふれることは、幾らも我々の經驗するところである。

以上を以て想のことを終り、第二に、その想を言ひ表はす形式的要素たる、詞と調子とについて述べる。詞とは、我我の思想を發表する道具であるが、この詞にも、古來の歌の上では、自ら雅俗の區別をして、所謂歌詞の型をなしてゐる。こは想のところに述べた歌題と相ともなつて形ち作られて來たものである。その弊の最も甚しきをなしたものは、中世歌學以來の所謂制詞の說である。こは二條家冷泉家の歌學に生じて來たことで、當時の歌學はこれにとらはれてゐた。元來、詞は思想の發表であつて、歌の想は自由であるべしとすれば歌の詞も自由であらねばならぬ。制詞の說の如きは愚も甚しきものである。戶田茂睡が元祿の時代に出でてまづこれを論じた。歌詞はよろしく自由なるべし。新舊によつて雅俗の別をすべきでない。併しながら、歌は言語ではなく、散文でない。卑俗をさけ、歌にふさはしいものをとるべきは當然である。たゞ雅俗の標準を古來の如き、新舊とか、先例のあるなしとかにおくべきでない。然らばどこにおくべきかといふと調である。調とは何ぞ。詞のつゞけがらに存する調和である。而してこの調は又、その內容を爲す想との調和となつて、一層深い意味を有つてくる。景樹がその歌論に切論した調の意義は、一面こゝにある。併し茲に注意すべきは、調といふものを、たゞ耳ざはりのよい、なだらかなものと解することである。これ景樹派の實際陷つた弊であつて、その歌風の平弱に走つて單調いとふべきものとなつた原因である。想とか情趣とかいふものが、自由であるべきであるから、それに伴なつて、調子に於いても、優美にも、雄壯にも、洒落にも、幽遠にもあるべきは當然である。調子を重んずるあまり所謂なだらかな調子にとらはれてはならぬ。これ吾人の避けねばならぬ點であ

る。

歌想歌調に就いて、吾人が言はむとする所は大略上の如くである。この理に基づいて、想も詞も、自由に清新によむべきであるが、然かも實際詠歌の上には、特に注意すべき點がある。そは如何と言ふに、新らしくし、大膽な思想を詠まむとし、複雜な思想を詠まむとすれば、その弊として、新奇となり、難解となる。これは舊套を脫せむとする余りの弊で、現今の歌によく見るところの現象である。かくの如きは、自然の結果として甚た咎むべきでないと雖も、なほ渾然たる作品として鑑賞するにふさはしからぬ憾みがある。さればこの點に於いて、吾人の着目すべきところは何處にありやと云ふに、そは即ち、歌らしさといふ理想である。歌らしさとは、歌たる性質にふさはしいといふことである。くはしく云へば、短くまとまつた三十一言の詩形として、想に於いては、いたづらに複雜を思想をよみこまうとせず、よく思想の一端をとらへて、全豹を讀者の心裡に現出せしむる用意と手ぎはとを必要とし、形式的方面に於いては、印象明瞭の詞を用ゐ、冗語冗句をさけて、情趣を活々とさせる心得を必要とする。かくの如きは。その實、作歌上の手腕で解決せられる所で、委しく說明する限でない。けれども、かやうに覺悟して詠み試みることは、實際上少なからぬ効があると思ふから述べておきます。

以上甚だ簡單で、盡さない處もあらうと思ひますが、和歌に關する私見の大体を陳べた次第で有ます。

折にふれて

金子幽花

梅さいてゐ　藁やの軒に
待すは鶯　友のおとすれ

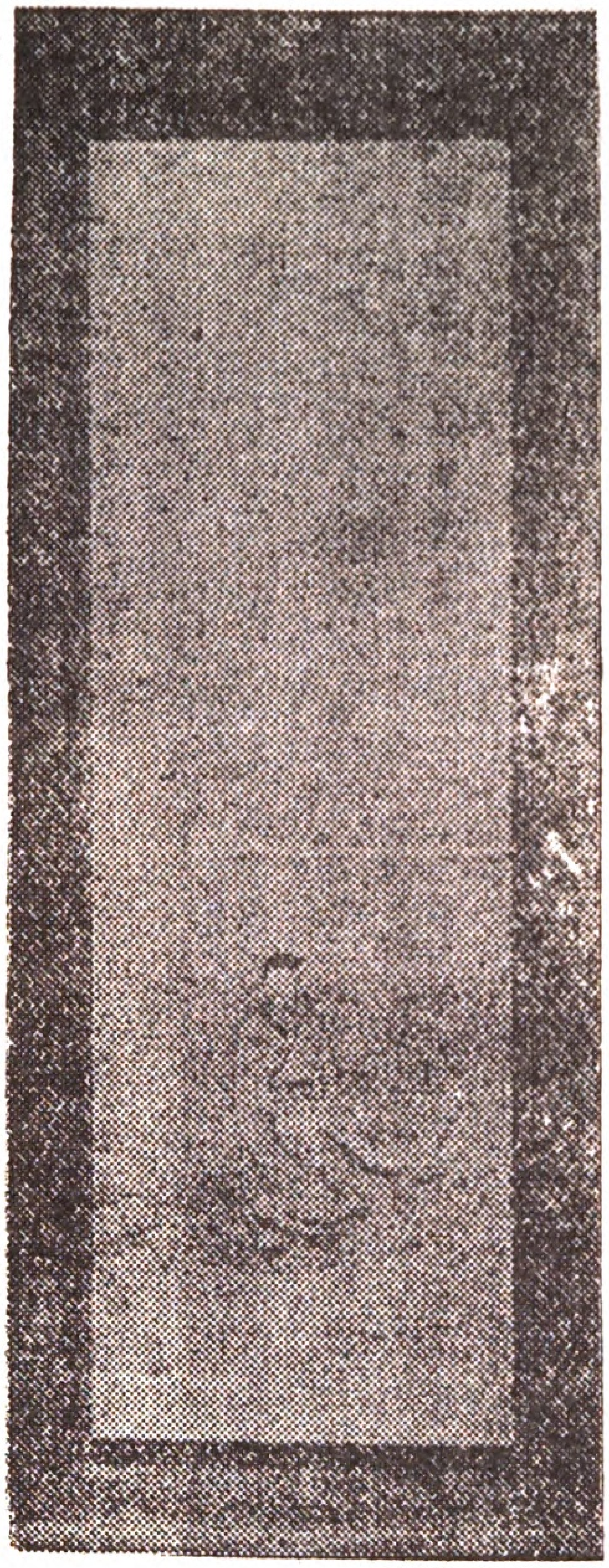
昔ながらに　やせたる男の子
煤びし窓に　うそふきいぶく

野口小蘋女子筆



夏雨新晴圖

橋本雅邦翁筆



東方朔圖

四季愚吟

愛氷生

春

梅白し月白し夜のはなれ際
心なし菫のなかを破れ草鞋
落る日の上に鳴けり夕雲雀
春雨やねんねこさるゝ夢心
旅に寢て夢は上野の花見哉
永き日や眠り引出すいと車
盲人に行越されけり春の旅

夏

星一つのこさぬそらや杜鵑
卯の花に一きは黒し杣の飯
五月雨や小窓を覗く草の蔓
短夜の夢を鼠にひかれけり
松風に汗をふかせて晝寢哉
道いそぐ人の袖這ふ螢かな

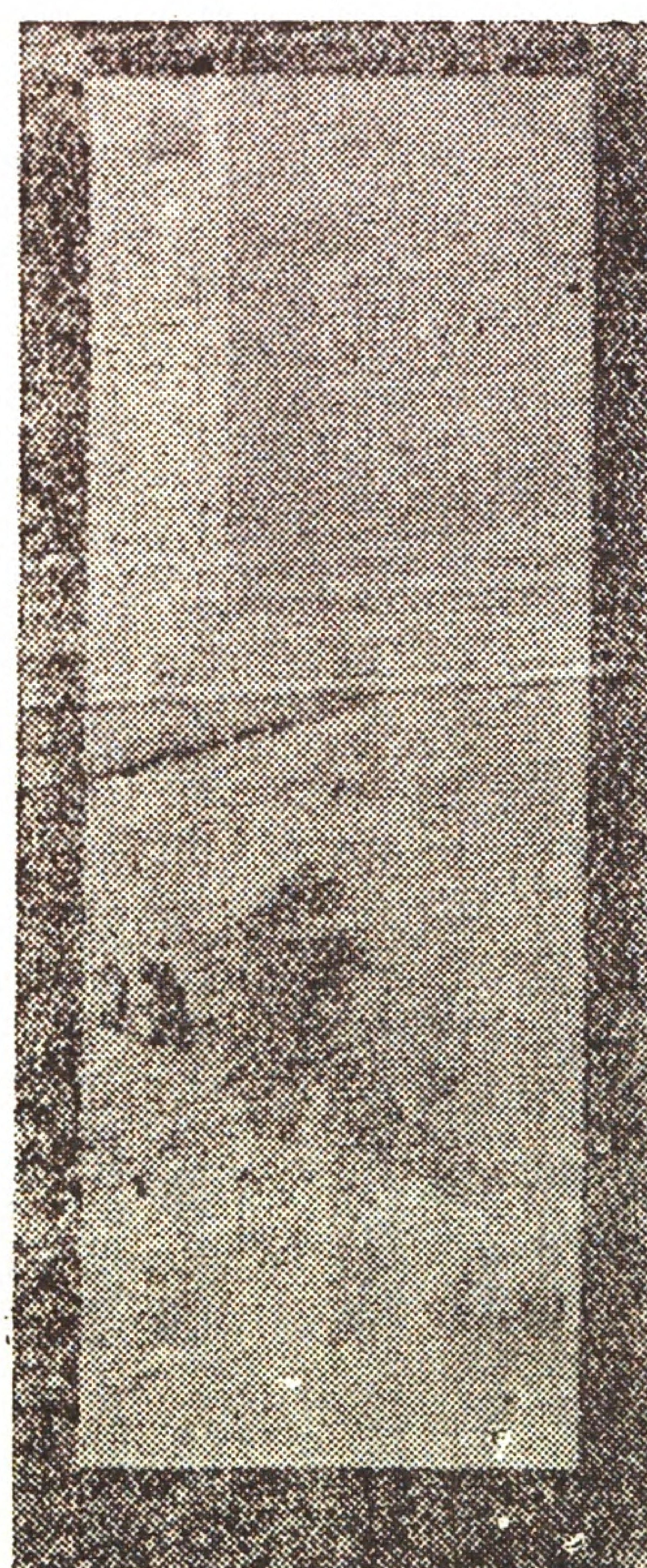
宵の火はあすの煙りや螢賣
古小袖盥に合歡の花が散る
足はたく手拭白し雲のみね

秋

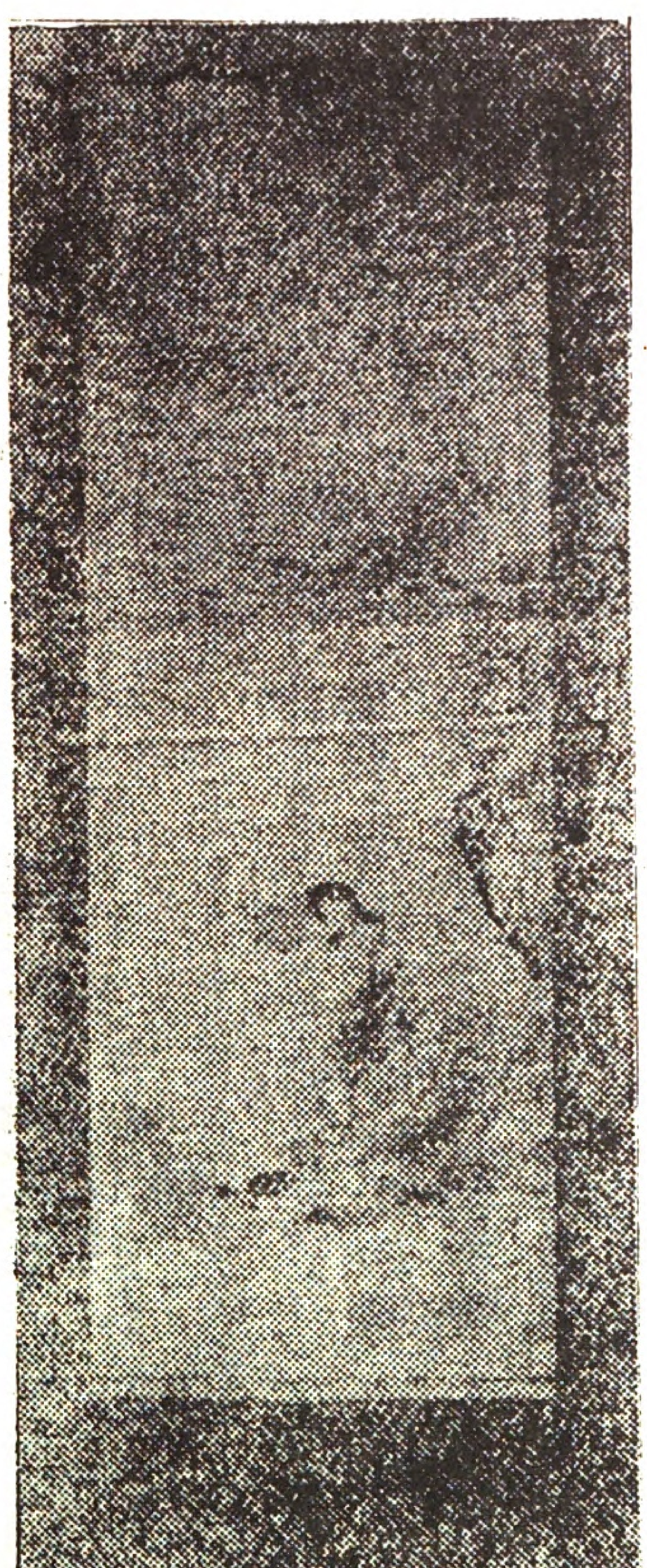
朝顔の萎かぞふる月夜かな
垣裾へ横日さしけり秋海棠
秋にのみ夕暮有と思ひけり
雁鳴くや浦かせ寒き朝月夜
乳貰ひや野分返しを袖屏風
夜を寒み秋の底つく雨の鐘

冬

分別の果夢となる巨燵かな
枯し野や夕かげ長き牛の角
歌書た反古抔もあり張火桶
犬吠えて見返る門や冬の月
水とりや波を枕に幾夜寢ん
躓きし石かへり見ぬ師走哉
煤掃や隣へかへす草ざうし



橋本雅邦翁筆　四方拜圖



今尾景年翁筆　柳下美人圖

家庭舞踏　梅は咲いたか（つゞき）

『梅は咲いたか』の拍子と手足の振（下）

		廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	卅	卅一	卅二	卅三	卅四	卅五	卅六
拍子		廿五—	廿六—	廿七—	廿八—	廿九—	卅—	卅一—	卅二—	卅三—	卅四—	卅五—	卅六—
唄		トンヤ	ーなー	ーきやー	ーな	よー	ーなー	よチチ	チンか	ーぜ	ーし	ーだ	—
舞踏	手		13	14		15	16		17	18			19
舞踏	足		9	10		11	12	13					

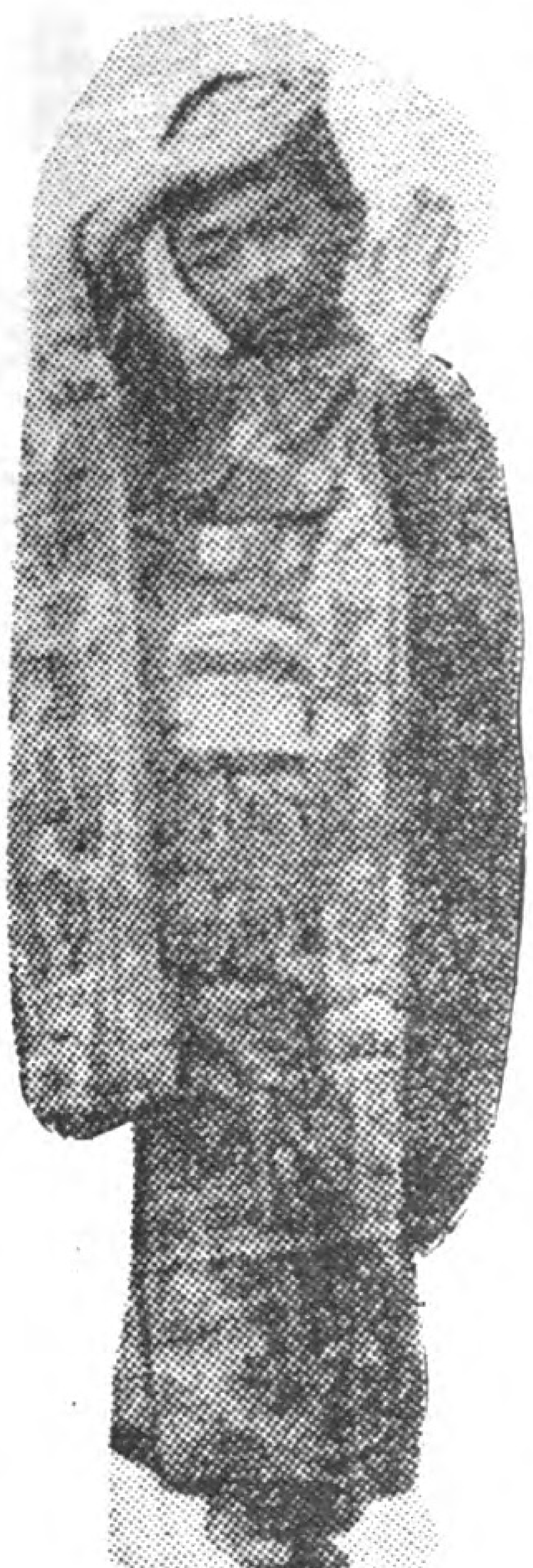
		卅七	卅八	卅九	四十	四一	四二	四三	四四	四五
拍子		卅七—	卅八—	卅九—	四十—	四一—	四二—	四三—	四四—	四五—
唄		ーいー	—	やまぶきや	みなしで	トチンチ	ンさはな	ばっかり	しよがいな	トチ
舞踏	手	ー	20	21	22	23 24	25 26	27	28 29 30	
舞踏	足			14	15	16 7	8	19	20 21 22	



家庭舞踏　梅は咲いたか

◎振の十三　左の足を少し斜に出すと同時に、伸したる兩手を、右の脇の下あたりより、左の方へ圖の如く斜めに伸ばし、文字の如く、恰も柳葉のなびく如き手つきをなすなり、顔は伸ばせし手の方に向ふ。

◎振の十四　右の足を左へ入れると同時に、圖の如く左へ伸したる兩手を反對の方向に引く、この引く時は、顔を少し右向になる。





◎振の十五　振の十三におなじ。

◎振の十六　振の十四に同じく、前の振とゝもに、一足づゝ圓環軌道を左方に進む譯なり、この足跡圖にしては甚妙味なけれど、この順序に自然足加減を要す。



◎振の十七　こゝにて十三以來の振はきまる、振はその十三に似て、圖の如く少し兩手をあがり氣味にす、

◎振の十八　上圖の如く兩手を左方に構へ、圓く頭の上より右へまはし、帶の下へかけて元の位置へ、掌を外にしてまはす、即ち掌を外に、風柳枝をまくとでもいふ風情に、しなやかに圓形を書くなり。

◎振の十九　前の振のやうに、また兩手にて空間に圓形を書くなり、されど前の振の終りと、この振の初まりのつゞき工合を目立たぬやうにし、こたびは兩手の右脇のさがりたる位のところにて次の振にうつる。

◎振の二十　こたびは右脇にさがりたる手を振の十七の如く、左方に伸ばして十八以來の手きまる。

これよりまた向合になる。



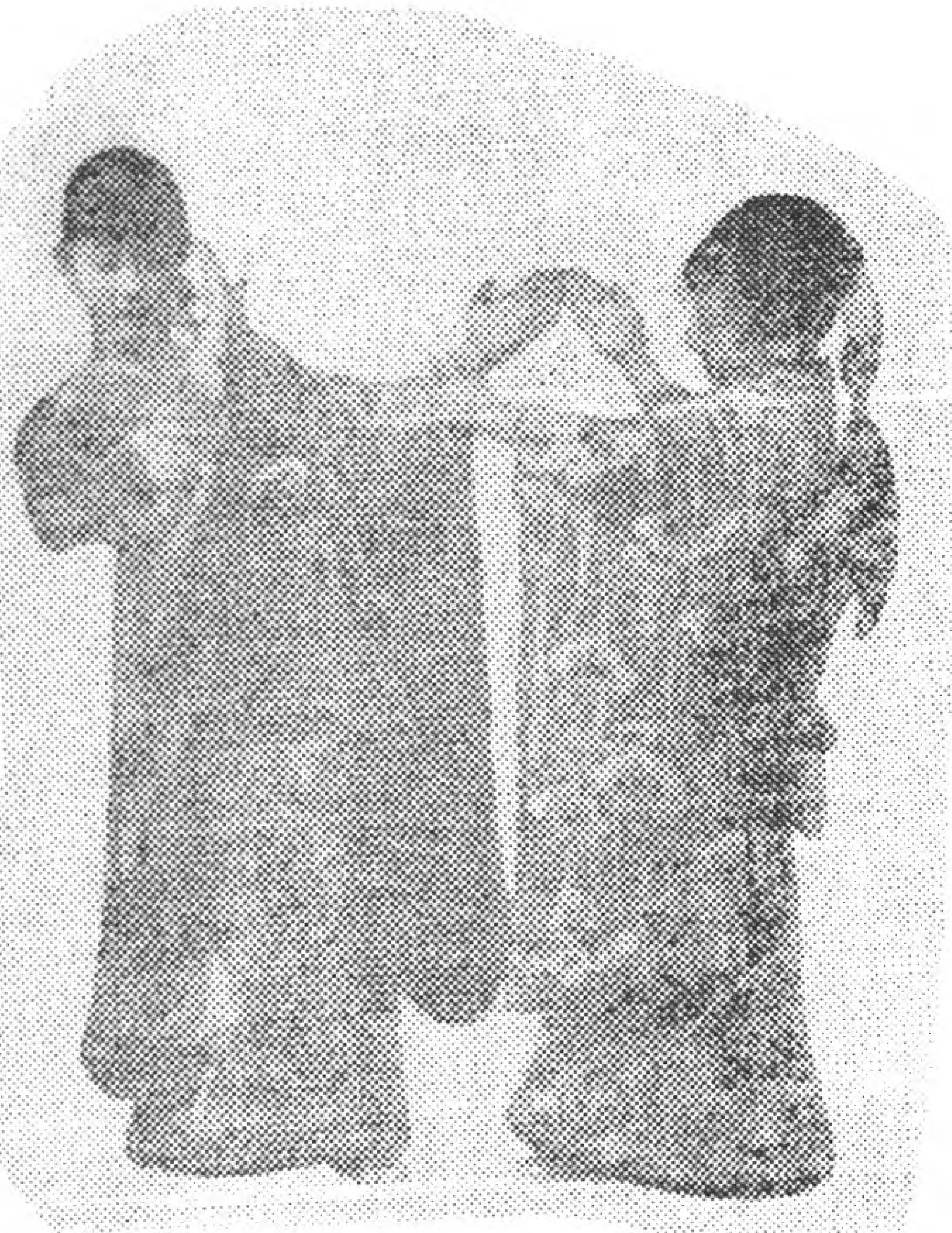
◎振の廿一　向合ひになる時は、振の八の如く、男は右に、女は左に横に向きかはる、この時男は左足を、女は右足をや〻親指の接近する程に前に出す。

手は男は左を、女は右を下に垂れ、男の右の手と、女の左の手は圖の如き位置にて殆んど接近さするなり、之は差支なき人同士なれば、指先を輕く握り合ふ方、仕種としてはよし。

◎振の廿二　圖の如く手の先の接近し、又は輕く握り合ひたるを上圖の如く上ぐるなり、この時男は左の足を引きて右と踵を合はし、女は右の足を引きて左の足と踵を合はすなり。

この手をあぐる時、握合ひたるものを上ぐるは、初めよりそれにて手のつきなれば、その方調子よけれど、男女の遠慮より態とそれを避けたること前に述ぶるが如くなれば、止むを得ぬことなれど、その心もちにて、空間にも或物を輕く振る





やうしそれを上にかざず、この足跡圖の如くはゆかず、されどその見當にゆきたし。

◎振の廿三　男は左の指先にて、女の顔を指さす如き振をなし、指さすと同時に左足を前に出す、女はまた指さゝれたるを遮る如く顔に掌を外にしてかざし、少し顔を後に引氣味にす、顔に手をかざす時、右足を少し後に引く。

◎振の廿四　前とは反對に、こたびは女が引きたる右足を前に出すと同時に、男の顔に指さし、男は出したる足を引きつゝ顔にかざす指ざゝれたる手を遮る如く、掌を外にして圖の如く顔にかざす顔を少し後に引氣味にするもまた前の振に同じ。

◎振の廿五　振の廿三に同じ。

◎振の廿六　男は左に、女は右に向きかはり、斜に脊合せになり、左を下に右を上に手を交叉す。

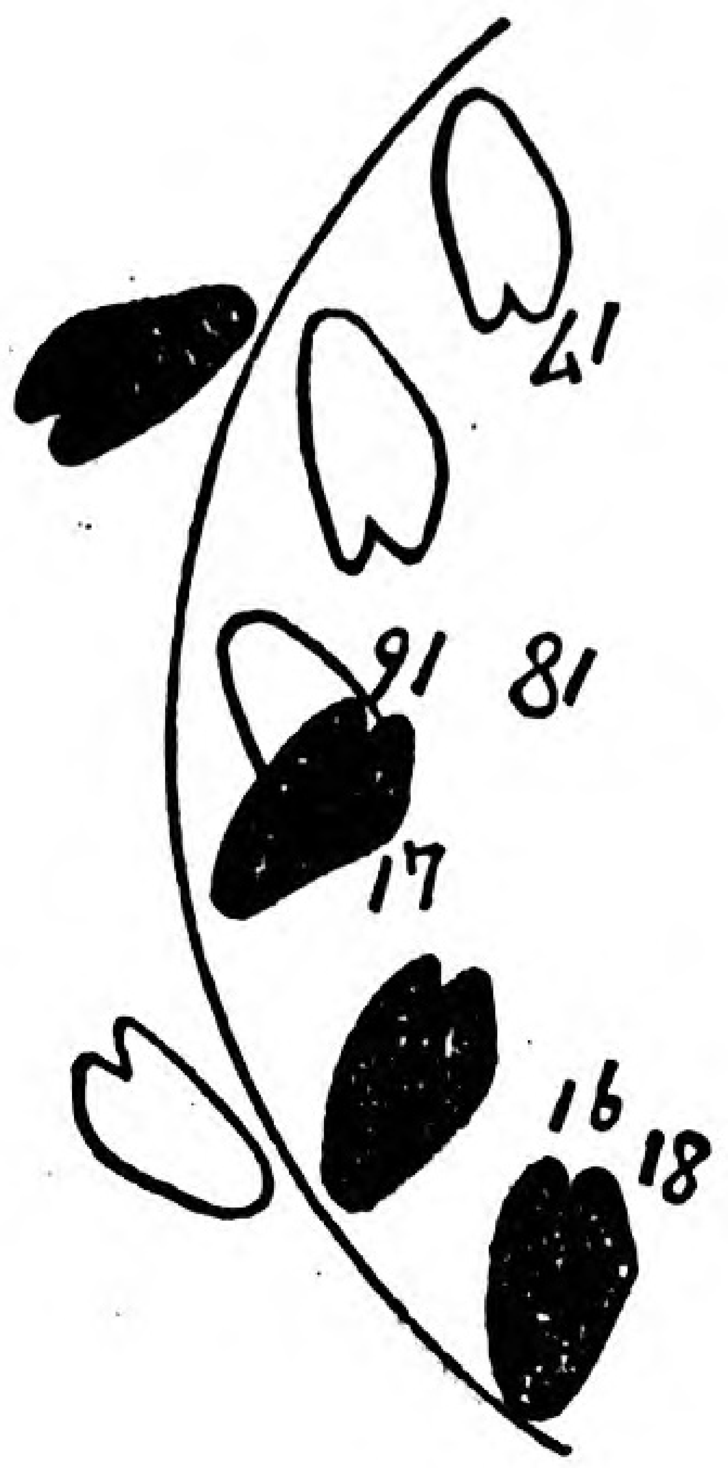
◎振の廿七　組みたる手を左右に開く、また兩手を交叉したるまゝトンと足をきめるもあり。

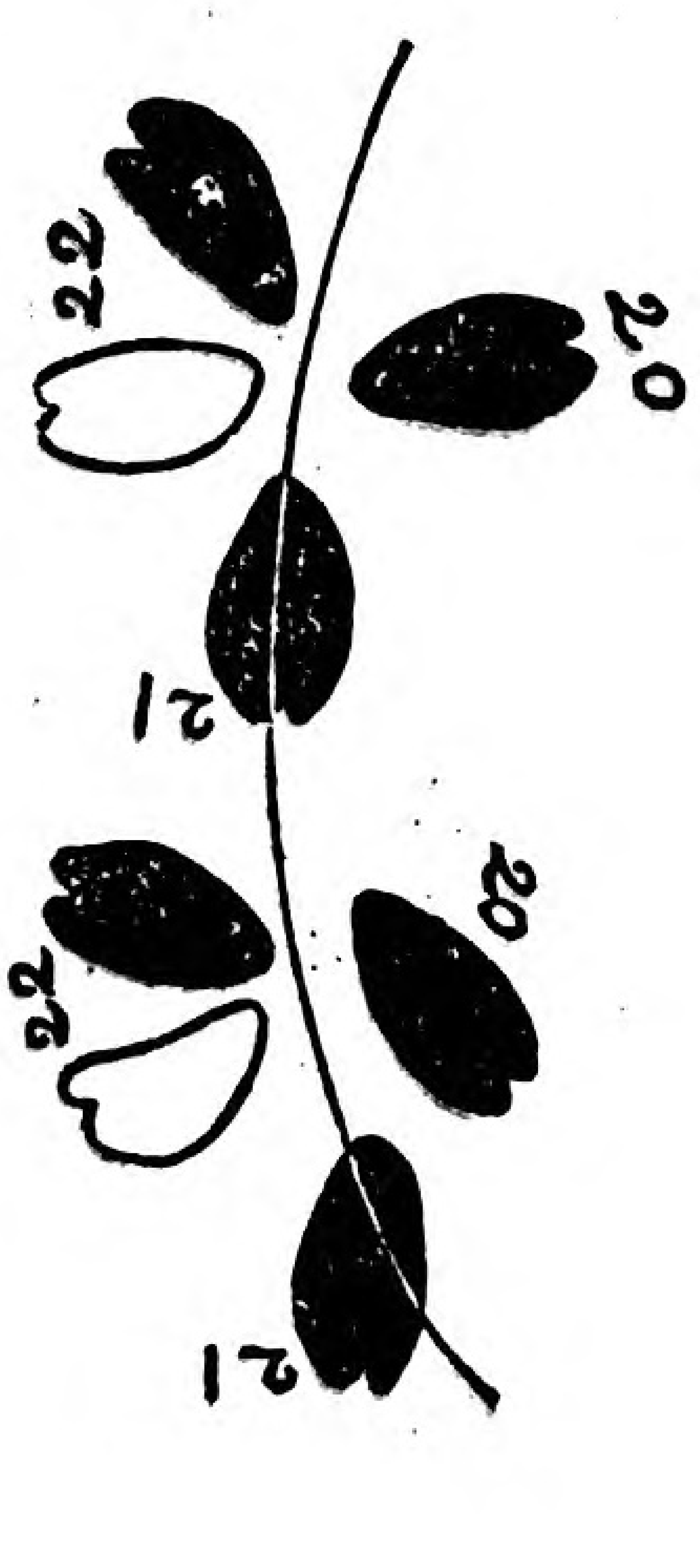


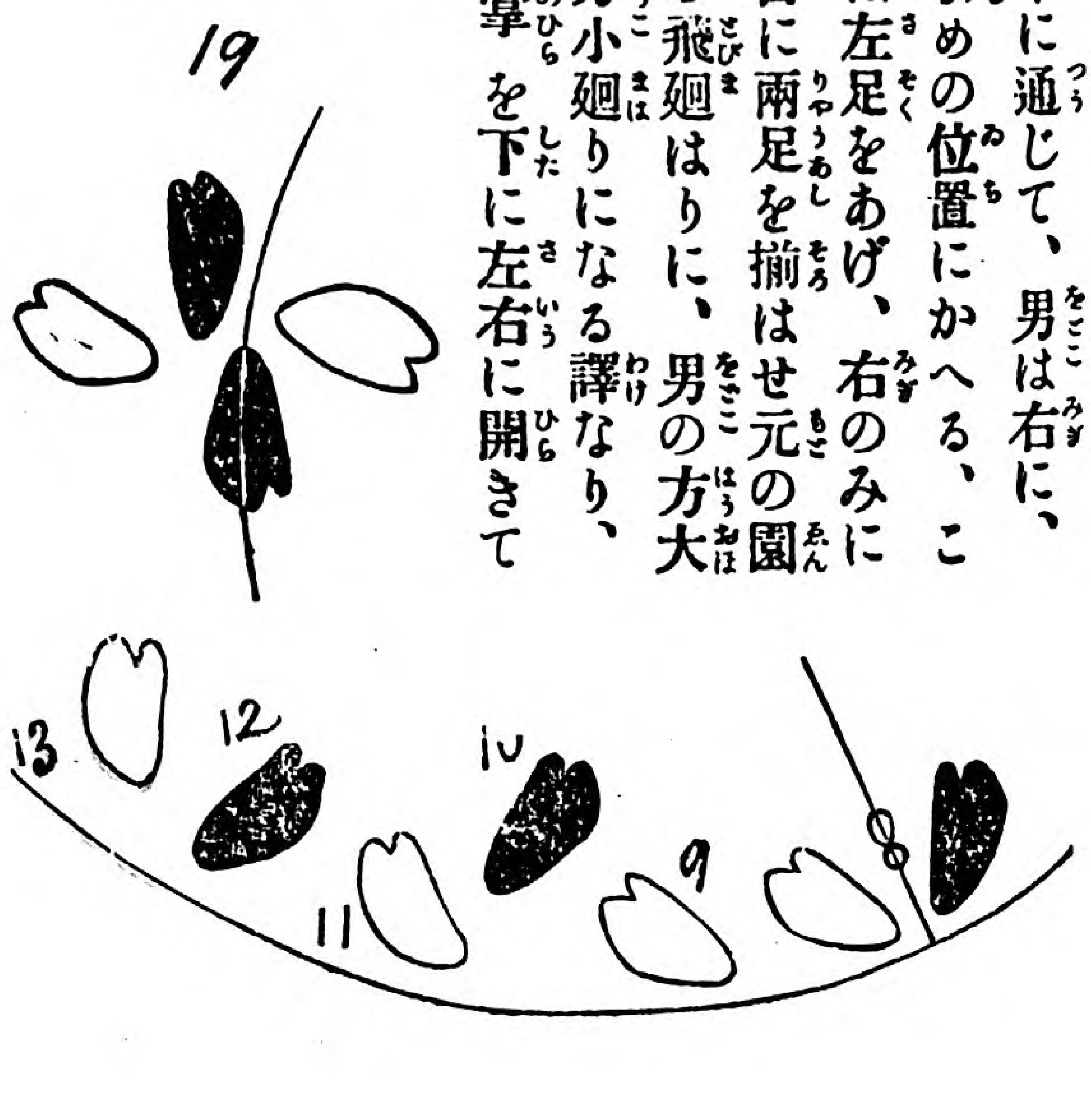


◎振の廿八より三十に通じて、男は右に、女は左に、三足にて初めの位置にかへる、この三足は初めの二足は左足をあげ、右のみにて飛び、あとの一足目に兩足を揃はせ元の圓環になる、さればこの飛廻はりに、男の方大廻はりになり、女の方小廻りになる譯なり、また初め二足の間は掌を下に左右に開きて伸ばし、三足目に兩足の揃ふと同時に兩手をたるゝなり、これにて男女の並びたる順は變る。









家庭舞踏を見る

文學士　山本無極

興に乘じて人が歌舞するといふことは、當然あるべきことで、必ず歌舞せねばならぬといふことのない代り、歌舞して少しも不都合といふことはない、併し物は極端に走りたがるもので、舞踏にしても、これは大に奬勵せねばならぬ、舞踏が出來ねば交際塲裡に出ても巾を利かす譯に行かぬといふ風になつては、少し困つたものである、何でも明治二十年頃、貴婦人間に大分この舞踏といふものが行はれ、玄鹿館といふ遊び塲所の名もそれで知れ渡つたほどであるが、あまりに度が過ぎて、この間からあられぬ噂さへ立つやうになつた、噂などは何うでもよいとしてからが、七十に手が屆いて二十歳や二十一の妻君を貰つて、それも田夫野人ならば兎も角も、有爵有位の大官で、即ち社會の儀表とならねばならぬ人であるに拘らず、一向平氣なるはまだしも、この秩序を紊る人に向つて禮遇停止を口にするものもないほど無制裁な社會であるから、老人だから上流だからと云うて、男女混交の舞踏を安心して奬勵する譯には行かぬ、勢ひそれ等の事情が原因となつて、間もなく舞踏が衰頽に趣いた、即ち社交的舞踏は、今少し社會の風紀がよくなつてからの話にして貰ひたい、西洋などでは表面さへ飾得れば、裏面にはどんな事があつても、ソツと蓋をして置くといふのであるから、そんな僞善社會に習つては大變である。

それから近來歌劇などいふものが始まつて、女子大學や、音樂學校あたりでも企てた、さすがに賢明なる文部大臣は音樂學校の歌劇を封じ、女子大學では二三回は行つたやうであつたが、これも學校取締法によつて禁じらるゝ事になつた、この歌劇にしても舞踏にしても、決して不都合といふ程のものではない、たゞ論より實際に於て、決して社會の風紀をよくしないことは爭ふべからざることで、普通興行の外は當分見合は

すべきものである。

右の次第で社交舞踏は一向振はぬ、外務大臣官邸で時々復習さるゝ位に止まつて居るのは、何より風紀上無事でよろこぶべき事である、然るにこの頃社交舞踏に對して家庭舞踏といふものが始まつた、これは美音會に於て專ら演じられて居る國風舞踏と云ふのを、その皷吹者の一人なる中川愛氷君が、更に家庭舞踏と命名したさうである。

一夜この家庭舞踏を見た、併し見たと云ふほど大袈裟なものではない、中川君が口三味線で獨り舞踏したのを見た位の話である、興に乘じて舞踏したのでもなく、注文して如何なるものか試演して貰つたのであるから、まだ充分解らないが、歌が鄙雅ともに其中庸を行き、無邪氣で、歌ひ易くて、なか〳〵面白い節がある、また振にしても、木曾節の如きは六つの手振で卒業さるゝほど簡易で、この手に妙處がと取立てゝいふほどのものもないが、接續して演じて居るうちに自然旨味が出て來る、少しも肩の凝る所もなければ歯の浮く所もない、歌詞、舞譜まづそれであるから、よしや社交界への賣物としても、成立が輕薄本位輕佻本位の舞踏、歌劇などよりは、まかり間違つても害が少い。

第一氣に入つたのは、三絃によつて舞踏さるゝ、純邦式のものであるから、もし外人に日本の舞踏はと聞かれても、これで御座ると見せることも出來る、糟粕をねぶつて非なるものを見せるのとは格段の相違がある、家庭といふもの〻、男女の關係に注意を拂つて居るなどは最もよろしい。

一體社交といふほどのものでなくとも、家庭外の娛樂は其處此處に演じられて居る、兎角家庭には娛樂が少いと云ふより皆無といふてもよい位である、どこの家庭を見ても、桁外れに陽氣とか、さもなければ多くは陰氣である、即ち陽氣に屬する方の家庭は亂脈で、陰氣な方は兎角事なかれといふ傾がある、家庭が冬な

らば、戸外へ出れば春でもあらうかといふ趣がある、それ故越後の人が江戸へ出稼ぎに來るやうに、うら寒い家庭に落付いて居られぬとなる、外へ出て大口を叩く主人も、家庭へ戻れば急にむづかしい顔になる、家長に貫目をつける上からは止むを得ぬことであるが、それが多くは僞善であるから、家族に内兜を見すかされて、威も箔をはがす事になる、決して家庭はさう骨折つて殺風景にするには及ばぬ、よく打解けて働き、よく思ひやり、共に舞踏して、然も長幼の序の混線せぬやうにしなければならぬ、家庭で盛んに舞踏さるゝやうに、家族相融和してそれ〴〵業務にいそしみ、親子兄弟睦み合へば、これ程結構なことはない、所がそれがなか〳〵むづかしい、あまり家庭々々と騷ぐ人は、その近所をも顧みぬといふ極端に走つて、これでは人としての世間があまり狹いやうに思ふ、少くも近所合壁位は申合せて、この家庭舞踏を共同で演じる位になれば妙である、まづ家庭からこの舞踏が繁昌することになれば、友人の家に遊んだ時にも加入して演ずる、見ず知らずの團體にも加はつて演じても差支なくなる。

兎に角囃子につれて、多衆一つに舞踏することは面白いには違ひない、如何に面白き物を見ても聞いても心伸びやかに夜の更くるも知らぬといふほどのものは多くはない、それは歌留多なども家庭内で上手下手打交りて無邪氣にとるとなれば、隨分春めかしく氣も浮き立つが、老人でも若き者でも、親でも子でも、當分に面白味をもつては遊ばれない、かりに頭が揃うても、村雨會の何のと、力瘤が入り過ぎるやうになつては氣の伸びかな遊びにはならない、健康の上から云つても宜しくない、即ちこの舞踏に限る。

そこへ行くと此家庭舞踏は流石に美音會の諸大家が選拔した丈あつて、成立がよい所へ物がよい、第一之を普及させる策がよい、歌舞の譜ともに本誌によつて、容易に知る事を得るのであるから、大方の家庭は、あらゆる苦情を大掃除して、この舞踏を觀迎さるゝやうに、親睦天日を樂まれたいものである。

裁縫の話

但し被布に就て

女子高等裁縫學院長　小出新次郎

是までの順序から云へは少し飛離れて居るかも知れない、否、掛離れて居るのであるが、併し寒い時には矢張その時候に適つた話の方が讀者に取つて興味もあり、且つ直接に利益を感せらるゝであらうと思付いたので、順序に拘はらず玆に被布の事に就て少しくお咄をする事とする。

さて被布として最も肝要なる部分は如何なる點にありやと云ふに、事新らしく繰返すまでも無く小襟である、この小襟と云ふものは被布に取つて實に肝要なる部分であると同時に、また如何にも付け難い、啻に付け難いばかりで無く、即ち一定の方法を御存知なくして遣つた方の小襟と來ては隨分極端なのがある、それは付方に於て缺點があるのみならず、大体の格好の上に於ても缺點のある事を往々目擊する事であるが、之を要するに、一定の方法を以て形造る事にさへすれば、決して左樣云ふやうな甚だしい滑稽の物は出來る筈のものでは無い。

然れば其の一定の方法とは如何いふものであるかと云ふに、先づ小襟を作るには、初め用布を巾物ならば、最初縱に二ツに折り、再び之を横に二ツに折つて、それから三ツ身は三ツ身、四ツ身は四ツ身、本裁は本裁として、何れも略一定の寸法のあるものなれば、巾は其の寸法通りに極め、丈は既に二ツ折になつて居れば總丈の二分の一に極め、それより其の丈を極めた篦から左の方へ小襟巾の寸法だけ寄せてチヨツト篦印を付け、その篦印から右の向の角の方へと尺度を斜にやつて、巾の寸法だけに四ケ所も五ケ所も順々に印を付けて、その印に準うて櫛形に形を付けるのである、左樣さへすれば何時でも形よく格好が付くものである、この方法を術語では阿彌陀式と稱して居る。

そして尚ほ其を格好よく作るには、その櫛形にし

た篦印の外を三四分の縫代を殘して揺落して置けば、縫上げてからヒズミが無く完全に作り得らるゝものである。

併し左樣云ふやうな工合にして格好を造り得たとしても、尚ほ縫ふ時の注意が足らなければ何にもならぬ、去れば其の方法は如何いふ風にすれば間違無きを期せらるゝやと云ふに、これも術語で內形外形と云つて居る、即ち折裏と折表との差を明らかにして造るの方法で、畢竟二枚一ッに篦付けしたるものを、更に待針を打つときは、折表の方は篦のまゝにして、折裏は二分餘り縫込みし得らるゝやうに篦より中へ入れて待針を打つ、左樣云ふ風にして縫上げた結果、表は非常に弛んで居つて裏は其の反對に非常に緊つて居る、先づ其の樣に縫上げて一旦深い折代にして折を付け、尚ほ強く鏝にて折癖をつけ、その上に襟心を眞綿にて包み、それを折代に綴付け、それより小襟の付方に掛るのである。

そこで小襟の付方に就て、從來は小襟を身頃に挾んで付けるのが當り前であつたが、當今は突込と云つて、折表の方は是まで通り小襟が上に載るやうになつて、折裏は心と共に身頃の中へ突込みになり、而してくけあげた所は身頃が上になつたやうな格好になる、斯う云ふ風にして行かないと、小襟付けの止りの所が工合良く返らぬものである。

何故かといふに、從來のものであると、此所の所が縫返しと共に八枚にも十枚にもなつて居る、自然範圍の狹い所で厚くなつて居るから、それが爲に妨げられて、何うも工合よく行かぬものである、それに反して突込みの方法にすれば、十枚のものは減じて僅かに六枚の厚味といふ風に自ら薄くなる、從つて夫だけ滑らかに返ると云つたやうな譯である、併しながら此突込みといふ付方は、その方法に餘程熟練して居らないと、却つて餘程滑稽なものに陷るから、此所は充分に研究に研究を重ねて熟練の域に達せらるゝやう奮勵あらん事を望むのである。

次號より前號につゞけてお話すべし。

短篇小説

親

山崎厤溪

野河遠く、山の裾をうつすりと流れた水蒸氣が拋られた太陽の光線に消えて行くと、輪廓がぼつかりと浮き上つた午前七時。

黄綠の若葉を著けた銀杏の大樹が矗乎と、櫟林の上から瑠璃色の空に向つて開かれた梢から、ズッと離れて白い一抹の横雲が棚引いて居る。

靜かに吹き出した生温い東風は、村の平和を攪亂さぬやうに、色の褪せた菜の花畑を渡つて、青々とした麥の穗並の間へと消える。

「あゝ。」

兄の吾作は病人の熟睡を幸ひ、朝の職責に從ふ可く鍬を擔いで、門川の小橋に凭う溜息を吐いた。

自ら心も溶けるやうな、青春の血潮に觸れた行く春の氣は、野に、山に、活動の働きとなつて、滿ち滿ちて居るのだ。

吾作は毎朝、この小橋の上に立つて、水車小屋に降つた白壁に希望ある春の光が晃めいて居るのを見るにつけ、什うしても弟次郎のことを思ひ出さずには居られないのだ。假令夫れが法に背いた憎い奴にしろ、血を分けた肉身の兄弟ではあるまいか、世間では成程よく云はないのも當然だ、兵に召されたのが辛いとか、まア男らしくもない脫營して失れなり、親兄弟の面に泥を塗つた憎い奴、村人が自分等を除けものにしたのも誰の爲めか。だが、俺は什しても其憎い奴が可愛想でならぬのだ。

吾作は悄然と橋の上。

「あゝ、俺も、俺も考へると……」

涙ぐんだ瞼を大きな掌で拂つて、鍬を肩から外す機會に、薄黑く染つた手拭が腰の邊から落ちた、と見ると、水に開いて、横に、縱に流れて行く。

『吾作、吾作』

不圖、家の内から聽へたのは將しく病人の母の聲、吾作はハッと思つて耳を澄ました。

「吾作、水をおくれ、吾作や。」

震ひを帶びた微な聲、骨だらけの壁の隙から、ちら〱洩れた陽の光線に眼が覺めたのでもあらう、吾作はたまらなくなつて馳け附けた。

「阿母さん、お目覺ですか。

と、表戸開ける間も遲く、上り框から慿う聲を掛けた、晴々しい天氣ながら、家の内は病人の故か、薄暗く陰氣である。

「濟まないがね、これに水をお呉れ、咽喉が乾いて仕方がないのだから……」

體熱の蒸した破れ蒲團を掻いのけて、瘦せ細つた生白い手から、小さな燻つた欠土瓶を差し出した。母親の年頃は六十餘り、白髮交りの紛れ毛が頰の邊りへと亂れてゐる。

「ハ、ハ。」

と、氣も輕く答へた吾作は、靜かに土瓶を受取つて、臺所とは名のみの門口へと走つた。やがて。

「お氣分は……」

吾作は小聲で枕頭、母の顔を覗き込んでは小首を傾むけた、久しい病苦のやつれも見へて、今朝は體熱のせいか、頰が心もち赧らんでゐる位である。

吾作は遣瀨なさそうに、霎時、太い息を吐いて、はら〱と熱い淚を飜した。そしてこの瞬間に想ひは矢張次郎の身の上にと及んだのだ。

丁度去年霜月二日の雪の夜であつた。

次郎が脫營して來たと告げた時、其一部始終を聞いたが、あゝ尤もだとも思つた、次郎の分隊長と云ふ奴が根性が曲つてゐて、平常小使錢の融通でもしてやらぬと、何につけ彼につけ、邪魔にして蹴る、毆るは常のこと、小かしい事をあら立てゝの上官呼り、脫營したには無理もあらう？、とは思つたが、世間の手前、母親共々自首して出ろと叱つて見せたが、其夜限り我家を飛出して了ひ、今に梨の礫の音沙汰がないのである、夫れが因で母親は大病、自分獨りの瘦腕では野良の仕事が精一杯、心をかけた看護も出來ぬ悲さには、せめて彼奴が居たならばと思つて

も見たり、茫然として居る夜毎日毎。

母親は土瓶の欠けた口に、乾き切つた火のやうな唇を當て〻、こくり〳〵と甘さうに、今朝は耳が遠いのでもあらうか、窪んだ眼を吾作の顔に移したが、そのま〻何とも云はずに默つて居る。

「お、阿母さん！………」

『吾作は眤と見て居たが、堪へずなつて瓦破と泣き伏したのである。

戸の隙を近くせまつた青麥の間から、朝風がそよ〳〵吹き込んで、壁に懸けた簑と笠がゆらめいたと思ふと、近く聞へて居た告天子の聲が、遠く、遠く、微かになつて了つた。（おはり）

季節 惣菜料理

霞袖女史

日本の家庭では倘だ十が八九までは、惣菜とし云へば肉類が無い譯ではないが、先づ重なるものは野菜や乾物類が巾を利かして居る、然るに當今多く學校や講習會などで傳習する所のお料理なるものを見ると大抵は客膳に上すべき様な割烹を教へらる〻のであるから、兎角學校出の女子が家庭の人となつてからの評判が甚だ好ましく無い、で、まづ此所には普通一般の家庭で季節柄、如何なる材料を採り來つて口に適ふやうに調理すべきかと云ふ事を少しく左に御披露しやう。

▽小松菜の鶯あへ　まづ根を切落して枯葉を去り、よく洗ひてゆでべし、若しゆで過ぐれば其の色赤くなるのみならず、頗る風味を損ふものなれば、莖の軟かになりたるを度として水に放し、全く冷えきるまで幾度も水を取換へ、そして之を絞り上げ、小口とり約そ一二分位に刻みたる後、兩手に握りて堅く絞り、擂鉢に入れて擂るなり、その時もみやう荒ければ筋が擂り切れずして、よく味噌と混じらざる恐れあり、そして菜の細かに擂り潰れたるを見斗らひ、前以て作り置きたる胡麻味噌にてあへるなり。

▽たゝき牛蒡　まづ牛蒡の薄皮を去り、約そ二寸位の長さに切り、太きものは竪に二ッに割り、又は四ッ割となすべし。それより一夜白水に浸け置き、翌朝之を取上げて能く洗ひ、水氣を去り、煮立たせある鍋に投れ、およそ四五回位煮かへるを度として笊に揚げ、湯を切り、胡麻醤油の中へ入れ、成るべく染み込むやうに幾度か打返し、暫らく蓋をなし置くべし、斯くすれば天然の香氣を失はず、はり〳〵と歯切れよく風味も亦格別なり、但しゆで、、あげたる後俎の上に載せ、擂木の類にて餘り砕けざるやう徐ろに打砕き置く事を忘るべからず。

▽蛤蜊の杉田煮　大蛤蜊を鹽、、むきとし、貝の汁は別の器に取置き、玉子を割りて能く攪き拌せたるを、剝身と共に小鍋にて焙り、玉子煮の如くし、さて此の中へ前の貝汁へ食鹽少し混せたるを入れ、そして再びザット煮上げるなり、之に千切柚子を口とし、器に盛りて、さて蓋の糸底へ梅花の一二輪も置きて差出せば妙なり。

▽京菜のはり〳〵　この菜は所に依り水菜とも稱す、これは鹽漬、ひたしもの、または油揚などゝ共に煮て食する事は既に多く世間に知られたる調理法なれども、はり〳〵の作り方は餘り廣く知られて居ないやうに思はれる、そこで其の作方は、まづ京菜の株を解して塵や枯葉を除き、よく水にて洗ひ、約そ一寸位の長さに切り、笊に上げて水氣を切り置き、更に鰹の煮汁を十分に拵へ、程よく醤油を砂糖にて味を付け、成るべく薄鍋の如き煮えたち易き鍋にて煮立て、一同が食膳に向ふ頃を見斗らひ、煮立ちたる鍋へ前の京菜を入れて一寸蓋をなし、その煮立つを待つて蓋を去り、一二度煮返へるを度とし、網杓子にて掬ひあげ、椀に盛りて出すなり。

▽大根のふくら煮　太き大根の薄皮を剝き、およそ三四分位の厚さに輪切となし、更に大鍋の底一面に、だし昆布を敷きつめ、その上に大豆を少しく加へ、煮汁には鰹節よりも煎鰯、または鯡か鹽鮭の類を用ゐ、その上に前の輪切大根を一杯に投れ、餘り強火


松旭

で無く、去りとてぬる火でも無く、その中間の火力に永く煮詰め、若し汁の煮詰りたる時は更に汁を補し、およそ三四時間も續いて煮たる上にて、程よく味を付けて食するなり。

▽根三葉のきんぴら　これは單に根三葉ばかりに限るのでは無く、芹の根も同樣であるが、一体是等の根は動もすれば塵芥箱の中に葬り去らるゝ事を往々目撃する、併しそれは物の冥利といふものを知らないと云ふもので、今日の語で言つたならば廢物利用とでも言はうか、廢物と云へば是等は廢物のやうなものゝ、一方から云へば廢物では無い、その廢物でも無いものを無暗に捨るといふは不經濟この上も無い抔と鹿爪らしく云はずとも、チヨット料理の仕方で美味く食られるとすれば、それを打つちやるのは惜いでは無いか、即ち彼の鬚のやうな三葉や芹の根を取りて能く洗ひ、屑を去り、約そ一寸程の長さに切り、胡麻の油にていため、鰹のだしにて煮、少し鹽ツぽい加減に味を付ける時は、啻に香氣高きのみならず、惣菜の珍として賞するに足るものなり。

▽蒟蒻の狸煮　市中にて賣る蒟蒻に粉蒟蒻と玉蒟蒻と稱する二種あり、人々に依りて好嫌はあるものゝ、實は粉蒟蒻よりは玉蒟蒻の方が味が良い、まづそれは何方にしても、彼の板のやうに平らなる蒟蒻を、人數に依りて多少はあるが、それは其の時の見斗らひとして、先づ買ひたる蒟蒻を鍋に投れて約そ三十分間ぐらゐ湯煮をなし、俎の上に取出し、杉箸およそ十膳位を右の手に握り、之を以て蒟蒻の全面を蜂の巣の如く兩面より突付きて小穴を穿け、更に少量の胡麻油を鍋に入れ、煮立てゝ泡の消えたる頃を見斗らひ、前の蒟蒻を一端より指頭にて、凡そ一口位の大きさに千切りていりつけ、約そ十分乃至十五分間程熬りて、それより少し水を注し、鰹節を投れ、十分間位の後、醬油と砂糖とを加へ、よく味の付きたる頃鍋を下すものとす、斯くして煮たる蒟蒻は、小穴より能く味の染込み居れば、他の調理法の如く容易に味の去る憂なく、風味殊に美なり。



【上】

世の中はつねにもがもな渚漕ぐ海士の小舟の綱手かなしも

春風に闇にも梅は誇るらし、得ならぬかをり洩れ來るに、今しも歌に心を寄せたる一人の朝臣、短冊に筆の運びをとゞめて、思はず頭をもたげたまへば、家臣比企の三郎障子物靜かに開きて入り來り『只今右大臣の君に急ぎ申入れたき事の候ふとて、長沼左衛門參つて候ふ、夜もはや更け候ふに、御側の義如何取計ひ申すべき、何さま思ひ入つたる態にも見え候ふほどに、追返すも本意なく御取次申して候ふ』と申上ぐるに、右大臣實朝は、先つ頃鎌倉に遷し奉れる鶴岡八幡宮へ、明日は拜賀の式を執行ひたまはんとて、とり〴〵御準備の折から、庭に春の趣を添えたる花一枝、我宿の八重の紅梅咲きにけり、訪ひ來る人は、訪ひ來る人はと詠みさし玉ひて『ナニ左衛門が參つたとか、時も時、急用とは心もとなし、いや何にもせよ苦しからねば

早くこれへと申せ」、三郎は「かしこまり奉ると」平伏して退き、頓て左衛門は御側近く召出され、如何にしけん御顔を見るとひとしく、袖に涙の堰きあえず、「右大臣の君にはもはや御運の末になり玉ふぞ、御痛はしう存じ奉る」と、思はず聲を揚ぐれば、實朝はいぶかしげに見かへし玉ひて、「左衛門は未だ一言に及ばざるに、いかなれば斯る心なき事をいふぞ、明日は鶴ケ岡に武運の長久を祈らんと思ひつるに、さる不吉の言葉其意を得ずと物やはらかに云ひ出でたまへば、左衛門はフト心付きてこれは、恐れ入り候ふ、あまり心の打騒ぎ候ふまゝに何事をも申上げねば、さやうに思召したまふもことはりに候ふ、今日圖らずも二位殿よりのお召により、いそぎ駈付候ひしに、よくこそ參りたれ、左衛門ならでは賴むべきものもなしとのたまひ、此度の事いふもつらし、いはねもつらき事の起りたり、たゞ何事も我心を汲みて、其の方よきに計ひくれよと仰せられ、さて賴家死去の後は義時が無謀の企」、實朝は聞きもあへず、「そはまたいはれなき事なり、北條家は我外戚なれば、何條さることのあるべき、必ずそれは他の見る目ならん、必ず思ひ僻めて人を疑ふものならず」と、心には悟れど知らぬ顔に粧ひ玉へば、左衛門はもしやと思ひて、「御名の事は二位殿の御口うつしに候ふ、無禮は平に許し玉はれ、かゝるも世の中に候ふ、御心靜かに御耳を假したまはり候へ、故殿御存生の砌より淺からぬ御寵愛を蒙り、今は執權職として威勢並ぶものもなきに、義時の心には飽くことを知らず、實朝大樹の位にある間は、羽を伸すことも思ふにまかせず、何とかして實朝を亡きものにし、鎌倉へは京都より幼主を迎へ奉らんと、よからぬ計略に心を碎きしが、此のごろ賴家が忘れ形見の善哉を尋ね出し、公曉と名づけて鶴ケ岡の別當に居はせ、家臣横井木工介に內意を含めて、公曉を巧に說付けしに、公曉は何事をも知らで親の敵と覘ひ居るとか、されば鶴ケ岡の拜賀も心もとなし、大姫といひ賴家といひ、今また實朝にもしも不慮の事あらば、世にながらへて何樂みのあるべき、姉弟と骨肉は分けたれど、さとす言葉も理を

捨てしものには力及ばず、一人はわが子、由比ケ濱に引うつりてよりは、聞くとはなく鎧の音のより〳〵耳に入るに、今事を起さば實朝の身こそ危うけれ、命だに全うせば再び元の世に逢はん、一先づ何れへか身を避けさせよとのおほせごと、たゞ世の態は斯くと思したまひて、御思案の程御明したまはり候へ』と、涙と共に物語れば、實朝は既に覺悟を極めたまひけん、更に騒ぎたまふけしきもなく、『こは慨はしき事を聞くものかな、われも斯く思はぬにはあらねど、たゞ身をのみ全うして何かせん、されどわれ兎に角にならば、院の御庭に葎や生ひん、たゞ心にかゝるはこれのみなり、もはや人に弓を向けられては、わが德も拾ふ所はなし、難を聞いて遁れんは武將たるものゝ本意にあらず、もし公曉に討るゝものならば討たれもせん實朝もはや覺悟いたしたり、母君に御心易く思し召さるゝやう申上げよ、たゞ此の上は御所にまで弓を引きたてまつらぬやう、北條家へ御心添へねがひ上げたし、今宵はもはや丑の刻にもなりつらん、鶴ケ岡拜賀に間もなければ早く歸りてこの趣母君へ申上げよ』と、既に御座を立ちたまふけしきに、『そは御尤なる仰せには候へども、かくては二位殿の御苦心も水の泡に候ふ、世に月花の里も廣う候へば、せめてはそれを御慰みに、何れへか御身の難を避け玉へ、さて恐れ入つたる儀には候へども、御形見として御裝束を賜り候へ、必ず御名を汚す事候ふまじ』と云ふに、實朝はしばし頭を垂れたまひしが、落つる涙を拂ひたまひて、さらば我に代りて命を捨てんとか、その心の嬉しさは永劫忘るまじ、されど歎きを避けて歎きを見ること、同じ歎きの數には洩れず、必ずさる事は思ひとまるべし』左衛門は堪えかねてや聲を顫はし、『そはいはれなきことを仰せられ候ふものかな、斯くて君の世にながらへ玉ふことを知らねば、おのづから北條家も心ゆるやかになり、今日の歎きを夢と見玉ふ時も候はん、たゞ何事も皇國の上を思し召たまひ、何れ亂るゝ世の中に、しのびて御所の御力ともなりたまはれ、左衛門も右大臣となりて相果てなば、死後に思ひ殘さぬ面目に候ふ』、折

しも由比ヶ濱邊の松風浪にむせびて、友呼ぶ千鳥の聲もあはれや、

獨り臥す草の枕の露のうへよ
　知らぬ野原の月を見るかな

（中）

建保七年正月二十七日、長沼左衛門は實朝の裝束身に着けて、ゆゝしくも由比ヶ濱の館を立出づる、心のうちこそあはれなれ、左衛門が鶴ヶ岡の參拜とは知らねば、御劍の役うけたまはりし北條義時、かねて此時を外さずと匠みし事とて、まだ參殿もせざる程より病と詐り、御劍を中原仲業に讓りて退出しければ、夜はまだ明けやらぬ輿のうちに誰怪むものもなく、やがて二の鳥居にもなりければ輿をおろし、仲業一人隨へて社の階段近く進むに、風哀しげにふりたる松の梢にわたり、灯影曉闇に物淋しくきらめきて、こゝには右大臣を待設けたる影もなく、轡の音森を傳うて幽かに音きぬ、時しも右の欄檻のあたりより、劍閃めきしと見し間に、「公曉たゞ今父の仇を討ちとつたり」と、物凄く呼はる聲の聞ゆるに、こは大事こそ起りたれと鳥居を離れて扣へし兵士等が、俄にどよめき騷ぐ中に、いたはしや踏みもならはぬ跣足にて、見え隱れに跡つけ玉ひし實朝は、左衛門はゝや相果たりと覺えたり、いと惜き事をしたりと、泪ながらに立まざりて、手さぐりする暗まぎれに左衛門の首を拾ひ、何處ともなく落ちて行く、

實朝は都に上りてせん術のありと、星月夜と謠ひし鎌倉山を跡に見、かはる姿に身も輕く、思はぬ旅に出でたまふ、まだ肌寒き春の空、道連れにせん蝶も雲雀も野には舞はず匂ひこぼるゝ梅が枝に、殘んの月を遠山の雲とまがへて、長閑に霞たつ日のみぞ、しばし世の浪風の荒きを忘れ、宿の名殘の數を重ねて都に着き、二條の片ほとりに庵を搆へ、うつりゆく世を眺めたまふ。

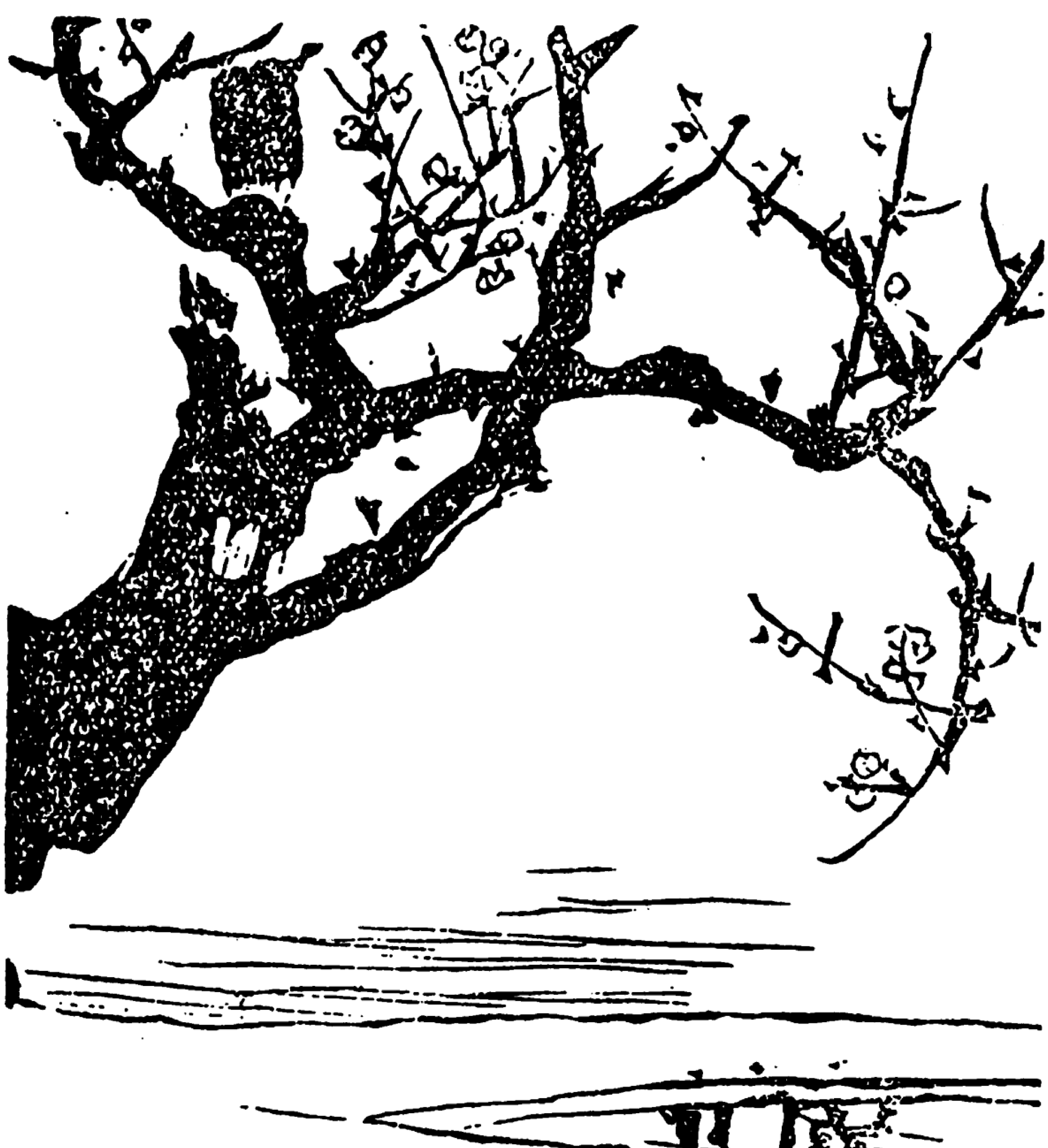
かゝるほどに公曉はゝや北條の手に討たれ、鎌倉には、九條關白の嫡子にて二歳にならせらるゝ若君頼經を召し下したるに、まだ襁褓の中に何事も辨へ玉はねば、義時は心のまゝに振舞ひける、さるほどに後鳥羽院には、王威の衰へゆくを慨かせたまひ、いかにもして北條家を滅さんものと、しばしだに御心易く思し召したまふことなく、院中に諸國の武士を召寄せ給ふ折から、北條の家人仁科盛遠二人の子を召連れ、熊野詣の道すがら、後鳥羽院の行幸したまふに遭ひ、召出されて西面の武士に、取立て給ふに、盛遠も流石に武士の本意とや思ひけん、其のまゝ止りて忠勤を盡しけるを、關東方には深く怒りて、院の御思召に反き奉り、盛遠が所領を沒収し、義時の我意募りゆくに、院は御怒りに堪へかね玉ひて、いよ／＼北條を攻め滅さんと仰せ出されたまふ、新院の帝もおなじ御心にはおはしませど、時の至らぬ事を慮りたまひて、さま／＼にとゞめたてまつり、右大臣藤原公繼、權中納言光親の兩卿も、御言葉添えたてまつり、切りに時の不利を唱へて、諫めたてまつりしかども用ひさせたまはず、城南寺の流鏑子に事よせたまひ、五畿七道の兵を召し玉ふほどに、御謀略早くも三村義村より洩れければ、思ひきや關東には二位殿の指圖にて、義時泰時を始め、相模守時房、武藏守足利義氏、式部丞朝時、武田信義、小笠原長淸など名たゝる勇士に采配採らせ、十八萬騎ばかりにて攻め上るに、かねて猛く見えしものも、多くはあわたゞしげに逃げまどふのみにて、賴もしげもなく色を失ひける有樣に、箱根足柄宇治瀨田と、各所の御軍にも敗れをとり玉ひ、今北條が無道の手にとらはれ玉ひて、遠からず隱岐の小島へ流され玉はんと、都はことに騒ぎたてゝうはさしける、斯くと聞きし實朝は 腸を斷るゝばかり、都に上りし時に思ひ定めし事も、世を忍ぶ身の徒らに月日とゝもに流れて、今は如何とも詮術なく、せめては隱岐の島に隨ひたてまつり、徒然なる朝夕を慰めたてまつらん、さなり／＼と心にうなづきたまひて、龜山越に鳳輦を待迎え 奉りぬ。

承久三年七月十三日といふに、御いたはしや後鳥羽院は、さらでも堪難き殘んの暑さに、網代車のあやしげなるに召させ玉ひ、道の警固に御心を閉ぢさせられ、凉しき蔭のなき世なりと思したまひて、やう〳〵松江わたりに着き玉ひぬ、見かへれば都は何處、たゞしら雲のたちふさがりて、いつ九重の宮居に過ぎにし跡をとはん、猶遥かなる浪路を凌ぎたまひて、櫻の雫に幾夜寢ざめの御心地、この世のおなじ御身とも思へず、

（下）

山は裂け海はあせなん
世なりとも君に二ごころ
我があらめやも

實朝は遥々院の御行衛慕ひまつり、二十日ばかり後れて隠岐の島に着き、磯の苫屋に身を忍びたまひて、けふはしたしく龍顔を拜したてまつらん、明日は昔を物語らん、建保の春の御歌合せも思ひ出されて、いともお



ん懐しく思ひたまへど、守衛の武士に心を隔てられ、容易くは行在所に近付れず、いかにせばよからんと思ひを焦して、やう〳〵一策をめぐらし、釣垂るゝさまに竿を肩に掛て、行在所の邊を行きかへりに、朗詠集を節おもしろく吟じたまふ、果せるかな、院は早く御耳にとめさせられ、いと床しくも思したまひ侍從土屋時義を御側近く召してあれを聞かずや、文時が夏の池水の詩、涼しげに吟ずる聲のするが、定めて都の者ならん、早く呼びかへして朕が徒然を慰ませよ、』程なく實朝は時義に伴はれて、絶えて久しき御謁見つかまつりぬ、院は一目見そなはし玉ひて、『卿は鎌倉右大臣ならずや、變る所にて巡遇ふものかな、さても鶴ヶ岡拜賀の噂ありし砌、如何にしけん首のみ見えじと聞き及びしが、かゝる健かなる姿の世にあらんとは、さるにてもいかなればかゝる所には流れ來しぞ、』



實朝は懷舊の涙にかきくれて、暫しは言葉も出でざりしが、「こは有難き御言葉に候ふ、實朝由比ケ濱に候ひし時、家臣の勸めに任せ、蘆分小舟障り多き世にあらんよりはと、しばし身を都の片隅に避け候ひしが、はからずも御いたはしき便りを洩れうけたまはり候ふまゝに、御跡慕はしく此まで參つて候ふ、何事も夢と消えゆく世の中に候へば、御心長閑に持たせ玉へ」、院は龍顏麗はしく笑ませたまひて、「よくも云ひたり、世を味氣なきものと思へばこそ人もをし人もうらめし、世を思はねば物思ひもなし、怨みなば限りもあらじ、思へば思ひはつきじ、卿と共にあらん限りは、何を心に滿たぬ事のあるべき、馴れては海の眺めも潤し、うす紫の遠つ島山、遠く都は隔てたれど、春來れば花も咲き、秋來れば雁も落ちん、世はかくてこそ心安けれ」とのたまふ、

實朝は顰めし眉とゝもに心も開けて、「げにも宣ふ如くに候ふ、甲斐なき身にて左近衛大將をうけたまはりし時より、たゞ今の御言葉如何ばかりか嬉しう覺え候ふ」

霞に波の色をやどし、浪に霞の影をうかべて、世はあら玉の春となりぬ、鶴は長閑なる空に舞ひ、鶯は軒端の梅にうたひて、山に添ふ水の色よく、水に添ふ山の色よし、實朝は裳裾を高くからげ、箒を執りて庭に一刷毛、けさ見れば山もかすみて久方の、あまの原より春は來にけり、あまの原より春は來にけりと、うたひながらに仕丁の業を勤め、ひとり興に入りたまふ、御鳥羽院も御椽の端に立出給ひて、實朝を呼び近づけたまひ、「指折れば今日は正月元日に當れば、眼に入る景色に箸を加へて、年始を祝ふ酒酌まん、春は幾度か迎えたれど、今年ばかり心伸びやかなるはあらじ、都の事も今は思ひ殘さず」とのたまひて、御手づから御觴を下したまふ。

實朝はうや〳〵しくおしいたゞき、「かゝる時にもむかしの例を思ひ出でたまひて、いとありがたく覺え

さふらふ、そもこの島に宮仕へ候ひしより、浅からぬ君の御寵愛を蒙り、久しく音に出でざりし歌さへ、今は十首ばかり詠出でゝ候ふ、まことに宣ふごとく、世はかゝる所こそ住みよかるべく候ふ、君聞し召せ、心なき山も笑ひ、心なき海も歌ひ、磯打つ浪の皺、松吹く風のしらべ、皆大君の萬歳を祝ひまつりて候ふ、むかし涙を添えてうけたまはりし、隠岐の小島に我ありと、歎きし人の心こそ、今はなか〳〵つれなく思はれて候ふ』、

何楽ませたまふこともなき離れ島に、などか都なつかしくおぼしめさぬ、おん心おしはかりたてまつりて御いたはしう涙催ほさるゝを、宣ふまゝに笑ひ興じたまひて、大御心を慰めたてまつるに、院は斜ならず喜ばせたまひて、實にもさる事なり、されど山にも海にもかへがたき眺めは、卿が忠義の心ぞ、空しくよせてはかへす浪に齢を刻まれ、此島蔭に味氣なく世を終るべきを、思ひ設けぬ空にはる〳〵たづね來りて、憂は昔の夢ばかり、島守となりて經ちし月日もはや五月、一目の中に月雪花と眺め過して、樂しかりし日ぞ多かり、落葉を誘ふ夜半の時雨も、男鹿なく夜半の寝覺も、あはれを語る人あれば、あはれにも思ひ惱まず、待ち侘びし都のたよりも、眺め暮せし船の帆影も、今は絶えてなかれとぞ思ふ』と、笑ましげに宣ふに、實朝はいとゞ感涙に咽びたまひて、『御言葉身に餘りて候ふ、實朝鎌倉に候ひし時は、小松殿より後に例なき、左近衛の大將を拜し奉りしも、權威はいたづらに北條の手に奪はれ、鴻恩の萬一だにも酬ひたてまつらず、かゝる事にならせ玉ふことの甲斐なさに、日夜心を痛め候ひしに、露の命ながらへし本意も屆きて、萬世かけて得がたき御言葉、返し奉る言葉もなく候ふ』、院は再び御觴を手にとり玉ひて、さることをな云ひそ思はず忘れし涙も誘はるゝ』と、御庭の方に見かへり玉ふ、檐端に生ふる千歳の松の、浪の千里に綠うつして、大御心の春ぞめでたし。

良人に嫌はるゝ妻

文學士　久保田哲也

緣あつて互に一緒になり、百年の苦樂を偕にしやうと契つなものであれば、夫妻の間に好くの好かれぬのと云ふ衝突の起る筈は無いのであるが、兎に角人といふものは男女に關はらず感情の動物で、殊に女子は感情の強いものである所から、僅かな事でも感情から割出して、自分では左程の事と思はないやうな事でも、動もすれ良人の機嫌を損する事があるければも一向當の御本人は氣付かないで其を度々せらるゝ、そこで其が度重なると共に倍々良人の感情を害して、ツイ一心同體とも云はるべき夫妻の間柄が水臭くなる事が尠なく無い、イデや左に其の實例の一二を掲げて時後の符に進せやう。

予が是まで實驗せし事、又は見聞した所で、世間で良人の位置にあるものが、重に如何なる點に於て前陳のやうな塲合に撞着するかと云ふに、

第一は實家を自慢する妻

で、この位良人として不快千萬に堪へぬ事はない、例へば、實家では毎時も斯ういふ美味ものを食べるとか、奉公人は何人々々召使つて居るとか、何處其處に別莊があつて、夏の避暑には何處、冬の避寒には彼處へ行くとか、實家の間數は幾つ〳〵で、藏は幾戸前あつて簞笥が何本、長持が幾竿、庭園には泉水もあれば四阿が何ケ所ある抔といふやうな事を、問はず語りに下女などを相手にして咄す、それも良人たる者が傍に居ない時でもあれば倘だ幾分恕すべき所が無いでもないが、良人の傍に居るにも拘はらず、滔々として辯じ去り辯じ來るほど不愉快な事のあるものでは無い、要するに之は其の妻女が實家の有福を吹聽して、而して下婢等から同情を買ふの手段に出づるのかも知れない、けれども傍で其を聞かせらるゝ良人の身としては堪へらるゝものでは無い假りに其は自家の下婢等に向つて云ふのであるから聞捨てにするとしても、斯ういふ妻君は時として來

客の前をも憚からず、喋々と實家方の事を、それも事實のみなれば尚だしもであるが、往々誇大に吹聽する、之を傍で聞かせらるゝ良人の身としては實に忍びらるゝもので無い、尤も斯ういふ事を饒舌る妻君の心事は、一面自分の價値を高めると同時に、他の半面に於ては良人の聲價をも高める考かも知れないが、實に其は大なる間違で、却つて暗々の裡に良人を他人の前で侮辱するのであつて、この位妾として良人の不快を醸すものは無いのである。



安藝の嚴島
[illegible]

古い俚謡に、口開けば腸見ゆる田螺かなと云ふ句がある、これは實に能く前來の如き妻君を形容し得て妙なりと云ふべきのみならず、箔を附けやうとして却つて其の淺慮を表白するのであるから、女子たる者の最も愼しむべき第一の要件である。

第二　は常に鏡に親しむ妻

女子たる者が日日お化粧をするといふ事は昔から女子の身嗜みとさへ

言はれて居るのであつて、亂れ髪などをして居るのは決して賞むべき仕打では無いからお化粧も一通りは爲ねばならぬのであるが、併し其は毎朝の事であつて、朝から晩まで鏡臺に對つて頭髪を撫で付けたり、鬢を掻いたり、又は衣紋を繕つたり、或は帶を締直して見たり抔して、晝間の惣菜が如何であらうが、晩の副食物が無からうが有らうが、頓と其樣な事には頓着するでも無く、一切臺所の事などは下女任せにして置いて、たま〳〵下女が夫等の事に關して伺ひ出ると、謂ゆる權もホロロで蒼蠅と云はぬばかりの面地で突ッ樫どんな物の言ひやうをして、全で自分は家事經濟などゝいふ事には關からない、別言すれば、餘所から客にでも來て居るやうな態度を取つて居る。

去れば御自分は何か忙しい事でもあるのかと云ふに、汚れ物は一切押入の中へ突込んで置き、良人が外出するにも孔の開いた足袋を穿かせて出すにも拘はらず、御自身は朝から晩まで鏡臺と親んで居て、

昨今のやうな寒空に良人が終日外で働いて歸つて來たのに、御飯も副食物も冷たいものづくめと云ふやうな事をして、それで自分は一家の主婦たる者の務が濟んだやうに思つて居らるゝ者も尠なからぬのであるが、是等は一体お化粧どいふ事の本旨を取違へて居るのではあるまいか、前にも云へるが如く、お化粧は女子の身嗜みには相違ないけれども、朝から晩まで姿見に打向へよと云ふのでは無い、男子でも左樣だが、殊に女子たる者は、亂れ髪をしたり、顔面に墨でも附いて居つては、甚だ見苦しいのみならず、人に對するにも其では禮で無い、乃で朝は必ず一通りのお化粧をせねばならぬ、そして又來客の前へでも出るにはチヨツト姿見に對つて衣紋を正すと云ふ位な事は當然であるが、その他不斷家に居るに方り、家庭の事は其方除けにして置いて、無暗に臙脂や白粉の事のみに浮身を窶して居るやうでは、迚も家庭の和樂は偖置いて、家政の整理などいふ事は夢にも出來る筈のものでは無い。

第三は隱し立てをする妻

既に華燭の典を擧げて偕老同穴の契を結んだ以上は、身體こそ二つなれ、心は最早一つのものである、然も無ければ如何して一家を圓滿に保つて行く事が出來ませう、出來るもので無い、よく世間にある例だが、男子が外に隱妻を蓄へて置く所から、ツイ内を外にすると云ふやうな事になる、すると何時しか家庭内に風波が起ると云ふやうな工合で、古語にも、

隱れたるより顯はるゝは莫し

と云ふやうに、たとへ些細な事でも隱し立てをすると云ふ事があると、知らず〱其處へ猜疑と云ふやうな溝渠が出來るから、從つて夫妻の間が水臭くなつて來る、例へば、一ケ月の家賃が幾ら、米代が幾ら、衣資料が何程といふやうに明らかに帳面に記載されて居る物の外、時々見知らぬ半襟や襦袢の袖口が妻君の身邊に顯はるゝと云ふやうな事がある、是はホンの一例で、尤も大抵な男子は左樣いふ細かい所に目を吳れるものでは無いが、動もすれば何角に付けて良人の前に隱し立てをする妻君がある、これは良人として甚だ氣まづく思ふ、去りながら開放主義が宜いからとて、詰らぬ井戸端會議や、隣りの猫や犬の喧嘩まで報告するには及ば無い、自ら其所には底がある、すべて家事萬端の事に就ては、休戚共に夫妻の兩肩に掛つて居るのであるから、左樣いふ事になつたならば、細となく大となく懇ろに咄もし、又相談にも及ぶべきものである、殊に最も忌むべきは、自己の家事を良人にも告げずして、却つて之を實家の兩親や、甚だしきに至りては近所合璧の者などに洩すものがある、實に奇怪千萬では無いか。

第四は學問を鼻に掛ける妻

明治の御代となりて女子敎育が勃興した爲に、津々浦々に至るまで最早眼に一丁字の無い抔といふ者の無くなつたと云ふ事は誠に慶ぶべき現象である、之に伴うて一の忌むべき暗流が常に到る處の家庭に橫溢して居るやうに考へる、即ち僅かばかり學校で學んだ學問を鼻に掛けて、無暗に漢語を遣つて見た

り、或は半熟のジヤパニース、イングリツシユを振廻したりする、それも內々の時ばかりなれば率知らず、人でも來れば餘計に其を振舞ふ妻君に往々接する事があるが、その度に予は嘔吐を催ふするのである、最も日本に飜譯せられた適當の語が無ければ致方が無いが、旣に夫々の譯語があるにも拘はらず、例へば、ナレツジの智識に於ける、テレフオンの電話に於けるが如く適當なる譯語のあるに、殊更に其を英語にて咄し、又漢語なれば儼然とか、强硬とか云ふやうな語を能く遣うが、それよりも女子は女子らしくきつぱりとか又は手强くとか云ふ風に話した方が優しく聞えるのに、是また態とらしく否物識りらしく漢語抔を交へ、對話をするのは實に聞苦しいものである、一体斯う云ふ婦人は學問の本旨を穿違つて居るのではあるまいか、もと〳〵學問といふものは家事を整理して行く爲の補助機關、設令ば、今日は何く々を幾ら買つて若干々々く拂つたと云ふ事を書記して後日の備考に供へ、月末に至りて之が精算をなし、

尙ほ前月の會計と對比して、今月は餘計に掛り過ぎたとか、又は掛らなかつたとか云ふ事を知り、而して翌月は斯う爲ねばならぬと云ふやうな事を知るとか、又は他人と文通する爲とか云ふ用事を充さんが爲に學んだもので、何も平生人と對話するにまで遣はねばならぬと云ふものでは無い。

右に擧げたやうな性癖のある妻は、到底妻としての資格が無いものであるから、從つて良人を助けて內政を處理するの能力を缺いて居る、之を要するに、斯の如き婦人は且らく一家の內に異性の男子と同棲すると云ふ迄で、眞の家庭を成して居るものとは云へない、從つて何時しか良人との愛も冷却して、遂には破鏡の嘆に遭遇するの實例は決して尠なく無い故に人の妻たらん者は深く省みて自ら誡愼せねばならぬのである。

茶と生花

利休流家元　黒澤宗月

關守の茶の湯

金森宗和曰く、葉茶壺をクヾリの際にころばして置くことありと、

右クヾリの際に壺を置くに、客人習ありと云ふ、クヾリをあけて壺ある時、主人を呼出して壺を床へなほし玉へ、それまで座敷へ入るべからずと云ひて、クヾリ戸をたつ、或は貴人の亭主あらば小姓を呼ひて云ふべし、必ず床へ直させて座敷へ入りてよし、亭主直させずしては右の置どころ徒事なり、此の如く置きては、必ず亭主も控に居るものなり、これは秘傳とあり、橋本久甫といふ人、此の如く壺をくヾる際に、傳授する客人手水に出でし間にくゞり、興中の鴨居に舟を釣つて、花を入れて置かれしも、亭主を呼出して最前の如く床へ直させ、座敷へ入るものなりと云ふ、右の二葉を關守の茶の湯と名づく、されど宗和は關守と云はずして、大事秘傳といひしも、後世この二葉を關守といひ傳へたり。

クヾリの口に壺を置くこと理に叶はず、萬一これあるとも、提持ちて床の前疊に置いて、亭主出でたる時、入口に通り難き故壺を置直し、床へ上げ玉へと云ひて直させてよし、これ利休流の意なり、利休居士座敷にて茶を取出す折柄客來り、クヾリの際に壺ありて通りにくき故、床へ直させて、其客座中へ入ることなどありと、宗旦の云はれしを聞觸れて、之を習と云ふ、剰へ大事秘傳と云ふとは見えたり、殊更クヾリの舟を釣りて、關守の茶の湯など云ふことあり、亭主は客人の機嫌よきやうにし、客は亭主の仕よきやうにするを、茶の湯の第一義にして、然るに理もなきことをして悦ぶは、不遠慮とも下手とも云ふべし。

或人曰く、荒木道粉といふ破家者茶の湯して、利休居士、薩摩屋宗仁などを振舞し時、シトと云ふ女房を床の間の正面に飾りて置きしが、利休クヾリを

明けて座敷に入らんとするに、女房の居るを見て、床の品はかねて見知りの品故、勝手へ引取り玉はずば座敷に入るまじと高聲に云ふ、然るに薩摩屋宗仁脇よりクヾリの中を暫らく見る、利休曰く見ぬものなりと、宗仁かやうの名物重ねて見る事あるまじとなり、此の如き物語ありて、若し聞觸れて茶壷も右の通りか。

利休居士曰く、茶の湯には我秘義せし道具は何によらず床に置きても見するは、客人へ馳走の心なり、これによつて道粉床に女房を置きしが、言語に絶えし不作法の事なり。

花道の心得

古昔は生花の道なく、随つて生花に定式なるものあらざるなり、されど生花の事起りてより、それぞれ花形の工夫あり、一家一流をなし、一流一法を定むるに至りて、花道多岐なるが如しと雖も、花道の本旨は山水に添ふおのづからなる姿をあらはし、草木萬花その出生に順ひ、自然にそむかざるにあり。

東山義政公の頃より新道世に行はれ、あらゆる儀式にて之を用うるに至り、今は女藝中缺くべからざるものとなれり、さて初心のもの扱ふには、花器もたゞ奇麗にをとなしきを用ひて、花も怪しからざるを撰びて挿すべし、珍らしく怪しき品を種々にあやどるは、花道の本意を失ひ、小兒の戯れに等しく、至つて俗情なり、又あまりにひねり過ぎたる、或は模様多きは素人好みにて、雅趣の意に背けり、つとめてやはらかなる風情をとるべし、しかし催しの折にふれては、珍花珍器、さびたる趣向も可ならんか、師を選み、稽古の功を積みて、花形心のまゝならんには此上の樂み、いかでか他に求むべき。

或時豊太閤秀吉武中某の茅舎にて、何にては花はなきか、利休花せよとありければ、利休はかしこまり奉ると、折ふしあたりの田甫に咲ける冬瓜の花を切取り、古き鐙のありけるを入船となし、彼の瓜の蔓を床線まで生さけたりしに、甚うるはしく出來たるにぞ、風情おもしろしとて、太閤斜めならず感賞

せられしとか。

又ある時金の水ぶねに水をたゝへて床に置かせ、紅梅一枝を添えて、利休花を〳〵とありしに、利休かしこみて、紅梅を手にし、水ぶねの上にて逆にし、さら〳〵としごき入るれば、開花と莟と打まじり、水面にうるはしく浮びたるより、風情尋常ならずと、太閤また今更の感にうたれしといふ、實に味ある話ならずや。

生花は四季陰陽の氣を以てすべし、花器の口に一文字を入るゝこと草木の根にして、水中は土中と見るべし、水際七寸を去りて陰陽を分つ、當時は花を二三種或は五種を挿せど、古代は一色を吉とせり、されどこは孰れにてもよし、自然の理を考へて作意あるべし。

花道は精一の元氣を以て、千萬無量の天倪を顯出する、無形の眞理を悟了せざれば、花に生萠の氣なし、花の活方は、眞は天地五行を象り、行は五倫五體をなし、草は陰陽體をあらはし、花と我と同體にして、萬法一如なる哲理として、利休居士此技術を後世に傳ふ、其草木と眞心精一にして、松に對する時は我乃ち松となり、梅に向へば我亦梅となり、杜若に向へば我その心になり、我と花とは同體なれば、終に天地自然千變萬化の形象を顯出するに至る、されば悟道の要術、衛生の心法として、須臾も缺くべからざるものとなれり、而して新派の風習陋俗に流れ、各異る所ありと雖も、其源は皆一なり、草木には國風なき故に、唯其心術を以て、天地自然の元氣を保つ時は、遂に精一の氣顯出して、氣韻風韻の奇趣は瓶中に躍如たらん。

水鳥の引くもかへるも跡絶えて
　されども道は忘れざりけり

花を見るは席のよろしきを第一とす、相容に先づ御覽候へと挨拶あるべきなり、相客お先へと一禮して床の間の器を隔てゝ座し、掛物を見、花を見、その風雅を賞賛し、花器等もよく注意して賞賛あるべく、珍花珍器は一しほ心を用ひて響むべし、風は花

を見るに風の縁もあれば、心安き朋友の前にても斟酌あるべきなり。

懸花釣花を見るには、席の様子にあり、立て腰をかゞめて見るべし、惣じて客は亭主に無禮なきやう注意し、主人は亭主ぶりとて客に對し、失禮なきやう心掛專一たるべし。

花に眞行草あるは、元來書道より出でたることにして、眞は座したる如く、行は歩むが如く、草は走るが如く、立花は篆字、置花は眞、砂鉢物は行、釣花を草といへども、生花は通じて眞行艸と形を區別して活くべし。

花形はすべて、ながしのつかひ方のみにて、いろ〳〵の形出來うるものなり。初心のうちは唯一つ形をよく生くことを思ふべし、上達の上は時に隨ひ機に應じて種々の象に入るゝなり、故に花道はながしのつかひ方を工夫し、花形の姿に入るゝを以て本意とす。

庭前の花を生花に用うべからず、據なき所望ある時は閑靜に挿すこと肝要なり、利休翁の庭に、朝がほさかりの節、秀吉公御望みにて成らせられしことありしに、圍の床、只一輪の牽牛花、葉をまじへて生置き、庭前の牽牛花葉をまじへて生置き、庭前の牽牛花は前夜、翌朝咲くべかりし莟を殘らず摘み取りしほどに、庭前に一花もなかりければ、太閤一方ならず賞賛したりしとぞ。

凡て生花は草木ともに、込の中にさして見るに、くづを入れて立たざる時は、その根をわりて兩方へ開かせて入るべし、込は槿の木をよしとす、花をさすところは、枝の俣になりたる所を用うるがよし、枝の俣なければ、其時の花に準じて、よき程にわりかけひらき、用うべし、込木は相應より少し細めにして、つよく持上ぐる位がよし、槿はねばくてよけれど、槿なき時はその代りに杉箸竹串などを用うるもよし、込木は成るべく固くし、只狹き花器は一文字に一本にても入るなり、込なしにさすもよし、込木は目立たぬやうありたし。

花を入るゝは山野に生出でたる心を以てし、無心にさして其色香のみを玩ぶにあらず、みだりに花を縛りて生け、種々に枝をため、形を强て屈曲ならしめんとする如きは、花道の本意を失して、造花の巧なるに等しく、花に勢ひあらざれば詮なし、木の强き、草の弱き、各其生を得るを賞すべきなり、

掛物の前に花を活ける時は、繪の人物鳥獸の面、又は落款等のかくれざるやうにすべし、又掛物にある草木、畵の色と同じ色の花を用うべからず、あるは萬花草木ともに花あるものを葉ばかり、葉あるものゝ花ばかりを入るゝことを嫌ふ、立花には用うることあれど、生花には好んで入るべからず、

又一説に夏水仙、曼珠沙花は苦しからずとあり、こは冬花なき時に葉を生くる故なり、夏水仙は葉を生じ、四月に枯れ、六七月の頃に花さく、本名金燈草といふ、曼珠沙花は九月に葉出でゝ、翌年四月に枯れ、秋のひがんに花さく時は葉なし、これ出生なり、故に假葉假花すべからず、

添物をさす時は、何によらず水際を高く入れ、添物のさし方は眞の木へ添へる草、莖見えて水際にてはひしと添へ、上にて木と草の體をきつと別るゝやうにすべし、さて眞の幹を添物にてからすこと、又眞の木にて添物の根の見えざるもあし、これを根〆といふ。

三越の新計畫

三越呉服店にて當年上半季間の新事業として、目下計畫中のものを月別すれば、大略左の通りにして、兒童博覽會に對ては、尙特種の珍らしき趣向ある筈なるが、差當り來月開會の雛人形陳列會には、東京及京都製の精巧なる各種の新雛類を陳列し、同時に參考として種々の古代雛及附屬品を蒐集し、來客の縱覽に供すと云ふ、

二月上旬より三月上旬まで　新古雛人形陳列會
四月上旬より兒童博覽會及第十七回　新柄陳列會。懸賞模樣陳列及び寄切賣出し
四月下旬より五月上旬まで　五月人形及甲冑陳列會
六月上旬より　中形浴衣地新柄陳列會

聲なき星

片山廣子

南より北吹きとほす大寺の
　ひろ間ひらきて書をよむかな
わらくづの散り浮びたるさゝれ水
　しをにの花の蔭をゆくかな
まむしゐる山田のあぜの草かると
　かりてすてたる姫百合の花
露しげき花野の虫は花蔭に
　御空の星と何かたるらむ
きくまゝに胸の思もやすまりて
　やみ夜あまねき雨の音かな
わか草の若かりし世の物思ひ
　思ひいづれば胸もゆるかな
心老い身はおとろへし今にして
　君にあはむやさしからずや
世にふれどあるかひもなし人の親の
　女を生むは罪にあらずや

のちの世は蝶ともならむ塵ともあれ
　物おもふ人と又はうまれじ
人しにていくさ勝ちけむ海の上も
　此秋風は吹きて來つらむ
散りて後花の行くべき國ならむ
　光やさしく小さなる星
花の上に露多きかな夜もすがら
　聲なき星の涙おちけむ
折りてこし野路の秋草みちの邊の
　ふる塚の上に手向けてぞ行く

　染井に詣でて
いかばかり人の涙のかゝるらむ
　染井の野邊は草靑きかな

人のまぎれ

あざみ

身にそはぬ譽それさへ苦しきを

あなわづらはし人のうらみの

人しれず人のまぎれに見おくりて
しづ心なきわがおもひかな

わがうれひしばし忘れて人の上に
涙をそゝぐ夕まぐれかな

けがさじよ神よりうけしこの心
わが身このまゝくちは果つとも

ことさらに愛ひある胸にひゞけとて
つくらむものか入相のかね

嬉しきや悲しきやとて昔わが
いなみし人のおもかげにたつ

煙の末

三河國に兄を殘して母に伴はれて、この里の溫泉場に來ゐたりける子の、病を得て遂にみまかりけるを、夕さり寺に詣でて、棺見るままに、母なる人の心を思ひやりつつ、

伊豆吉奈にて　荻原濱子

ふるさとに兄と別れてこの里に
母を殘していづら行く子ぞ

かりそめの旅と思ひしかど出での
また歸らずもなりにけるかな

瀧の水は狩野川とこそなりぬなれ
黃なる泉の果て知らぬかな

遠くとも猶來しかたは道あれど
歸るすべなしよもつひら坂

さて火葬にすとて、里人もて扱ふ、

山路をば見知らぬ人に送られて
かへらぬ旅にひとりゆくかな

立ちのぼる煙の末の雲に入りて
家のかどべに雨を降るらむ

讀者文藝

本月號に掲載せる讀者文藝に、入選したる人々へは本月十五日迄に賞金を送呈すべし、但し投書規定に記せる如く、たとひ入選せるも、この規定にそむきたる方へは賞金を呈せず、

新刊紹介

俗曲評釋　佐々醒雪氏著　忠文舍發行

▽第壹編　江戸長唄　▽第二編　箏　譜

俗曲を手あたり次第に編纂したるものは、其數に於て少からねど、未だ親切に評釋したるものは、西村天囚氏の閨怨あるを見るのみ、それすら分量極めて尠く、然も葉唄の佳作のみなれど、德川文學に精通し、俗曲に深き趣味をもてる著者が、あらゆる俗曲の評釋を企てられ、まづ此二書を世に公にせられたることは、斯道の爲大に歡迎せざるを得ざる事なり、著者の自序に曰く、『近世の俗曲は、よしや蕪雜ならんも、淺薄ならんも、我文藝史に異常の光彩を放ちたる德川期の文藝の一面を代表し、よく我等の祖先の歡迎するところとなりて、その趣味その思想に影響し來りしこと、前後三百餘年、今日も尚多數者の嗜好を繫ぐものなるを思へば、我等文藝史の研究を生命とするものゝ等閑視すべき所にあらざるべし、本篇の研究は、專らかゝる意義の上に立てり、徒らに章句の鎖末に拘りて、博覽旁搜をことゝするは、予が志にあらざるなり』と、以て著者の意嚮を知るべく、而も博覽旁搜の餘に成りたるを多とすべし、各編挿入せる清方氏の畫、裝釘の美に一段の麗を添ふ、定價各金六拾錢、(發行所東京々橋區南紺屋町)

東亞文藝　第一號　東亞文藝社發行

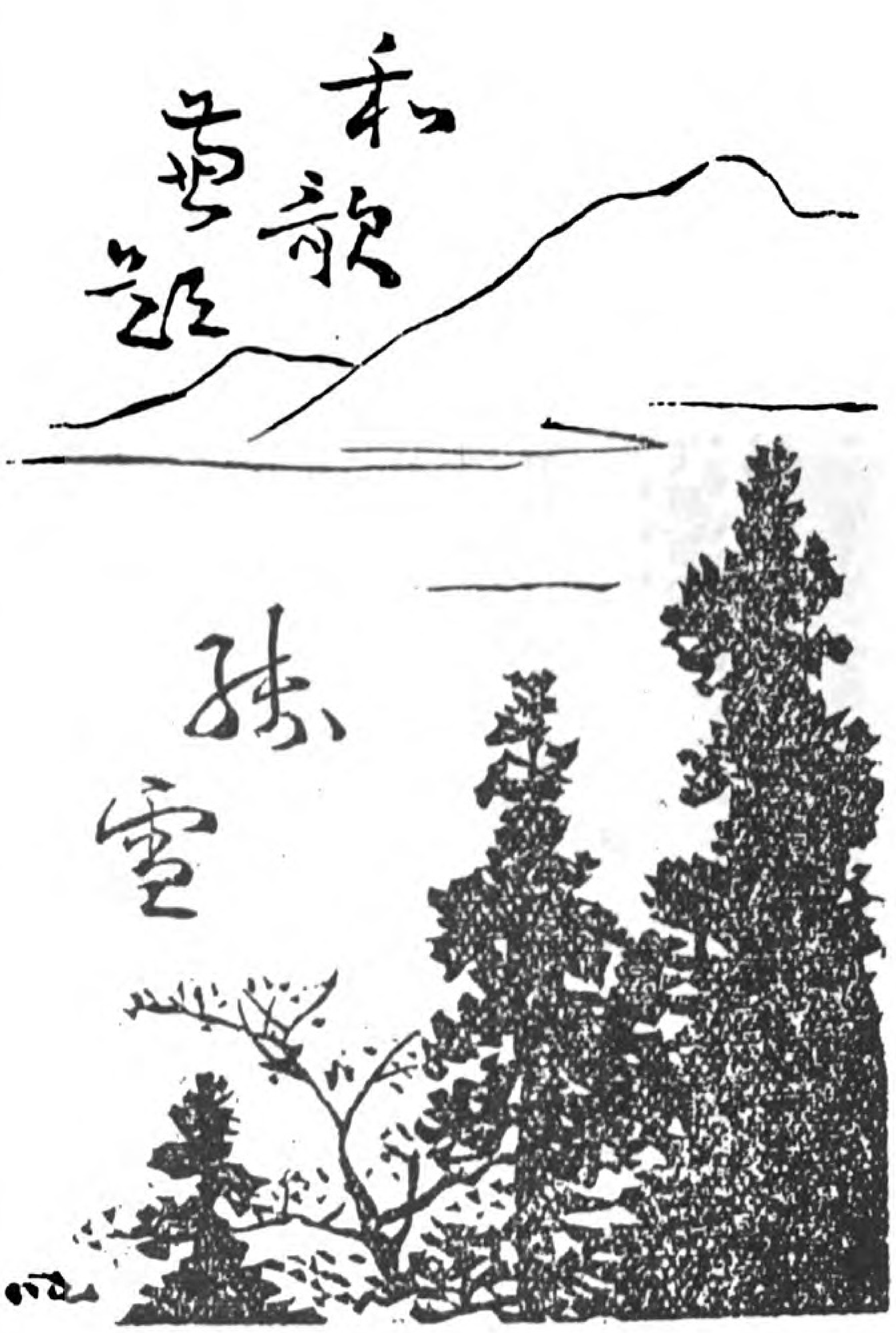
三面記者として有名なる澤田撫松氏主筆にて發行せるもの、文藝倶樂部、新小説と同じ形の雜誌なり、本號には長谷川時雨女史の小説流木、岡田八千代子女史の同龍田、澤田主筆の北海の偉人、幸田露伴氏の女房を褒めよ等、讀むべきもの少からず、健全に發達せんことを祈る、定價一冊貳十錢(發行所東京日本橋區蠣殼町一の四)

歌舞音曲　第三號 第一號　歌舞音曲會發行

半井、右田、幸堂の三大通が大車輛にて編輯し本年よりは大に體裁も改まりて、見るべきもの多くありたり、鄙事枕樂み話などはその標題既に氣障、內容推して知るべく、素岳子等の惡作を麗々しく掲載せる編者の氣が知れず、但しそれは玉に疵とも云ふべきものにて、歌舞音曲に遊ぶ人には唯一の好師友なるべし、定價拾五錢(發行所麴町區飯田町六の十八)

家庭新聞　第壹號　家庭新聞社發行

毎月二回發行にて、四六四倍十六頁の婦人新聞なるが、婦女新聞などに比しては體裁もよく整ひ、讀むべき記事多し、(發行所東京府荏原郡入新井村)



東京帝國大學講師　佐々木信綱先生選

天

いたづきの身を欄干にもたせつゝ
殘んの雪をあはれとぞ見る
東京麻布區新堀町　倉重千惠子

（評）病める人と殘れる雪との配合さり〳〵にあはれ深し

地

春きてもこぞの雪寒きわが庭は
とふ人もなくさびしく暮れぬ
岩代國伊達郡小手川村　岸野常子

（評）さびしき庭のあるじ、靜かに机にむかひて書など讀みいますらむとゆかし

人

峽中や雪間ながらに丘の梅
堤の柳笑みそめにけり
横須賀市深田七　柏原美奈子

（評）女の歌としてはやゝこち〳〵しき調とは思へど、新の着想なるをもて採りつ

秀逸

◎
春風もゆきなやむらむ遠山は
去年のまゝにも殘る白雪
美作　鈴木錢子

◎
春きても日あたり疎きわが宿は
雪さけやらで去年のまゝなる
岩代　岸野菊子

◎
星影のうすれて消えし曉の
里川堤雪そのこれる
飛騨　南　みれ子

◎
ほのかすむ遠山松にあしたつの
埼玉　横田やな子

麹ばかりも殘るゆきかな　東京　平塚白百合

◎椽の木のまばら細道枯木山
　こころまだらに雪のこりけり　秋田　長谷川蘭子

◎水仙のにほひつめたき庭さきの
　こころ〴〵に雪殘りけり　埼玉　橫田秋子

◎石文のたてる野中のわかれ道
　みぎにひだりに殘る雪かな　橫濱　鈴木まつ子

◎うら〳〵とかすみかゝれど島山の
　松のねもとにゆきぞ殘れる　須磨　有村紫芳

◎こころ〴〵ゆきものこれりわかいほの
　うらのさゝわら春あさうして　在清國　福田つる

◎あわ雪のむら消え殘る小柴山
　春日のどかに陽炎のぼる　東京　中村千代子

◎犬の子に踏みにじられて破垣の
　もとに殘れる去年のしら雪　名古屋　山根しげ子

きえ殘るせゝの雪間をあさりつゝ
　見いでゝうれしふきのとうかな　品川　紫子

◎のどけさに若なつみにさたち出でし
　岡の木かげに雪ぞのこれる　臺灣　浮洲德子

◎野梅さく小川堤のかたかげに
　むら消えのこる去年の白雪　東京　平塚いと子

◎殘雪や甲斐に炭買ふ追分の
　うたこゑ寒き峠道かな　佐賀　藤松りか

◎遠近のやまは緑にかすめども
　のこるみ雪はきえむともせず

甲

○富士の根にのこれる雪をふみくだきすゝろに聞きぬ神の御聲　越後　松永松葉子

○霞立つ昔しの春もしら雪の面影殘る古郷の山　磐城　木幡きよ子

○若菜摘む少女の群の行過ぎて下駄路殘るまばらの雪に　神戸　登興子

○　兵庫　古在敏子

わが畑にもえし芽生のこゝかしこ冬のかたみのゆきぞのこれる

○ 須磨 有村よし子

きえのこるゆきの深山はさむけれどのべはかすみてはるのどかなる

○ 東京 牧 千春

春あさみ吹く風寒うところ／＼菜植し畑に雪の殘れる

○ 須磨 有村繁子

伏いほのかきねのゆきはきえなくにのきばのうめにうぐひすうたふ

○ 兵庫 脇村岩子

春きてもなほ風さむく岡のべはまだらに白く雪ぞのこれる

○ 横須賀 渡邊北佐子

消え殘る淡雪散りて鶯のさゝなき寒き藪かげの道

○ 美濃 牧 幾美惠子

やせ馬のあしすべらせてゆく坂の殘れる雪に夕月のてる

○ 神戸 足立ゑい子

かげろふの野には燃れど山峯に結ぼほれつゝ殘るしら雪

○ 須磨 有村さみ子

をちこちにゆきものこれり山かげのいほのほそみちはるなほあさし

○ 下總 小澤まゆみ

海近き枯木山にはところ／＼まだらに雪の消えのこる哉

○ 遠江 須部たまき

湖越しに鐘の音さえて比良のねの殘んの雪の風の寒けさ

○ 神戸 足立あさ子

佐保姫のおしろい程やあし引の山ふところに殘るしら雪

○ 越後 松永榮子

春雨のいたづらならず降る野邊に殘りし雪も明日や消えなむ

○ 伯耆 錦織さち子

五十日病つかれし母のため日毎かよひぬ山かげの雪

○ 大阪 木村春江

朝日さす上枝の露やこぼれけむ根從の雪は梅が香ぞする

○ 伊豫 藤野政代

箱根山いりては出つる隧道の谷間／＼にのこるしら雪

○ 新潟 岩本芳子

殘雪やうす月のさして峠路は午すぎかたに雪崩するかな

○ 靜岡 渡邊 實

春の山つくしや下にいそぐらんかたみなのこすこぞの白雪

○ 神戸 波 子

賤が家の沓ぬぎ庭にこゝかしこまだ消えやらぬこぞの白雪

○ 近江 杉村玉野

いつしかも春はなかばとなりぬれどまだ消えやらぬみ山路の雪

乙

○ 東京 岡田千代子

吹きそふほどの雨のみはげしくて音しづかなる春のあは雪

○ 東京 岩谷淺子

鶯もさこそねぐらに待わびん雪のふるすを出かてにして

讀者文藝

○
消え殘る峰の白雪ながめつゝ里は小春の馬士のはな唄　筑後　藤好多喜子

○
こそならば消てあらなん春なれば花さも見まじ峯の白雪　兵庫　稲田早苗子

○
きえのころ雪をたづれて我せこがなやめる父のをもひ出にしる　陸前　菊地さみゑ

○
日向のまごはのごかになりぬれごむらきえのころ雪ぞ身にしむ　陸前　菊地みさを子

○
消え殘る雪をたづれて狩人のまさへる谷に鶯のなく　美濃　武田艷子

○
山影は日のめ通はぬ里にしてこぞのまゝなる雪の殘れる　神奈川　飯田白露子

○
咲きやらぬ花かさみえてめづらしく枯菜にのころゆきもありけり　和泉　稲原菫子

○
たび僧の宿さひて行く里の道人もかよはで白雪ぞある　相模　岩田春子

○
鶯の聲さへもるゝ庭の上もまだ消えやらぬ去年の雪かな　秋田　三浦しや子

○
眺めやる生駒の山の白雪はこぞのかたみさ心床しき　大阪　小谷きう

○
さゝはゝや椿もちるなるきのふけふ峯にのこんの雪見ゆるかな　東京　芦原浦子



貴族院議員 御歌所參候 子爵入江爲守先生選

天

をりをりの雨にみどりの色まして
生ひさき見ゆる野邊の若草　陸前　菊地とみゑ子

地

雪消えし末野にもゆる若草の　岩代國伊達郡小手川村　岸野菊子

いろなつかしき春は來にけり

人

消えやらぬ雪間もとめてうすくこく
はるをいろどる野邊の若草
兵庫縣武庫郡今津村　稻田早苗子

佳調

◎淡雪のきゆるないそぐ春日野や
日かげのどかにもゆる若草
在清國　稻田つる子

◎雪さけし柳の岡の若草に
糸より細きはるさめのふる
磐城　木幡きよ子

◎白雪はいつしか消えて賤が家の
庭のわか草もえ出にけり
神戸　脇本岩子

◎めも春にのべの若草もえ出て
のどかになりぬ野司の庭
岩代　岸野常子

◎墨田川つゝみの小草もえ出てゝ
かすみ初けりをつくばの山
臺灣　浮洲總子

◎ひばりなく聲ものどかに山里の
かすみにつゝく野邊の若草
美濃　牧さみ子

甲

○山里はまだ深からぬ春なるをうすみどりする野邊の若草
東京　倉田千惠子

○昨日まで雪に遊びし里川の堤は草となりにけるかな
大阪　木村春江子

○神の馬若くさ野邊に引出して長閑けく遊ぶ加茂の宮守
神戸　足立ゑい子

○若草をつみつゝ行けばしづが家のま垣の梅のかほりゆかしも
下總　小澤まゆみ子

○さえかへりゆきをいたゝくあさぢふのわかくさいまたみぢかかりけり。
須磨　有村むらさき子

○今朝みればさがのゝ春もしられけりみさりしたゝるわか草の上に
美雄子

○春雨のめぐみにあひて昨日今日野邊はみさりになりにけるかな
近江　杉村玉野

○むらきえの雪まもさめてゆかしくも萌みそめたる野べの若草
佐賀　藤松りか子

○もえ出づるうら若草のしとれにてひなつれ遊ぶ庭の鷄かな
名古屋　山根しげ子

○春きぬとしるべがほにも萌え出し色まだあさき野邊の若草
東京　牧千春子

○さえかへりゆきはふれども春なれやこけかさみゆる野邊のわかくさ
須磨　有村紫子

○しもよけはまだ殘れどもわがいほにもえし小草のなつかしきかな　横濱　鈴木まつ子

○ふせいほははるなほあさしあさぢはらまたわかくさはのびたゝづして　須磨　有村さみ子

○池水のこほりも今日はさけそめてきしべの小草もえ出にけり　陸前　菊地みさを子

○春雨の露のめぐみにいつしかさもえ出でそめしはるの若草　東京　平塚いさ子

○霞立つ野邊の若草美くしき歩みむ折りのしされさやせむ　越後　松永松葉子

○のどかなるはるさりくればおのづからもえいでにけりのべのわかくさ　須磨　有村ひろ子

乙

○霞たつ里川堤雨はれてみどりの小草萌え出にけり　飛驒　南みれ子

○霜なば煙りにかりて若草のもへこそいづれ野にも山にも　東京　岩谷淺子

○つく鞠の音ものどけき茅の家や垣の内外につゝく若草　東京　平塚白百合子

○背の根の春日匂ひて春日野はけぶりそめけり雪のしたくさ　大阪　小谷きう子

○白雪のふる野の小草もえいでゝけふ七くさをつむぞうれしき　品川　繁子

○もえいづるみどりの色の美しくゆめさながらの春の野の草　伯耆　錦織さち子

○山里はまだ白雪のつもれるにかすみ棚引く野邊のわか草　伊豫　藤野政代子

○春くれば垣根のよもぎひこはえて雀かくれさなりにける哉　和泉　稲原菫子

○紅うらの若き乙女子若草のもゆる野にたち遊ぶ朝かな　神奈川　飯田榮子

○こゝかしこ小牛あそべる若草の春あたゝかに風がほりふく　美濃　牧瀨美惠子

○乘る駒のむちたゆたへて挑山の春風かほる若草の道　美濃　武田艶子

○餘念なくつむ乙女子は驚きぬかざすりボンに蝶のたはむれ　相摸　岩田小春子

○氷ゐし野川の水のけぶるなり岸への草や萌出てにけん　新潟　岩本芳子

○あたゝかき汐がみ息の風わたる野よみかへせ野の若草よ　東京　玉川いし子

○まゝごさの末眠りてつきすえの若草したれ春の風ふく　越後　水野やすゑ子

○梓弓おして春雨降る野邊にもゆる若草美しき色　越後　松永繁子

○野邊見ればまだ深からぬ若草は春の光りに色めきにけり　神戸　神戸波子

○あさな〳〵まだ霜ふかきあれにはのまがきのもさにもゆる若草　東京　芦原浦子

○風さゆる朧月の空さもおぼほえずすゝしろすゝな野べに生けり　兵庫　古在敏子

○うない子の友よびかはし摘む芹のその香くはしき若草の小野　筑後　藤好多喜子

○うぐひすのこゑきくころぞはるぐさのもえいづのべはのどかなりけり　須磨　有村たもつ子

○あたゝかや庭の垣ねは春めきて下もえいそぐ千代のわか草　埼玉　横田秋子

○春もまた淺澤のべのわか草やけぶりみじかく下めくむらむ　埼玉　横田やな子

○浦風に若草萠ゆる春の日の蘂屋の庭に翁網すく　横須賀　渡邊比佐子

○若草の丘に上れば海見えて秋をかへす風心地よき　横須賀　柏原美奈子

○柴の戸もうき世めきけり若草の生ひたつ頃は人に訪はるゝ　神戸　足立あさ子

○野に出でゝなつかしきまゝ若草はつまでさひけり乳母がすみ家を　秋田　長谷川蕭子

○月落し枯野の草の萠え出て霞の袖はみどり染めけり　神戸　登與子

佐々木信綱先生選和歌兼題

◎三月　桃花◎四月　花下蝶◎五月　殘鶯◎六月　夏月◎七月　雨後蟬◎八月　午睡◎九月　女郎花◎十月　秋田家◎十一月　暮秋虫◎十二月　夜雪。

入江爲守先生選和歌兼題

◎三月　春曙◎四月　行路花◎五月　雨中新樹◎六月　疎屋の夕顔◎七月　百合◎八月　松下泉◎九月　秋色浮水◎十月　月前菊◎十一月　水上落葉◎十二月　船中千鳥。



日本女子大學教授文學士鹽井雨江先生選

文

除夜

東京牛込區左内坂町三七　平塚白百合子

ランプがホト〳〵と音をたてゝ、油がなくなつたのか、消え間際の青い火を吐いてゐる、百八つの鐘は今、村に慰安の神のみこゑのやう、しづかになりわたつてゐる。

ふとめざめたあや子は、おぼえずあたり見まはしたが、傍にねてゐる母親のしはぶきの音に、思はず、まだ母樣ねむらないの。

あゝ………今百八の鐘がなるねー。

と、ねむさうにもない返事。あや子はぢつと耳すま

せてゐたが、一つ二つ、あゝ、此の音の終つた時は、私はもう二十九の關をこして、私は三十といふ眞實のオールドミスのこゑをきかなければならないのか昨日まではまだ二十九だといつてゐたものゝ、たつた一つ上の三十といふと、急に五つも年を取つたやうに耳につくの、まして、容貌とてさしてよいといふ程でもない私、今更獨身の寂寞が身にしみじみと覺えられる。此の上、母様でもなくなつたらと思ふと、矢もたてもたまらず、ちつと目をつぶつて、しひてねむらうとあせつたが、あせればあせる程、神經が立つて來て、末の末まで一々手に取るやう。バッとあかるくなつたと見ると、忽ちランプは消えてしまつて、眞闇がりに、いろ〳〵の影がはしつてゆく。

四人のお子さんの母親とも見えない絹子さんが、ケバ〳〵しい二枚お召に、フロックの旦那様と並んでさげすみの眼をチラリと。と思ふと、女の顔だか男の顔だか、おぼろに幾つも出る。やつとはつきりした顔が出たと思ふと、髮を奇麗に分けた渡邊さんとか、もう立派な博士になつて、あの時財産もない醫學士ではと、私も母様もうなづかなかつたその人が、まあどうであらう、よい處よいところとよつてゐる中に、忽ち株で家屋敷をなくしてしまい、以前ゐた乳母の家をたよつて、私は小學教師、父様は此の田舍へ引うつる前日、腦充血で頓死。

後にのこつた私達の樣は、目もあてられなかつた。けれども、兄妹とてない私は、母をたすけて九年。今更初緣の人の處はとても、されば、といつて、繼子の幾人もある處へは、母があやぶんでゐるし、私はこのまゝたよる人もなく、冷めたい死の手に葬られるのかしらと、あや子は嘗ておぼえぬ孤獨の感にうたれて、知らず〳〵熱い涙が、頰をつたつて流れた。

（雨評）今一層情をこめて欲しい心地するが、着想も一寸面白く、筆も整ひ、薄命の婦人の愁ひ、うつし得たところもある。

地

山口縣阿武郡萩町
明倫高等小學校　なにがし

杉山先生にわかる

校長先生のあとに續いて教壇にあがられたのは、日

頭お慕ひする杉山先生、いつもながら沈着な体度でいらつしやる、又謙遜の御性質がしたゝる樣。あゝ校長先生のお話、杉山先生のお姿、双方を見聞きくらべては、一時に胸が迫られて、ぬぐへど〳〵止めどなき涙の、頰傳つて、袴に散る。（あへばわかれる）とは知らぬでもないが（別ればあふとはまだ聞いた事はない。先生にお別れして、又おあひする事が出來樣か。家に母なき私は、學校の母樣のよーにお慕ひ申して居たに、こゝ四五日で全くお顏もお姿も拜する事は出來なくなる。それにしても、今迄は春の夢の樣樂しくすごした。今は樂しい夢からさめた樣な心地）など、うつゝの樣にくり反して、皆樣が校長先生の祭禮の御注意にドッと笑はれたが、其の笑ひ聲は私の耳には無情に感せられた。告別式の終つて後、教室で先生としたしくお別れした。私等は皆机の上にうつ伏して泣いた。先生はいつこの教室を去られたのか、更に知る事が出來なかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

明治四十年十一月、忘れもしない廿五日の朝、家を出たのは九時半、大急ぎ學校に來て見れば、皆樣はいらつしやた後、荷物を置いて、學校をとびだして金谷に向ひて急いだ。（どうか間にあへばいゝがどーぞ）と氣は氣でない。心は金谷に行つて居る。近づけば皆樣は集つていらつしやる。胸はやう〳〵おちつく。一番丈の高い馬來さんが、こちらを向ひて笑顏していらつしやる。

（おゝ嬉しい、間にあつた、キット神樣のお助けだ）と思つてよみがへつた樣……暫くすると、先生をのせた馬車が走つて來た、馬車は止つた。私等は馬車を圍んだ。先生はやがて馬車からおおりになつた先生はおぐしが變つてゐた。つや〳〵しい事つたら……そして、私等が差し上げたお召し物、キチント召していらつしやつた。

みんなに御挨拶をなすつて、馬車はツーッと、アレといふまもなく、馬車は一歩々々遠ざかる。急にかなしくなる。

先生は吉田松陰先生のお跡をおつぎなさるのである私等は出世をよろこんで、お別れをかなしむ。（あゝ

も少し）と思ふまもなく、行きづめまで行つて、一寸止つて、ツイと角をまがつた。（あーそつけない）と思つて、私等二三人は恍惚として突つ立つて居た。またしても涙が……やがて歸校した。赤い帶で白いきもので、姉樣を送つたのも、あの金谷。私は永久永久に金谷を忘れる事は出來ない。いつぞや指月祉で遊んだ時、先生がそれ〳〵可愛い蔦の紅葉したのをとつて、紀念にするつておつしやつた、あの蔦の葉は、多分手荷物の詩集の間に、多くの歷史を物語つて居るだろー、思へば、あの蔦こそうらやましい、私等は佐保姫が舞ます頃から、つい十日前、絳雲のやうやく薄らぐ頃まで短い樣でまた長い樣、菊の花も造られ、ハンカチーフも縫ひ取られカツレツも調理が出來る樣になつたのは、容易の御心配ではない。あゝ、早くおたよりがほしい。夜風寒い此の頃、先生には道中でお風など召さねばいゝが……。

（雨評）筆は幼けれど、眞情のこもれるを愛す。

八

小曲二篇

刀根川原

下總佐原 小澤方 まゆみ子

永劫に東へ〳〵と、刀根の流れは靜かに流れて行く、蘆の葉がわびしいさうにさゝ鳴る。——丁度悲しい夕ぐれの歌でもさゝやくやうに——。

私は譯もなく熱さゝ北の空を仰いだ、枯蘆の果てに、うす紫の靄が、ぽつと立つてゐる。その奧に、筑波の山が夢のやうに浮んでゐる。

私の足元には、圓い河原石がころがつてゐる。私はふと思うた。——河原の石？現在の私の運命に似て居るではあるまいか、此利根の砂原にうづまつた儘時々鶺鴒のやうな小さな鳥の脚に踏まれて、夕風にさらされて、永劫に此處にうづもれてしまふ。——河波にさゝ波たてば、水沫さい影はあるものを、瀬の石はたゞ砂に埋れたまゝ、何も知らずに默つてゐる毎日現實の世に、目茶苦茶にたゞパンを得る外、世界の大勢も何も省るいとまもなく、かうして一生を終つてしまふ、あゝ、私は、河原の石だ。——

寒い河風が襟を吹く。――さびしい夕暮だ。

母　君！

夕月てる夕である。妾はまた、いつもの夕日が丘にたつた。どこからともなく、冷たい風が一陣、鬢のほつれをそよがせてゆく。

夕闇は次第にせまつてくる、妾は狂はしき思ひに亂れた胸を抱いたまゝ、枯草の上にたゞずんだ。譯もなく涙がちる。

『母様！母様．あなたはなぜ妾を一人殘して逝いておしまいになつたのです――』

孤兒！あゝ世にたよりなき孤兒です。――と思ふと、もうたまらなくなつてきて、其まゝ草にうつ伏したまゝ泣きに泣いた。

（雨評）情を今一層活かしてほしいが、小曲としては先づ見どころのある文である。

秀逸

◎春の晨　　東京　大崎結城女

朝ぎりがしつとりと、筑波の山は墨畫のやうに薄くぼかされて、柳の枝と枝との間から見ゆる町家は、まだ夢のなごりか、灯影が淡く、やるせなさうにほのめいて居る。ポツリポツリと、地平線の彼方から、白い帆船らしいものが、一つ二つあらはれて、だんだんと大きくなつて來る。まだ湖の面は、躍るべき魚の潑溂たる音もきこえぬ位。祥雲寺の鐘が、ごうんと餘韻ながくひく度に、ざわ／＼とそよぐ若蘆の影のすきまから、くつきりと白く、胡粉をおとしたやうに、水草の花がほのめきいでゝ、花瓣がさらさらと、かすかに音をたてる。薫をもつてみたされた空氣は、輕くわが袖をなぶつて居る。

（雨評）あつさりと出來たところはよいが、少しくありふれて、且つ、もの足らぬ心地がする。

◎嫁く人　　越後　水野やすゑ

富士子さんお目出度うね、とり分けあなたには御目出度のね。

時も春、人も春、春を飾つてうつくしい松飾の内に昨日は結納がすみましたつてね。

私、他事とは思ひませぬわ、たから、首はないことではありませぬか、あんなに言つたのに、いつも他のことばかりいつてさ。

ほら、停車場へ送つて行かれたでせう。あの時、「私涙を含む人一人」といつたのは誰れ。

暑中休にね、風のそよふく中を、田圃道で話したでせう、そして、側の百姓にきかれたかと思つて、顔を紅くしたでせう。その時、何で打ち明けてくれないの、併し今はそんな怨はいひませぬよ。

嬉しいでせう。趣味も全じだし、あなた強ひて全じくしたのではないの。在學中には、そんなけぶりも見せないでゐて、探集になんか出るのですもの。一緒に山へも行かれたさうね、話したでせう、毛氈苔の花のさいてゐたところで、道が峻しくて手を引いてもらつたつて!! 事實は小説よりも奇だつて、あなたも思ひ合したら、どんな心持!! 私だつてまさかこんな目出度いことにならうとは思ひませぬでしたよ。

君は今人に嫁ぎぬ、この思ひ
　君言はざりき、我れしらざりき。

ね、さうでせう。

あまり深究はしないわね、

昨日は四時にお立だつてね、私朝から氣になつたわ。

あなた送りに行きましたか。でも、行きたいし、きまりもわるいし、

思ひつゝけましたよ。ます子さんとも話して、どうしなされたらうつて。

いゝのね、ほんとうにお祝ひするわ、

千秋萬歳の契（チギリ）も深く、つがの木のいやつぎつぎに、

玉椿八千代をこめて御睦まじく御暮らし遊ばせね。

嗚呼、側にゐなされば、脊中をうんとたゝいて上げたいのよ。

私上りたいんだけれど、夫の友達が、朝からつききりなの。

十一日には是非いらつしやいね。

去年はあなた病氣であつて「はげしかれとはいのらぬものを」とか「こぬ人を待ほ……」とかいつてやつたのですもの。

今年は是非にね。

あんまりからかひはしませぬから、遠慮なくね、

令夫人になつたとて、友達の交際だもの、いゝでせう。

やするより

一月八日

ふじ子様

(雨評) 結構は面白いが、餘りに詞づかひが下品である。

ゝゝ◎掌中の玉　　巖手　熊谷春子

朝未明、床を出でゝ、庭前に佇めば、夜明の明星燈々として、夙朝の景色彌心地よし、二度三度の鷄鳴に夢破られけん、ごろ／＼と雨戸明くる音、がら／＼と車の響も、漸く繁げくなりぬ。今や顏を雪がんとて、清水一掬すれば、掌中に玉あり。何ぞ。有明の月。

(雨評) 文も掌中の玉の如し。

ゝゝ◎女鐘樓守　　東京　倉重千惠子

研ぎ上げた銅の金盥の樣な夕陽が、紫ばんだ遠山から、平和に結實る千町田の稻に映つて、まるで黃金の海のやうである。肌寒い夕風が吹くと、紅葉が一つ又一つ、而も萬斛の詩情をふくんで、今にも夜の黑幕が被ひさうな黃昏時、田の中に茫然立つて居る案山子が、常よりも一沙憐れに見える。頰被りした姿にも似合ない、優しい聲を出して、手綱を緩く引きながら、馬子歌一つ、餘韻長く、馬も已が村へ歸つたのが嬉しいやら、元氣のいゝ嘶きが聞える。

遲くなつては、と、小走りに鐘樓に上つた。噫、此の撞木、父上が逝かれる三日前迄、幼い時から幾十年の間、誠心を込めて握られた此撞木、父の靈は、きつとこの內にこもつて居るであらう。幼い時に母を亡つた私は、天にも地にも賴みとする人は、父上一人であつたに。嗚呼、その父上は去る日永き眠につかれた、後に殘つた形身は此撞木一つ。都から歸つて來た人の話を聞けば、都では私位の年の娘は、海老茶式部とか紫式部とか、マガレットとやらいふ頭に結つて、星よ菫よと橫文字交りの言葉を用つて居るとやら。高い踵の靴で袴を蹴るよりは、田舍生活の私等の方が、どれほど氣樂だらう。私にとつては、金銀寶石をちりばめた大廈高樓よりも、父上と共に起き伏しをしたと思へば、どれほどなつかしいかしれない。まして、田舍育ちの鐘守風情の身には、都くさい風はいや。矢張、朝夕打つ此の鐘を、父とも母

ともに師ともに思つて、終生離れまい、此の村の犧牲とならう。否、寧ろ好んで女鐘守の名を殘さう。夕鳥を時に、旅人を麓の里に、骸を靜な墓に送つて、今夜も無事なれかしと神に祈りつゝ、一つ／＼萬身の力を込めて撞き終へた。

鎭守の杜の上に、曉の星が一つと、有明月の影が淡く殘つてゐる。いつもの樣に身を淸めるため、井戸端に行くと、柴の折戸の元に。野菊が一本。折つて父上の御墓に手向けやうか。否々、それよりも、憐み深い父上の御心に報ゆる爲め、永くもない花の命を、彼れが自由にまかせやう。雨の日も雪の日も明暮響く此の鐘を、村人は神とも佛とも思うて居るとか、寢よと打ち、起きよと響かす此の鐘も、父上が形身と思へば、懷しく、私の命のつゞく限りは、この撞木は人には握らせず、日毎夜毎いたはつて吳れる村人に、時を違へず報じて、其の厚い情に報いやう。さはいへ、里の人々よ、とく起きよと、力を込めて打つ鐘も、地にも響けと打つ鐘も、乙女の腕のかよわさに。嗚呼亡き父上の在ませば。霧を破つて

響く鐘に、人々は夢から覺めたであらう。而し／＼逝きましゝ父上は、いつの世に、永い眠から覺めらるゝであらうか？

（兩評）情は一寸可憐であるが筆が少しく亂れて居る。

◎新年の朝　　横須賀　渡邊比佐子

聞き馴れた背戸の小川のさゝ流れも、今朝は一入美に琴を調ぶるかの樣に聞えて、緩く、靜かに、若草萠ゆる岸の邊を洗ひつゝ、宮居の森を廻つて、遙かに遠く、かしこの文字を書いた樣な形に流れて行く。夕降り出したチラ／＼雪も、何時しか止んで、眞白く、丘の上を染めなして、社頭の松さへ緑りの操を如何にせばやと、枝の重さを苦んで眺められる。靄に包まれた垣根からは、ヌッと梅の拳の二ッ三ッを突出して、御目出度う御座いますと新年の祝詞を述べてゐるらしく、淡き星曉の影を浴びて寒く、梢を離れて一入艶に姿を落して香つた。今折戸を出て自分が汲んだ若水の桶深く、其の星影がまばらに沈んで動く／＼、其動く度に、星影の、梅の香と亂れては、馥郁と鼻の先を遮つて戯れる、何と

なく正月は樂しいと思うた、其れかあらぬか、折しも、東に高く、鷄鳴一聲、清く、朗に、宮居の森を破つて、この十戸の小村に太平の春を告げた。かと思ふと、ホノ〴〵初音山の頂が、紅く、白く、紫に明けて、希望の色淡く初空に滿ちて、東風さへ嬉し氣に松から松へ渡つては、新春の譜を奏つてゐる。ふと顧れば何時しか産れ出たる紫の薄雲、鶴の如きに延びて、雪の松の上高く、舞ひつ、踊りつ、遊んでゐる。

（雨評）心も辭もすべて今一入の文である

◎母校を訪づれた一節

横濱　小田切錦子

久振りで歸省した我は、叔母の許を得、今しも友と二人母校の門をくゞつたのである。何んだか嬉しくて〳〵たまらなかつた。今日は日曜の事とて、さしもの廣い運動場も、今日許りは、二三の履物の他は、何も見えない。只世話掛の名が、黒板に白く書いたのが、高くかゝつてあるばかり。扇形の梯子段を上つて、二階へ出た。とりつきの戸をがらりと開けた、高等三學年と薄黒い札が、淋しく柱にかゝつてゐる向ふの隅に、地圖が二本。其傍に、ふたのない水入れが、空になつてある、教壇の机の上に、白墨入れの箱と、其の上にかんじんよりで作らへた犬が、乘せてあつたので、自分のいたづらであつた昔も思ひ出された。次に入つたのが、一番氣憶のある日頃忘れぬ四學年の教室で、山側の後から四番目あたりが、自分の教へを受けた所なので、いつて見ると、よく風が吹き込んで困つた穴が、今も其儘ある。樂書をした壁や、墨や、繪の具をこぼした跡も、すこし薄くなつて殘つてある。しかし机や椅子は、皆新らしく引出しであつたのが、ふたを開ける樣になつて、窓も三つも增して、明るくなつてゐる。あゝ、こゝへ通つて居た頃は、家もあり父もあつたが、今は…………と又悲しい事を思ひ浮べて、無中になつてゐたが、漸く友にうながされ、心惜しくも廊下へと出た。裁縫室を見ると、美麗に箱がならべてある。道具も皆備へてあつたので、うれしかつた。あゝ、此母校は、來る三月のお祝ひがすむと、立派

に立かへられるのだと、先生初め皆よろこんで待つてゐると云ふが、私等にとつては、悲しい一つである。願はくば、このまゝ永久に殘し置き、思ひで種としたいのである。

（雨評）雨白い題であるが、筆の練熟が足らぬ。

〇元日　品川繁子

近き東海寺の除夜の鐘の音は、もろもろの煩惱を撞きくだきて、暗の底へ／＼と深くしづみゆき、新らしき年は今や來らんとす。春のまうけの銚子頭づめ、何くれとはやとゝのへたれば、しばしだにもと、二時過ぐる頃臥どには入りたれど、去る年のありし事ども、さまざまと胸に浮び出て、時計の針の音のみ耳にひゞき、常は淋しき表通りも、さすがは今夜とて足駄の響に人の住來の繁さぞ知らるゝ。長なき鳥の聲もきへて、いつとはなしにねむりぬ、醒むれば板戸引き明くる音、廊下を走る音に起出でゝ、若水むすぶに、今朝は手の冷たさも和らぎしやうなり。靜やかにさし上る初日の影は、光榮ある年を示すかのやうにて、空は一點の雲もなく、綠色に晴れ渡り、池の中島には友鶴の千代呼びかはし、白き羽袖をたをやかに舞ひつゝあるもゆかしく、今日のみは心にかかる塵もなき心地せらる。やがて人々も起き出て、召使へる者どもより祝詞をうけつゝ、とそくみかはし、ふと箸の祝ひも賑々しく終れば、衣さへあらためぬるときに、はや門に車のひゞきして、年始の客人は來ませるなりき。

〇海のほとり　東京　中村千代子

朝日のひかりに浴せんと、友とちさそひて、海のほとりにゆき、松の木かげにたゝずみ居れば、東の空より、きら／＼とまばゆき日の光は、漸々高くなりぬ。かく朝空たかく昇る日と、新らしき空氣吸ふ身の、いかに幸多かるべき。かゝる思ひと、かゝるたのしみは、海近くある身ならば叶ふまじきに、今日此地にありて、汐風に吹かるゝ心地よさを、都にまします我師の君に送りたく思ひぬ。

〇木の下　東京　池田市子

枕邊近い小鳥の聲に、夢破ぶられて、目を醒まし、かたむいた柴戸をあとに、さまよひ出て、行くともなく朝夕訪づれる木の下の切株の所に來た。休むともなく腰おろして眺めると、目前の小川は未だねむりからさめず、潮は次第に滿ちて、川が逆しまに流れてゐる。魚は靜かなのを悦こんで、はねて輪をかく事兩三度、蘆もいたく蝸びて、川が狹まくなつた樣な氣がする。後の方でようやくねむりから醒めた樣な聲して鶏がなくと、餘程經つて、川向ふからも微かな鶏の音が聞えた。都に得られぬ此の靜かさ。なんで此わび住居すてられやう。いけぬと承せた兩親に、むりに願つて、身は病の鬼神に見入られて、希望なく、なれたポチと小間使、思へばあれも世にもあはれな不幸者、母はなく弟兄もなく、只一人の父は酒好きで、世にたよるものもなく、辻占賣してはかなく日を送つて居たのを、或日たはむれに辻

占を買つたのがえんで、どうぞあなたのおそばにさしたつて、さうさう此片田舍に私くしと一所にわび住居 別にたれとて氣をおく人もなく、只時々里の小供が遊びに來て、節面白い歌をうたつて笑ふより外に、これといつて仕事もなく、變つた事といつては、先日、いつもの樣に朝早くここに來て、いつもの樣に首うたゝれて、歌袋の料にもと考へ事して居ると、ふいに肩を叩く人、たれかとふりむくと、わらじばきの巡査、名住所を問はれ、其上に家に送られて來て、花（小間使の名）をおどろかした事。あゝ、都はなれてはや三年、人生はづか五十年、あとあます三十路あまり、いかに變つた事があるだらう、それにしても、運命の神はいかに妾をあやつて下さるだろう。思はずほつと息つくと、妾にとびつくものが。あつとおどろくと、ポチはうれしさうに尾を振つて。

○吹雪　　越後　松永繁子

灰色の空は冷い笑ひをもらして居る。

　降り積つた白雪二三寸、大地にまきつ卷かれて、粉と亂れて飛ぶあな凄じい大吹雪。

惱れ軒端に集ふ雀の群、飢や攻めよする寒さや凌ぎ難さか悲しい音に鳴く。衣幾かされきるも尙たへがたき寒氣火箱により添て、心おちつけば、別れにし父上のつくづく思ひ出されて。

　妾の父は酒が好き、すきな酒ならのむがよい。けれ共、呑めば野暮をいふ、仕事はせぬ。剰さへ、二日も三日も寢とほす。なぜ好きな酒をのんで寢なければならぬ程のむのー。よい程にしてよせばよかつたものを。妾の父上は酒をのまれた、否酒にのまれたといつた方がましし。若し妾が御諫め申しあげたら、少しはよかつたかしらん、と思つたからとて今は及ばぬ。これ位にしておよしなさへと御勸めしたかつたけれ共、何をいつたとて、私はまだ母上のみ膝の上にふくむ乳房のあまさが、さとられぬ年。母上は心いためて、幾度御諫めなすつたには、ちがいない。併し女ですもの、とり合はず、手荒き夫のかひなによりすがりて……あふれ出づる母上の涙…… 夫には知れまいが、妾の頰へこぼれたことでせう……

　酒に溺れた父上…… 祖父母の目がれにはづれて、家を離緣されてしまつたのー、嗚呼妾と母上を殘して家を出なさる時、酒は一生涯決してのむまいとざんげなされたであらうか…… しみじみ後悔なさる程の心があつたら、祖父母さまだつて、親子の緣をよもやたゝれますまい、

　父上は好きな酒を飲んで、妾を世に沈ませてしまつたの。

父上はなぜに酒などのまれたのか。

一きは、はげしい吹雪は、怨める樣にふきすさぶ。聞けば物乞ふこゑ。

　破れたる笠に、綿さへはみ出でたる衣、あはれその目は盲目、雪ふりかけられて白さがまさる髮の毛、六十や三つ四つ越したる老いのものもらひ。聲ふるはせて門に物こふ。唇にも頰にも血汐の通ふかげわづか。あはれさに、握めし二つめぐめば、ほろりと落すなみだ、やせこけたる頰をぞ流るゝ。あはれ如何なる人の果か、いとゞあはれなる。

暫くこの吹雪を凌がせたまへと、椽に腰おろす。あふせかゝる如く火

箱にあたれば、かつばのつらゝやゝにとけて、庭にぞおつる、滿身の老いの血汐も、一時にめぐり初めけん、心地よげに握めし食ひて笑ふ。

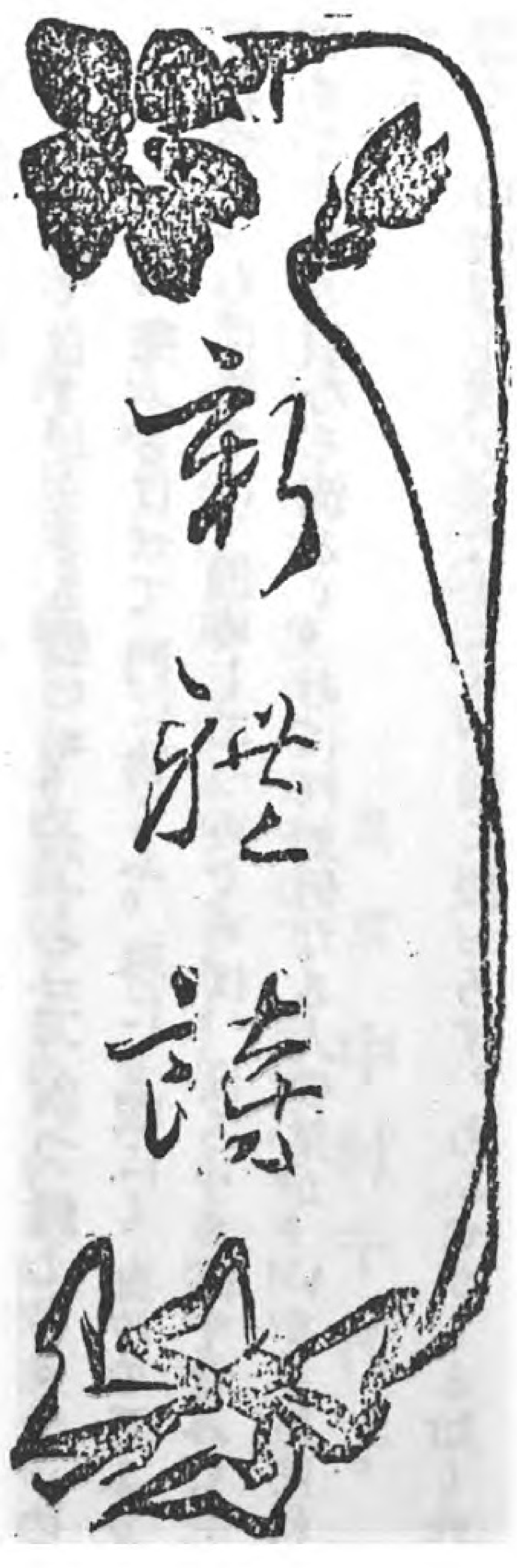
笑みの眉もたけしもしばしのま、やがて涙ぐむ………。

酒のみのせがれが・巡査さまの御厄介に……　夫も亦酒の爲め、五度も赤きもの着たあげく、牢屋の鬼となりました。せめてせがれだけでも、なほつてかへつてくれと願つたが、これもよしなく、牢屋で同じさい期。子を持つても夫を持つも、酒のみはこり〳〵です……妾は不運ものです……。併し佛さまのくどくに依つて、人樣の御なさけに、まーこーやつて……。玉なす涙をほろ〳〵。

酒ずきな妾の父上、その身のはての思ひ出さずに居られず、つゝれきぬきてよしんば、しばし人の軒に立つとも、天地なのみつくさむずる大吹雪の中に、その身を投げこまねばならぬ、と思ふと、自分は思はず身震した。

限りない悲哀さ、追悔さにあふれ出づる涙ありとは知らずして、老いの身はよろめきながら、大吹雪のたゞなかへまきこまれる、今し血汐がめくり初めた許りだが、

冷い笑ひ聲は灰色の空のあなたに響いたやうである。



日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

春病みて（姉を思ふ）

大阪東區横堀六ノ四十六　木村春江子

夢に見えし面影は、
現の奈邊に消えにけむ。
袂ゆかしき紫に、
模様と見えし白梅は、
床なる瓶に匂へれど、
根高く結ひし高まげの、
うしろ姿も殘らねば。
障子の日影淡くして、
病める頭の重きかな。

姉の嫁きけむ十八の
春は今身にめぐり來て、
去年を限りし肩上げに、
淋しうなりし圓肩や。
女となりぬ!!吾れなれど、
今日しももるゝ羽子の音に。
さすがむかしのしのばれて、
姉と睦びしやり羽子の、

七ツでそれしうらみよ、さめし夢路のあたらしき。
都とひなの別れ路も、雁の便りに事よせて、
年に逢瀬もまちにしか。二人きりなる姉妹に、
母のたびてし「よはひ」をも、十九なる夏にふりすてゝ、
山緑なる古里の櫻が下の墓に、
何しに一人逝きましし。
年のはじめの今日なれど、千代の睦月の今日なれど。
かへらぬ人を夢に見て、（病める頭の重きかな――。）

（雨評）調限りなく優美に、悲哀の情もこもりて、先づ立派なる詩である。

地

新年

岩手縣磐井郡藤澤村下町　熊谷春子

梅に近き、奥の一間に、
今日をかざる、注連繩床し。
松竹の、描ける軸は、
ふりたれど、父のかたみよ。
妹は、今日の一日に、
生まれたり、幸深からん。
姉上は、去年の今宵に、
嫁ぎけり、幸おほからん。
七草の、朝餉を終へて、
母諸共、若菜つみしが。
あなはかな、今はしも、
母はいまさず、父もおはせず。

（雨評）可愛らしい詩である。

人

折にふれて

東京牛込左内坂町三七　平塚白百合子

寺院の夕がね高なるや、沈みそめたり日の光り、
西のみそらをにほはして、たそがれせまる野面道、
小わきに鎌や、肩に鍬、女夫の二人いそぎゆく。
夕日は除々にかげろひて、なごりの光りはほのめきぬ。
二人はしばし膝まづき、夕のいのりさゝぐるや、
ふたゝび寺院の鐘なりて、つかれし人をふところに、
いだくがやうに夜の帷たれぬ。

（雨評）詩心のはたらきは、一寸見える。



秀逸

○◎鐘の音

越後　水野やすゑ子

我の胸深く秘めておく　怪しの鐘の音よきけ
殷々深くひゞきては　萬のものをやきつくす
愛の焔の強きうた　浪うつ樣に寄せやせん
我が胸深く秘めておく　怪しの鐘の音よきけ
切々細うひゞきては　淒愴そゞろ迫りきて
世にもあられぬ悲しみの　涙は玉とおちやせん
我が胸ふかく秘めておく　怪しの鐘の音よきけ
寥々遠くひゞきては　野こえ山こえ聞くものゝ
喜みちて夢のごと　微妙の歌に醉やせん
我が胸深くひめておく　鐘は怪しう妙なれど
釣るや情のつなよわく　愛の小槌に打たれねば
永遠にひゞかぬ鐘の音　鳴るやいづれの春ならん

（雨評）詩情こもれる鐘の音さは思はるれど、少しく朦朧の嫌ひがある。

◎都の友へ

東京　倉重千惠子

露けき袂分ちしは、　昨日の如く思ゆるを、

流るゝ日はよどみなく、　三年の春はめぐり來ぬ。
今宵は月もおぼろにて、　花の下ぶし長閑なる、
歩むにかろき庭下駄の、　獨り木蔭に物思ふ。
今や見頃の櫻花、　空には月の影おぼろ、
まことに樂しき春の宵。　されども、一人見ん事の、
あまりに惜しう候を、　都の月は如何なりや。
九段上野と美はしき、　花の都の春日和、
袂つらねて友垣と、　そゞろありきや仕玉はむ。
あゝ、其の折りに、その折りに、　田舍乙女の我が身をも、
思ひ出させ給うてか。　幼ななじみの君と我れ、
例へ御便りたまはねど、　忘れ侍りし時もなし。
この卷き込めし櫻こそ、　三年の昔御君が、
かざし玉ひしそれなるを、　淸く靜けき故園を、
思ひ浮ばせ給はでや。　花は卷き込め參らせど、
心殘るはおぼろ月、　嗚呼卷き込めん術もがな。

（雨評）意味は聞えて居る。

◎歲暮感懷

美作　鈴木鍍子

光陰矢より早しとや、　な言ひそ、言の陳りぬるを、
眞理は千代にかはらねど、　迫りぬ今ぞ年の暮れ」。

春爛漫の花のいろ、　あせてはめづる人もなく、
夏したゝらむ緑葉も、　立つ秋風に枯れそめて、
遂に果敢なく逝きぬなり。　我が世の春もかくてまた、
空しくすぎて夏ゆきて、　やがてぞ遭はむ冬の風、
思へば更に身にぞしむ。
あゝ駘蕩の春の海、　榮と功勳の燦爛と、
燃ゆる光りにあこがれて、　花よかすみの船出せし、
その世は夢かうつゝかも、　あゝ思はじな、若き愁、
秋にも燃ゆる紅葉あり、　冬にも咲かむ、雪の花、
眺めは永久につきざるに。　（終り）

（雨評）後半、今一層の工夫を要す。

◎お美姉さん

下總　小澤よし子

絹糸ひいた春の雨、　花でなたかい京の町、
お美十八京女、　薄化粧して口紅さいて、
斜にさした蛇の目傘、　金の蒔繪のぬり下駄に、
柳小路の灯ともし頃を、　たれとたれやら二の字の跡を、
心そのまゝふみしめて、　思ひ亂るか、なよ／＼と、
うつむきがちにたどり行く。　ほんにいぢらし、あの姿。
雨になやんだ海棠の、　姿そのまゝしほらしい。

（雨評）佳

ゝゝ〇鶯

遠江　鈴木いわ子

「夢に現に幻に　君を戀ひし甲斐ありて、
今日艶麗き御姿　見る嬉しさよ……さりながら、
幾月戀ひし吾心、　憐さ思召し給ひれ」さ
梅に縋りし黄鳥の　やさしき聲も、仇なりき。
他に友さても無き梅の、　應答やせんさ振り上げし
美き面輪に、愛らしう　二ツさ笑へば、ハラ／＼さ
散限りなく散る花を、　恨めしげにも黄鳥は、
聲も、しさろに、亂れつゝ、　散り行く花に云ひけらく、
「扨ても、無情の君なるか、　地によき友のあるにや」さ。
されご落花に應答なし。　小さき此の胸、裂けてよ……さ、
涙にくれし鶯の、　何處さもなく去り行きて、
悶え苦み嘆きしが、　梅が根元に璉貫く、
再び歸り來ざりしが、　夫よ、黄鳥の和魂か。
咲く水泉の優姿、

ゝゝ〇春の宵

橫須賀　渡邊比佐子

夕の雨の紫に　晴れて月よき佛の
橋に吹かれて行く影の　月も二八のやさ姿
水に鏡の蛇の目傘　寫して渡る春の宵、

緑も深き青柳の、解けつ結びつ亂れつゝ、
夜風になやむ振袖の、長きうらみを拂ひつゝ、
鶯色の下駄鳴らし、柳の門に消えて入る。

ゝゝ○鶯を吊ふ　　東京　三輪千代子

梅は匂へど、鶯は　如何になししか、昨日今日、
一昨日去りし其後は、絕えて姿も見せざりき。
竹椽近く立ち出でつ、なれしいつもの梅が枝を、
柱によりて眺むれば、待たぬ雀の聲ばかり。
あながま、雀あながまや、おり立つ庭の忘れ草、
つゞく小蟻のはて見れば、小雀さわぐ聲の下、
斯はしなしたり、昨日迄　今日迄待ちし鶯は、
待つに甲斐なき空蟬の　はかなきからぞ止めたる。
「やよ、鶯よ、鶯よ、なれの聲きく時はしも、
おのづと心さわやかに　學びの道を辿りけり。」
「嗚呼、鶯よ、鶯よ、一昨日きゝし其聲を、
なれが名殘の歌ぞとは、袖の白露しらざりき。」
涙にくもる眼をあげて、蟻には甘きものをやり、
秘藏くし小箱を取りいでゝ、かなしさかくす柩かな。
「汝が慕ひ慕ひ來し　匂ひもふかき紅梅の、
花の枽の下影に、安くれむれよ、鶯よ。」



東京帝國大學講師　佐々木信綱先生選

天

蝶　　東京府下豐多摩郡下落合村五三六(中の局)　石川れん子

菜の花の路ゆく君が袖振れば
　ふたつとなりて飛ぶ蝴蝶哉

(評) 路ゆく君の姿も又、蝴蝶の如く、うつくしかるべし。うつくしき歌。

地

千鳥　　西須磨　有村保子

家まばらまばらいそまつさよふけて
　かたむくつきにちどりしばなく

(評) 一二句の疊句法も耳だゝず、漁村の冬の夜のけしき、さることゝ思はる。

八

東風　　磐城國双葉郡長塚村大門　木幡きよ子

東風吹けば思ひ捨てにし古里の
　茅屋の梅も今は戀しき

（評）かの菅公の東風吹かばの歌とは趣變りてさるかたにすぐれたり。

秀逸

◎

舞あかき櫻がもとの走り舞
　鼓うつ手に花ちりかゝる　岩代岸野菊子

（評）かつて余も又かゝる着想の歌をよみし事ありき。無論暗合なるべしと思ひて選びいでつ。

◎春月

花かげに泣きて別れしそのかみの
　人なつかしき朧夜の月　飛驒南みれ子

◎里知らず

乳母が家は葵の花畑さきつゞく
　中にあるなり蠶飼ひて　東京平塚いさ子

◎ある海濱の旅館にて

松風もしづまりはてゝ湖越しの
　鐘に暮れ行く濱館かな　遠江須部たまき子

◎

きえのこる雪間をわけて少女子の
　若菜つむなり岡の松原　兵庫脇本岩子

◎若草

春雨のしづくぬるみて賤が家の
　垣根のもとにもゆる若ぐさ　靜岡波逸實子

◎梅

たきゞ買ひて歸る少女の袖の上に
　一ひら落ちぬ軒の白梅　近江杉村玉野子

◎

すまのうら家まばらなるいそ松に
　つきかげさえてちどりなくなり　須磨有村丈子

◎

雨の夜ないと淋しらに糸車
　引きておはする御母こひしき　越後松永松葉子

◎遠村霞

のぼる日のほのかにみえて春かすみ
　匂ひ渡れり遠の村里　新潟岩本芳子

◎

しばのとはかたくさゞしてとふ人も
　まれなる庭にうぐひすのなく　須磨有村つれ子

◎

順禮に道敎へやりて別れけり　岩代岸野常子

讀者文藝

睗がれ寒き山かげにして　横須賀　柏原美奈子

◎梅
上京や梅ある家の小鼓を
立ちさまりきく夕月夜かな

甲

○年賀
日さ月のかはらぬ影にならへ君鶴の齢の千代も限らで　筑後　藤村多喜子

○
きえのこるゆきまにもゆるはつわかなほきつゝきみにたてまつらばや　須磨　有村たまつ子

○旅行
甲斐が根をこゆる旅人心せよ藤つるはへてわたすかけ橋　埼玉　横田稻子

○
谷ひさつへたつるやまに小男しかのよひ〳〵なくぞさびしかりける　須磨　有村繁子

○山邊の梅
徒らに犬のみ吠えてみ山邊は梅の盛りを行く人もなし　殿手　熊谷春子

○平民
位山のぼらぬ身すら世にたゝん惠の露のかゝる民草　埼玉　横田秋子

○早春の鶯
香ひだもふくみもやらぬ梅が枝にまだきの春をなけるうぐひす　東京　牧千春子

○折にふれて
いたづらに過ぎし昔を偲びつゝ我がかぞいろの君をしぞ思ふ　大阪　小谷きう子

○折にふれて
かごの内に年をむかへし小鳥さへうたひそめけり春や知りけん　秋田　三浦しや子

○見かくれの梅
いかで香をしなさのかみのおくらすば垣をへだつる梅を知らめや　靜岡　渡邊實子

○時雨
いづこより時雨の雲のかゝりけんさやかに照らす月ぞさ思ふに　神戸　足立ゑい子

○
母戀ふるおのがおもひにくらべてもおもふは母のおもひなりけり　東京　芦原浦子

○雪中松
さきはなる小松が原はしろたへのゆきのはなさくふゆぞのごけき　佐賀　藤松りか子

○雪中松
ふりつもるみ雪を見ればさきは木のまつの操はしろくもあるかな　和泉　福原苴子

○
小原女は柴に腰して北嵯峨の彌生の春を鳥の聲きく　美濃　武田艶子

○松の雪
冬かたの天きる雪を白妙のかつぎかさ見る岸の姫松　神戸　足立あさ子

○驛
古へをしのふ並木の驛路に暫しさゞむる乳車かな　東京　中村千代子

○
かぎりなき天津みそらをあふぎつゝなきはゝしのぶ冬の夕ぐれ　須磨　有村むらさき子

○亡き從妹を吊ふ
眺めては夢かさぞ思ふ亡き人の在りし世ながら笑める面影　美作　鈴木鐘子

○
わがやどののきばの梅やさきぬらんのごけきまごに風かをるなり　須磨　中根滋子

○若菜
うすこほりわりつゝささのかなしごが市にひさぐさ根せりつむなり　須磨　有村紫芳子

○雪晴の朝
姉君の調ぶる琴の音に和して鶯唄ふ雪晴れの朝　澀木　安藤登喜子

乙

○雪だるま　東京　水田ふみ子

蝶のまひ花の笑ひにひかれてや今日までのこる雪だるま哉
山口　岡本ふさ子

○除夜

表にはみつのはしめの用意してふすまひさよの除夜の團かな
須磨　有村もさゐ子

○

うはにさてうなゐ子らがわかなつむかごのなかにはくさもまじれり
小澤まゆみ子

○香取の宮にて

鷺なけば神杉こむる朝霞のはれまに見ゆる白衣の童
東京　平塚白百合子

○題しらず

たから舟うるこゑほがらに宵の間や都大路をあられたばしる
神戸　藤　幸子

○

我がやどの松が枝白く積りたる見ればなつかしこぞの初雪
名古屋　山根しげ子

○

あふき見れば月も昔をかたるかと立すくみたる柳木かげや
東京　倉重千惠子

○雪中松

降りつもりふりつむ雪もものかはさかはらぬ御代に倣ふ松かな
伯耆　錦織千代子

○春海

島山はかすみの模糊にかげうすく淼原万里たゞ春のかぜ
伯耆　錦織さち子

○御來屋の磯にて

こけ洗ふみくらの岩の波高くしぶきに暮るゝ隠岐の島山
大阪　木村春江子

○七草

おもしろや都大路の家毎に術勇ましくはやす七々ぐさ
埼玉　横田やな子

○生樅

教草つめる心のうなゐ子や終に野山に咲さかゆらむ
須磨　有村さみ子

○

つき摘みたになへたつるわがいほのやまのあなたに小男しかのなく
神奈川　飯田榮子

○折にふれて

清めする神仕へ人さながらに齒さもなるべき朝のさまかな
在濟國　福田つる子

○

あやしげの毛衣ほせる破垣によりそひつゝも羊れむれる



内藤鳴雪宗匠選

天

歌麿の繪のこゝろあり春の宵
下總佐原　小澤まゆみ子

地

神の顔佛の顔や春寒き
東京芝區南佐久間町一ノ三酒井方　玉川いし子

人

若草の中に中好き姉妹かな
筑後三池郡銀水村宮部　藤好多喜子

うぐひすも來さうな雨のはれ間哉
春の夜や酒に泣く人笑ふ人
山の湯の湯氣紫に春の月
古塚や蔦の葉に這ふ蝸牛
背戸口に雛の聲や猫の妻

新潟　岩本芳子
駿手　熊谷春子
横須賀　渡邊比佐子
山口　岡本ふさ子

讀者文苑

春風にさそはれ出り從弟同士　東京　芦原浦子
長き日や山鳥の尾に風渡る　埼玉　永井文子
梅活けて女主人の茶室哉　大阪　木村春江子
吾戀のそれにも羽子の裏表　東京　三輪千代子
かご松に雨の三日や破れ紙鳶　在濟國　稲田つる子
柩舁く人に梅散る野道かな　蓮女
鶴百羽野に放ちけり春の風　岩代　岸野常子
千金の家を借りけり梅の花　仝　仝
干物に薄き日あたる冬木かな　横須賀　柏原美奈子
西行も濡れけん小野の時雨かな　仝　仝
初春や神にも似たる伊勢の人　飛驒　南みれ子
温き日や梅さく軒の尉と姥　仝　仝
若草や人の牽き來る驄馬二頭　相模　安藤登喜子

女子教育講演會

久しく中絶したりし女子教育講演會は先月より毎月一回開催、諸名家の講演を乞ひて、その筆記は毎號本誌に掲載すべし、而して本誌讀者諸孃はこの講演會に無料傍聽するを得ることゝせしが、女子新聞發行準備の爲、事務多忙につき、三月まで延期したり、

定價

冊數		定價
一冊	前金	貳拾錢
三冊	前金	五拾七錢
六冊	前金	壹圓拾錢
拾二冊	前金	貳圓拾錢

全國逓送無料

廣告料

五號活字一行廿三字詰

	四半頁(十六行)	半頁(三十二行)	一頁(六十四行)
特等	六圓五十錢	二十圓	三十五圓
一等	五圓	十一圓	二十圓
二等	四圓	九圓	十六圓
並等		七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事(但郵劵代用一割増の事)◎前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收さ御承知ありたし◎領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし◎爲替は四谷區霞ヶ岳町卅九番地中川愛氷宛に願ひたし◎御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十二年一月廿八日印刷
明治四十二年二月一日發行

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
編輯兼發行人　中川良平

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
發行所　女子新聞社

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　中屋商店活版部

懸賞募集規定

従來の如く、兼題、及雜題和歌、短文、新體詩、俳句を懸賞募集す、その規定左の如し。

すべて天地人の三等に分ち、天は金壹圓、地は金五十錢、人は金三十錢を賞與し、猶選者に乞ひて、特別秀逸の作ある時は規定の天賞一圓以上五圓迄の賞金、又は名家の式紙短册等を賞呈する事あるべし

投書用紙は半紙に限り、短文新體詩はもとより、兼題も二つとも別々の用紙にしたゝめて、姓名を其傍に記すこと、但し投稿は下段に印刷せる投書箋を切拔いて添ふべし、投書箋は一人一枚に限る、投書箋添付なき者も選に入るを得べけれど賞品を呈せず、但し一人に付兼題和歌(二)雜題和歌一首づゝ、新體詩短文一篇づゝ、俳句五句迄とす、而して〆切は前月十日までに着するもの。

右規定に違反するものは、入選するも賞品を呈せざるのみならず、其投稿を沒書にすることあるべし

投書家注意

◎投稿は嵩多き時は開封(第四種郵便物として)にて願ひたし、毎回不足税を徴收されて迷惑尠からず。

◎投稿には用紙に天地左右をあけ、少くも綴るに差支なきだけの餘白をあけられたし。

◎投稿用紙は必ず半紙を用ひ、葉書又は並外れの廣き紙また狹き紙、薄きロール紙等は御免蒙る。

◎入選して賞品を得られんとする方は、この頁を隈なく一讀せられたし。

◎投書箋は一枚一人に限る。

◎入選の時、賞品を得んとする投稿者は、此用箋に住所氏名を詳記して、原稿に添付せられたし。

女鑑 第十九年第三月號 **投書箋**

投稿者
住所氏名

一國光社出版教授參考及家庭用書類

理學博士坪井正五郎先生講述
元文部省體操遊戯取調委員
井口あくり可兒德川瀨元九郎諸先生共著
高島平三郎坪井玄道
人類學講義 全 定價金壹圓拾錢 送料金八錢

高等師範學校教授文學士松本孝次郎先生著
體育之理論及實際 全 定價金壹圓參拾錢 送料金八錢

家庭に於ける兒童教育 全 定價金五拾五錢 送料金六錢

水產講習所長松原新之助先生閱
水產講習所技手石田鐵郎先生著
水產製造論 全 定價金壹圓貳拾錢 送料金拾錢

三輪田女學校長三輪田眞佐子先生著
女子の本分 全 定價金貳拾五錢 送料金六錢

三輪田女學校長三輪田眞佐子先生著
女子處世論 全 定價金貳拾錢 送料金四錢

東京高等女學校長棚橋絢子先生著
女道叢話 全 定價金參拾錢 送料金六錢

生田目經德先生著
雅文消息集 全 定價金貳拾五錢 送料金四錢

新潟縣師範學校敎諭平野秀吉先生著
國語聲音學 全 定價金六拾錢 送料金八錢

清儒唐芸洲先生原著 日本百東持中先生譯解
日清對照通俗文範 全 定價金壹圓 送料八錢

內國通運株式會社編纂
日本里程地圖 全 定價金參圓五拾錢 送料內地金貳拾錢 清韓金五拾錢

福本日南先生著
筑前誌 全 定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

北海道廳拓殖課編纂
北海道殖民圖解 全 定價金八錢 送料金四錢

東京高等師範學校敎諭樋口勘次郎先生著
教育者と國家社會主義 全 定價金八拾錢 送料金六錢
島田三郎先生序小畠幾次郎先生著

腦力增進論 全 定價金參拾五錢 送料金六錢
小畠幾次郎先生著

體力增進論 全 定價金四拾錢 送料金八錢

東京美術學校敎授島田佳矣
同校卒業生野口俊尾兩先生共著
女子技藝編物模樣圖案 五冊 石版摺極彩色 大和綴美本
定價松の卷金四拾錢櫻の卷藤の卷各金五十錢
菊の卷、梅の卷各金五十五錢
送料各金四錢

土方伯題辭、毛利公母堂、三井男夫人、遠山女史題詠
靑木子夫人、松村理學博士、落睨學、棚橋女史、山脇女史序文
寺西緣子著
九重編造花法 每卷首二尺に三尺の石版極彩色大附圖あり
定價松の卷附豫修法金九拾錢梅の卷櫻の卷各金八十錢
以上既刊菊の卷、蘭の卷續刊
郵稅各金八錢

發兌元 東京市京橋區築地二丁目廿一番地
電話新特八八番、二六九三番
振替貯金口座壹壹七八番
株式會社 國光社

大賣捌 東京、東京堂、東海堂、良明堂、至誠堂、須原屋、北隆館、文魁堂、春祥堂、上田屋、榮進館、〇大阪東區北久太郎町積文社


Nakajimaya.
K.OHARA.
京橋區南傳馬町壹丁目
電話本局、七弐壱、一〇八五
絨毯リノリーム・マット・ズック
室內裝飾敷物
毛布・籐掛・羽根布團
卓子掛・ナフキン一式
中島屋 小原久兵衛

女鑑

明治四十二年二月一日發行
每月一回一日發行 第拾九年第貳號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

